

# ポーンギルドの付与術師

キョウさん。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エンチャント、それは武器や防具、アイテムに能力を付与することである。

付与術師、エンチャンター、それはそれらを行える者である。

知らずに迷い込んだ世界で、かつてプレイしていたネットゲーム準拠の規格外の付与能力を持ったオルカは自らの食い扶持、あとちよつと遊びたい欲をもとに強力な装備を造り、尖らせ、そして気がつけば幾多の人々を巻き込んでいく。自らが規格外であることに悩まされつつも、ときにぞんぶんに力を振るい、ときに自らの力に反逆され。

そうしてたどり着く道、彼が望んだこととは――

「ウグーーーーー」

呻けオルカ、がんばれオルカ、まけるんじゃない。

★はクソ挿絵あります（・ω・）

小説家になろうにも投稿しています  
リハビリ作です

## 目次

プロローグくたすけてく	1
1話―メイリオの短剣くオルカはオルカく★	8
2話―メイリオの短剣くポーンギルドく	15
3話―メイリオの短剣く付与術師く	23
4話―メイリオの短剣くくずの集まりく	30
5話―メイリオの短剣く銀の☆3杖く	37
6話―メイリオの短剣くD o t d o i t く	51
7話―メイリオの短剣くトロールとろとろく	59
8話―メイリオの短剣くw i l l s m i s く	68
9話―メイリオの短剣く女王の王冠く	77
10話―メイリオの短剣くポケットの中く	88
11話―メイリオの短剣く魔王剣く	98
12話―メイリオの短剣くチュケケく	106
13話―メイリオの短剣くマジカルミラクルく	115
14話―メイリオの短剣く夕暮れの写真は苦いく	125

プロローグくたすけて〜

『何よりも前に、まず軍備を整えなさい』

ニッコロ・マキャベリ

自分は、礼儀というものは武装してこそ通るものだと思っている。小さな、まさにマジカルチックな工房といった場所で目の前の剣をいじくりまわしながら、自分はかつて自分がこれでもかとやりこんでいたとあるネットゲームのことを思い出していた。タイトルはマイナーゲームに分類されるものであったそれは10年以上の月日を経て古くなれど、愛着をもった一部の熱心なユーザーによって維持されていたものだ。

そしてそのゲームのスキルに限りなく近い、“自分の能力”も。

「懐かしいなあ」

ふとつぶやき、目の前の“魔力のこもった剣”をしつとりと見つめる。

素晴らしい、自分ながらいい仕事をしたものだ、もともとアイテム収集家であった自分にとって、新しいものを作るといふのは本当に心が躍る。名前をつけるときなど身震いがしてついつい手元の手帳をまるまる1ページ使って設定を作り出してしまうほどだ。

自分によって“エンチャント”のされた剣を鞘におさめ、ふと疲れたと水を一杯、そして横になる。ひと仕事終わるといつも眠くなるから目を閉じて、そして自分がこの世界に来たそのときも、こうだったなあと思いまぶたに馳せていった。



付与術師、“エンチャンター”というものを知っているだろうか。

それは媒体によってさまざままで、とあるゲームでは武器への能力付与ができる鍛冶じみたものだったり、とある漫画では味方の能力を強化するエンチャント魔法を付与できるものであったりする。自分がプレイしていたネットゲームにおいてはおおむね、それらが複合されたものと言ってもいいだろう。

ネットゲーム、されどネットゲーム、たかがネットゲームである。レベルはもちろんカンストさせ、しかしマスターしたのはただひとつの付与術師、時間や資金をつぎこんで無数のアイテムを手にしてもそれは虚構であり、しかしながらその虚構を集めることは自分の生き甲斐だった。集めたアイテムは無数、数知れず、とはいえゲームで人に覚えられるほどではなかったと記憶に残している。

明日はアプデ日だ、と思うと眠りの前のひとときも大変に心が跳ね、まぶたを閉じるのが気づけば明け方だったのだろうか、空は明るくあぁしまった、起きた瞬間遅刻を確信したとはこの瞬間だろうか。問題点としてあったのは周囲はレンガ造りの建造物ばかりで住み慣れた白い天井ではなく、おまけに下にしかれていたのも砂利道で飛び込めば優しく受け止めてくれる母のようなおふとんではない。

母に先立たれたかのような感情を胸に砂利を触り、それが実物そのものの感触とともに指先を白く汚したのを見て、身体にまとった衣服に染み付いた寝汗の感触もあわせていまいるこの場所が、ほかでもない現実なんだろうと考えた。というか直感した。

「ヒエーツ……」

口癖だ、これで心を落ち着かせるのだ。

ふと気がつけば自らの着ているこのやけに装飾のついた割に茶色の、地味な色合いの衣服は明日のアプデを待っていたネットゲームの自キャラが着ていたものではないか、なんということか寝てるあいだにコスプレまでさせられてしまったのだろうか、はてそれにしたってこここの場所に心当たりがない。どこかの袋小路ということにはわかるのだが近所にレンガ造りの場所というところとショッピングモールの隅の喫煙所の壁くらいしか思い当たらず、なぜ自分がここにいるのかというのかにまた疑問符を浮かべることになった。

「しようもない、歩いてみなきやだ」

しようもない。

五・七・五。

開けたとおりに出ればどんな場所か、せめて地名くらいはわかるだろう。おまわりさんには笑われるだろうが事情を話せばキツと真面目な顔をしてとりあってくれるはずだ。我被誘拐者ぞ、我事件被害者ぞ。

そうして歩いていたらああ、すいませんそこを通してくれませんか。大柄な男と小柄な取り巻き一人が道をふさぐように現れたではないか。ここは人類世紀末、もはや我らに救いはないのか……いや、もしかすると心配してくれて声をかけにきてくれたお兄さんかもしれない。

だがおつと失礼と横を抜けようとしてもとおせんぼ、反対側も通せんぼで埒が明かない。とはいえ自分、臆病である、ヒエーツと言いつつ一步後ろに下がれば一步踏み込まれ、それが続けばもう一步、気がつけば壁際に追い込まれてしまっていた。

うう、すいません持ち合わせはないんです。

「だったらその服よこせよ！貴族のぼっちゃんのなら金になる」

「そうだそうだ！アニキは賭けに負けて腹が立ってるから早くしろ！」

「それを言うなよポンドー！」

ンマー貴族なんて古風な煽り文句を使うなんて珍しいチンピラなこと、と心にしまいつつ、しかしちよつと風が肌寒い、勘弁してくださいですかと一礼する、そしたら選択ミス、大柄な男は腕を軽くふりかぶり自分を殴りつけたではないか。

「やめ、やめてください……」

「だったらよ脱ぎ!!」

痛い……布の服では防御力はこんなものか、というか実際のゲーム中におけるこの服、*「付与術師のリユミエール」*だったか、それも確かエンチャント能力特化で防御力はほぼなかったなと思いつつ、痛みに震える肩をおさえる。そしたらもう一発今度は反対側の肩を

殴られるものだからたまらず自分は壁際に追い詰められて、たちまち尻もちをついて小石の転がる地面に座り込んでしまった。

痛い、なきそう、ないてる。

「どこのぼつちやんだか知らんけどよ、スラムの横道に入るなって教わらなかつたのか？ああ？」

「そーだぞー！アニキの言う通り脱げよ金持ちの！」

「一般人だし……」

「あゝあ？」

「ヒーツ」

脅迫めいた声に自分の心も身体も膀胱も結界寸前だ、どうにかならないか、のぞき見に着ている貧相な身なりの子供たちに助けてくださいと目線を送ったら無視されて逃げられた。神は死んだのだ、神はいなかった。

では何か身近にはなにかないだろうか——小石だ、小石が見える。目潰しにでもできるだろうか？見られている状況で?? ……されど自分、臆病である、わらにもすがる思いというものはあるのだ。とつさに小石を手に取り、願いでも込めるように握った瞬間。

——異変が訪れた。

「おや」

「小石なんて今更持っても……！」

握った小石に、見慣れた画面が現れる。

ああ、毎日楽しみにプレイしていたネットゲームで勝手見知ったエンチャント画面ではないか。

システムは単純であり、あらゆるアイテムには“スロット”がある、エンチャントを付与できる枠というわけだ。この小石はスロット2であるわけだが、そこにプルダウンメニューから選んだ付与エンチャントを挿し込むことができる、効果はまちまちで攻撃力をほんの5%増しにするものから、絶対に壊れない属性を与えることまで可能だ。

これは死の前の幻覚か、いやはやそれなら付き従ってみるのも悪くない。

エンチャントは完璧に覚えた専売特許というものの、自分は手慣れた

手付きでプルダウンメニューを操作しすぐさまふたつのエンチャントを取り付ける。武器によって取り付けられる付与は異なるゆえ、今回取り付けたのは遠距離武器に該当するものとなった、どうやらこの小石、*「遠距離武器」*の特性を持つらしい。

その瞬間、小石が黄色く、そして黒く、それぞれに対応した色に一瞬輝いた。それを見たこの大男と連れの小さいのは、「魔法か!」とまたふあんたじつくなことを申し上げたと思うと打って変わって早急に自分を止めようとかみかかってくる。だから自分がその大男に向かい小石を放り投げると――

「はずれエ!!残念っ!!」

「バーカー!」

――見事に外れた。

この自分、運動能力はからつきしである、とくに球技が苦手だ。

体力テストのボール投げは下から数えればまっさきに名が上がったし、ストラックアウトは届かない。いかんせんコントロールもパワーも足りないのである。それを今更思い出すとはなんとたる失態と考えるがしかし、自分の目に映るのはそれが覆される瞬間であった。

天をめぐけて放たれた小石はぐんぐんと重力に逆らい進むと、隣にならびたつ家の二階の窓あたりまで進んで重力に従い落ちてくる、だが違うのはその軌道だ。急激に進行方向を変えた小石は重力以上に加速し落下し、そして大男の脳天を捉えるのだ。

「いてッ」

「アッ」

「……?」

あからさまに自分に当たらない軌道をとった小石が自分の頭を小突いたのが気に入らなかつたのだろう、彼は後ろを向いてまた戻ってきたギャラリーが首を振るのを見て誰かが石を投げたんじやないことを確認すると、またこちらを振り向こうとするのだ。

だが――

「あつ、れッ」

戻そうとした首は戻らない。



なるほど、と痛む肩をおさえながら自分は思う、まるでゲーム世界のようながたしかに、少なくとも自分の仕掛けた付与効果エンチャントが発動している。『的中の』は文字通り投擲武器の命中率を+100%させる付与であり、そして今もうひとつの付与が発動しているのを目にして自分はこの世界の法則が目を覚ます前にいた場所と異なっていることを確信した。

「……アニキ？アニキ!？」

「ポンド、ポンド!!俺はいつたい……!？」

「あわわわわ…」

ふたつめの効果は『硬化の』。

さしずめ『硬化の小石』となっているのだろう、文字通り命中対象に行動不能状態を与える付与だが欠点として、硬化状態の相手は尋常でなく防御力が向上するという諸刃の剣である。相手のエンチャントや持続魔法、召喚は継続するスキルも射程内なら使えるので逃げのための付与だ。

大男は首を後ろにまわしたまま口だけを動かし、完全に身動きがとれなくなっていた。

取り巻きの小さいのがゆさぶつても解ける気配がなく、しかし、自分が立ち上がるとその視線はこっちを見た。

「お前、魔法使いだったのか!!」

「使えればいいなどは常々……」

「使えてんじゃん!!」

突っ込まれるのに視線をそらしつつ、自分はそろそろと固まったまま呪詛を吐く大男の脇を抜けてこっそりと逃げるのだ。三十六計逃げるに如しかず、行動不能の効果時間はそんなに長くなかったはずだし逃げるしかない。長距離走の苦手なこの身だが少しばかり距離を引き離して隠れるくらいはできるだろう。

走って、転んで、もっかい走って。

ギャラリーが見えなくなったところまで行ったところでどっと疲れが押し寄せてくる。

なんとという日だ、暴力とは無縁の生活だったから痛む肩がなお痛

い。

天を見上げれば太陽、地を見れば——四本脚のニワトリが歩いている。

ふと周りを見渡せば耳長の少女やら、角の生えたおじさんまでもが跋扈しているではないか。一様にこちらを見ているものだからいたたまれなくて、とりあえずとまた歩き出す。おっちゃん肉まんひとつ、悪い金はない、ダメ？そっかあ……。

さてはてどうする、まるで世界が変わったようだ、実際そうなんだろう。

考えるのはまたあの男が追ってこないかと、どこへ行けばいいのかと。

——明日のアップデに間に合うか、だった。

## 1話―メイリオの短剣くオルカはオルカく★

「やすいよ……ヤスイヨ……」

「ママみてかないのー?」

「しつ、落ちぶれ貴族よ財産を切り売りしてるのよ」

この世界に来て、まっさきに行つたことは金策だった。というより多くのネットゲームにおいて真つ先にやることはレベル上げか金策だし間違つてはいないと思うし、なにより空腹で満たされているのだ、食わねば何もできないのだからどうしようもない。

不幸にもクエストがないので経験値を稼げないしクエスト報酬で手に入る謎の食べ物などもないわけで、そうになると金銭を自力で稼ぐほかなくなるのだ。

「マインドポーションおいしいねえ……」

うわごとのようにつぶやきMP回復ポーションを呷る、まずは。

やっぱ飲むんじゃないかと思いつつフタをしめてインベントリに収納したそれは、ごく一般的なポーションだ、ゲーム内ではぐびぐび飲んでいたしなんなら濃縮したやつを連打していたが実際には相当まずいことが今わかった、今まで苦労してたんだな自キャラ。

ただそこに至るまでも、いくつかわかったことはあった。

この世界はとりあえず異世界、というもののなのは確定で、しかしネットゲーム準拠ではないということだ。ある程度ゲーム世界は完璧に回っていた自信はあるのだがしかし、聴いたことのない地名やエリアの話しか聞けなかった、なお情報量でヒールポーションをひとつ持っていていかれた。

そして自分に関してだが、ちらつと同人がもっていた剣の反射で見た感じネットゲームの自キャラと同じ外見になっているらしい。

趣味の黒髪をやや上に尖らせてあるこの髪型はいわゆる初期設定で使える髪のひとつで、課金して手に入れたそこそこ経験を積んだ若冒険者といった風格をした顔つきとの絶妙なマッチさが気に入って

いる。衣服は例の“付与術師のリュミエール”を装備しているがどうやら、こんなものを着てここをうろつくのはあまり推奨されないらしい、なんでも高そうな服は嫉妬を買うとか。

とはいえインベントリ——100種類まで収納可能なデフォルトバッグに入っていたのがこれだけというか、なにより自分はアバターが豊富なあのゲームにおいておしゃれ要素に力を入れていなかったのだ、あるにはあるんだがすべてを倉庫やドレッサーにしまいこんでありあいにくと手元にはない。かわりにエンチャント用の道具、移動用ライドパートナー、ポーションなどはこれでもかというほど豊富にあつたのは救いだろうか。

レベルが上がると倉庫アクセスが解禁される仕組みだったけど解禁されないだろうか……。

「お兄ちゃん、このポーションもらえるかい」

「まいどツス」

「かなり安いけど、ここで売るにはみんなの手がとどかないねえ」

「そうなんですか……？」

「そりゃあ、ポーションは稼いでる冒険者とか街の薬局が使うものなもの」

「そっかあ……」

情けをかけてくれたのだろうか、おばあちゃんがヒールポーションをひとつ買っていつてくれた、うれしい。

チャリン、と頂いた貨幣は銅を八枚、どうやら商業組合が発行しているものなのでちなみにギルドというらしく、まあオーソドックスに銅銀金、あと貨幣を半分に割ったり四角いのがあったり、まあ大きさと等級にちなんでそのまんま価値が決まるらしい。自分の資金はあいにくとすべてサブキャラに預けていたためにゼロだ、ゼロってちよつとだけかつこいい、かつこよくない。

それと能力値もエンチャント画面同様見ることができるとみて、それによるとステータスはそのまんま受け継がれているようだ。レベルは上限突破110のただし、成長傾向でエンチャントとして振り切らせていた都合上防御、攻撃はほぼ最低値であり、かわりに魔力

量や作業速度、そして幸運がぶつちぎりである。

なるほど一般NPCにも負けたのがわかる、へっ次はステータスリセットで相手をしてやるぜ、しゅっしゅっ……やべえ倉庫だ……。

と。

そんなわけで、この状態では貧弱一般人と同じな自分——オルカ、自キャラの名前をとってオルカ、イルカじゃなくなってオールカミングのオルカ、と名乗った自分はせめてもの食い扶持を稼ぐために個数カンストしているヒールポジションと、適当にゲーム当時から整理が面倒でインベントリの隅に仕舞われていた短剣などをエンチャントして売っていたところだ。

短剣と言ってもレベル帯で言うなら40くらい、まあそんな上等じゃないだろう放出して問題ない感じのものに”スタミナ軽減の”といった軽めの付与をしているだけだ、店売りでもそこその値段になったものだし、いる人はいるんじゃないだろうか……でも売れない、ううむ。

おばあさんも言う通り、ここは貧民街のど真ん中らしい、照りつける太陽に耐えつつ路上販売を行っていたがしかし、ポジションだけならともかく一向に装備が売れる気配がないのだ。場所を変えるべきだろうか。

思い立ったら即実行である、このオルカ、臆病なうえに堪え性が無い。

そんな矢先インベントリにせこせこことポジションをしまっている、徒労感すら感じるのだ。

照りつける太陽が憎らしい、だがあたま、突如として訪れた雲が太陽を遮ってくれたではないか。これはありがたい、その雲の顔を拝んでおこうと顔を見上げるのだ、恩人の顔を見ておくのは礼儀だと思う。

しかし見上げたさきにあつたのは——

「や、これいくらっ！」

肩の下あたりまで伸びた赤い髪を揺らし、短剣を指差す乙女ではな

いか。

飾り付けを赤色基調に皮の鎧を身に着けた、少女を抜けきらない小柄な乙女もまた腰に短剣を持っており、見るからに軽装備の戦士といった感じである。その胸は薄く、鎧も必要最低限の箇所だけを覆っておりなるほど、とても動きやすい装備だなと思えた。

「ども、ども、銀貨十二枚に銅貨五枚ですぞお嬢さん」

「へーえ……ほんとに？」

「は、端数切り捨てにしまっス銀貨十枚です……」

このオルカ、臆病である。

やすやすと値切りされては舐められないかという心配をよぎらせつつもしかし、値切りに応じるのは自分がこの世界の物品の価値というものをわかっていないからだ。串焼きや謎肉の肉まんの値段はアテにならないものだから、どうしても手探りになる、なにより今のオルカは腹が減っている……とにかくはやめにまとまったお金を手にして何かを食べたいのだ。

そういえば回復職などは食べ物や味方に投げつけて回復する手段があつたらしい、いま回復職だつたら食べ物を持っていたのだろうか……。

誘惑とのてんびんにかけて見事にへし折れた自分はレベル40相当の、みつつのエンチャントがされた短剣を銀貨で交換すると今日は店じまいだよと物品をどんどん仕舞っていくのだ。これだけあればしばらく食うことくらいできるだろう、住む場所はまあどこか軒下でも借りよう、このオルカ、どこでも眠れるのだ。

さあお嬢さん行きな行きな、散った散った、今日は店じまいだよ何を言ってももう売らないよ、俺はこれから謎肉の肉まんをたらふく食べるんだ、お酒は弱いのでリソースを肉まんに割けるんだ、へっあの兄ちゃんミルク頼んでるぜって笑われても上等なのだ。

「あの……なんツスカ……？」

されど目の前の少女はずらからない、まさか自分の着てる服でも買いたいってことだろうか。

「服はちよつと非売品なので」

「いや買わないけど」

なるほど買わない、では自分を買うということだろうか、なるほどここは法の通らぬ貧民街、いたいけな少女に見えても男に飢えた野獣、こんなあどけなさそうな顔をして飢えた男からも襲われないということは皆知っているのだ……お嬢さん店じまいだよ！この貞操は Sold outだ。

そうして身体を抱いていると少女のほうから口を開いた。

「君、商売はじめて？」

「まあそうだねえ……売る仕事はやったことが」

「だよねえ」

言う野獣少女は買い取った短剣をくるくる回すと、それをこちらにしつかりと見えるようにし、そして言う。

「この業物、どこの掘り出し物かは知らないし、あたしくらいじゃないと価値がわからないケド——銀貨10枚なんて安いも安い！金貨をじゃんじやか積んで買えるものだって思うわよ、ギルドじゃ名の知れたローグのあたしが言うんだから、信じなつて」

「お返ししていただけるってことですか？」

「それはダメ」

目の前でネタバラシをした挙句返さない、なんていじわるなんだ。なきそう、ないた、やっぱ泣かない。これは自分のミスだから次から強くなるう。

だからじゃあねと会釈を別れにさよならなんだ。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいって!？」

「あの、自分肉まん食べに行くので……」

「そんなものよりいいもの食べさせてあげるから!!」

「ほう」

ならば話を聞く理由があるな。

どうぞレディ、話を続けて。

襟を正して声をかけると、困った顔を一瞬して、それからまた話しだした。

「いい？なんでこんなところでこんなものを売ってたのかわからない

けど、ポーシヨンにしたってこの短剣にしたっていくらなんでも安すぎるの、あなた何？出家志願の元貴族？」

「いえ民間人です」

「それならいいけど……じゃあ聞くわ、これ、どこから手に入れたの？」

「それなら——武器はもともと持ってたし、エンチャントは自分でしたもののツスけど……」

「……えっ」

今度は目を丸くするやじゆ…短剣少女、コロコロと表情が変わるのは面白い。

そうするとなぜだろう、ブツブツとつぶやきはじめやがて、距離を一気に縮めてきたのだ、なんて欲の強い！

「あなたがこれやったの!?ほんとに!」

「ウソつく理由ないです…!このへん来たばっかで値段とかもさっぱりだけど、昔はこれだいたいこの値段で売ってたし…!店売りで…!あつあつ胸ぐらつかまないのであつあつあつ」

「そう…:そうなのね、でもそっかあ…:このへんには来たばかりの旅人ってことよね。じゃあこのあたりの常識や物価を知らなくてもおかしくはない…:のかな。あなた出身は？」

「ヒエーツサイタマ！」

胸ぐらをつかんでぶんぶん振るやっぱり野獣な少女にヒエーツとつぶやきながら、しばし彼女が考え出すそぶりを見せるとようやく解放された。

「ねえあなた、行くアテはあるの？」

「正直なくて困ってたところかなあ…:だからご飯を食べてから考えようって」

「ウチで食べてきなさい！」

「まじでっ！」

肉まんも捨てがたいが、きちんとしたおうちのご飯が食べられるという誘いに乗らないことはないのだ。これが普段の冷静にクリツクと右クリツクの作業をしていた頃の自分なら違ったかもしれないが、



あいにくこのオルカ、今空腹である。

「うちの“ギルド”ならあなたに教えられることもあると思うしね。こんなものをこの値段で譲ってもらったときに何も言わなかった迷惑料も兼ねてよ、そろそろお昼時だし一人くらい増えても誰も文句は言わないと思うわ」

「でも知らない人についてつちやダメってお母さんが」

「お利口さんでいいわね？あと10年若ければね？」

「ハイ」

この綺麗な返し、こやつできる。

だがそれを考える頭よりさきにおなかが鳴るのだ。

あとできる質問はというとひとつくらいだろう。

そうなるとふむ、何を聞くべきか—— ああ、そうだ、アレかな。

礼儀は、礼儀だ。

「——ところで、君の名前は？」

「ああー」

そこままで、ふと言い忘れてたわねー、と野獣少女が目線をそらしつぶやく。

それからこちらに振り返ると、首元にあるドッグタグ……のようなものを手でつまみ見せながら答えた。

「あたしはメイリオ、”<sup>く</sup>ポーン<sup>ず</sup>ギルド<sup>ド</sup>”のメイリオよ！」

## 2話―メイリオの短剣くポーンギルドく

誰もが身なりが決して良くない、だがなにかしらの通り道になつて  
るんだろう、ちらほらと鎧や剣を携えた者が見える貧民街を通り抜け  
メイリオに案内されていったのはその最奥、ここはきつと壁に囲まれ  
た街だつたんだろうと判断できるに易い壁際に建てられた――

「無神論者なんで……」

「廃教会を再利用してただけなのッ」

現実的に言うなら三階建て住宅といった大きさの廃教会で、入り口  
には木製の看板で文字が描かれている。文字は曲がりくねって日本  
語とはまるで違っているため読め……読めない？ いや読め……が  
んばれ：読める、いや読めるぞ！ 『ポーンギルド』って書いてある!!  
空腹で大変に憔悴していた自分の貴重な体力をすり減らして行つ  
た解説は自分でもなぜできたか理解することができず、ただ今は食糧  
を欲するのみ。

帰ったわよー、と言いながら入っていくメイリオに従ってふらふら  
りについていくとその中はなるほど、教会にありがちな長椅子が端に  
のけられたりひっくり返されたりでテーブルなどに再利用された、い  
うなれば見たまんまの『ギルド受付』といった形で確かに再利用だ  
と伺える作りとなっていた。

「神をも恐れぬ所業……」

「無神論者じゃなかったの？」

すれ違いざまに一人が出ていったのを除くと、ここだけで見える人  
間は六人。

自分とメイリオを入れて八人となるが、メイリオが全員いるわね、  
と言ったのを聞いてここに所属する人間がすべて集まっていること  
を察する。というより全員食事中であつたようで、教会の長椅子を  
ひっくり返してその上に板を打ち付けた神に叛逆するかのような  
テーブルで一様に食事を摂っていた、それをよこして。

「紹介するわみんな、さつき会つたオルカよ、旅商人……なのかしら

？」

「民間人です」

「そういうのいいから」

「ヒーツ……」

「とりあえずそうね、食事のあとに皆の紹介をしましょうか、あなたのこともね」

メイリオが言い、座つてと促す。

ひっくり返した長椅子の向かいに長椅子を並べている光景はなかなか異端的というか無限の螺旋が誕生しそうな気配を感じたが、あいにくと無神論者なのでそのへんは大丈夫だ。座つてみるとさすがに教会の椅子だったというかそれなりやわらかい、これはいい食事ができそうだ。

謎肉まんはなかった。



このオルカ、満腹である。

そうなると思嫌も上々になるというものでなかなかどうして、ここにいる六人の顔ぶれもイケて見えるようになるしなにより、メイリオ嬢の顔も少々可愛らしくもなってくる。あらメイリオ嬢、お口にライス粒がついてますわよウフフツ。

「あら、ありがとう」

「どういたしましてですわよウフフ」

「あなた変な喋り方するわよね」

もちろん素でこういうわけではないのだが、ネットゲーム内でこないわゆる「ネタキャラ」じみた格好をつけていたものだから投影されてしまっているのだろうか、はたまた異世界転移というコテコテの事態にめぐりあって興奮しているからかもしれない。とりあえず胸にしまっておいて、並んでいるメンツを見やる。

さてはて皆が皆特徴的だ、いくなれば――

「紹介するわオルカ。リーダーのアーリン、タンカーのギデオン、イレ

イザーのケイ、アーチャーのニッサ、ソーサラーのリリアナ、それから経理……マーチャントのチャーニーよ」

頭まで全身鎧の女、上半身裸の筋肉坊主、不安になるような布面積の痴女、一度も目を合わせてくれないビビリ症のフード少女に喫煙者の魔女……唯一最後の眼鏡のオッドアイ娘だけまともそうに見えたがどれもどいつで特徴的すぎる。

あまりにそんなものだからひとりひとり自己紹介をしようと言われたのをもう覚えた、と答えるとまた空気が面白おかしい感じになったものの、したらそれで自分くらいはやっておくとメイリオに言われた。なるほど確かに、自分くらいは言っておかないと困るよな。

しかしはてさて、自分の経歴をどう紹介しようか。

「オルカです、名字はまだない。歳のほどは二十六で友達はずゼロ、故郷はさいたま。趣味はアイテム収集だったんですがちよつと今引き出せない状況で……」

「へエ、どんなの集めてたノ？」

「次元を断つ神剣とか天に向かって射ると半日降り注ぐ矢とか……」  
「へ、へえ……」

ドン引きである。冗談だと思われてるのか筋肉ギデオンと喫煙者のリリアナには大笑いされていたものの、経理のチャーニーは引き下がって苦笑いを浮かべていた。真面目に答えたのにぶんぶんというやつだ、お天道様も見ているぞ。

とはいえこの微妙な空気を入れ替えねばならない。

それが功を奏したのか、続く言葉で場が一変した。

「ジョブは『エンチャンター付与術師』を少々」

「わあ……」

「あら……」

全員が沸き立つ、連れてきたことを鼻にかけているのかメイリオはふふんといった様子だ、他力本願というやつだ。

とりわけ反応が芳しいのは痴女ケイとフードのニッサで、ニッサは一瞬だけ輝いた目と目があつたがヒイツとすぐさま顔を落としてしまった、やはり自分も対抗してヒエーツって言うべきだろうか、もし

かすると君とは何らかの方面で波長が合うかも知れないな。

痴女ケイはというと、大丈夫なのかという布面積のままテーブルに座り、そして身体をこちらへ傾けてわざわざ視線を合わせてくる。普通に座れよ、と思っただがまあ彼女なりのポリシーというものがあるのだろう、周りも気にしてないみたいだしリーダーに至っては全身鎧だし、ということでは自分は見逃すことにした。

「オルカ君、って言ったっけ」

「オルカです、イルカじゃないです」

「くすすつ、面白い子。付与術師……ってことみたいだけど、何を付与できるのかしら……？」

「何を、というところですか……」

付与術師というか、鍛冶師や錬金術師のジョブを使っても結構困る質問だ。

なにせ使える付与は膨大で、そしてそのすべてを把握することはなかなか難しい。

おまけに何、というあいまいな質問になると、相手が何を求めているかと答えればいいのかもわからなくなってしまうのだ。はいできません、と言っただけ頼まれたらできませんでギルドをポイされたプレイヤーもそこそこ見ていた、そのギルドは袋叩きに遭っていたが。

だがこのオルカ、豪胆でもある、誰もしない答えを堂々と答えるのみ。

「なんでもできます」

「言うじやあない？じやあ、そうねえ……おねえさんの、この、ネットワーク……どう？何か“チョウドイイ”のできるう……？」

「ちようどいい……チョウドイイ……」

ギルド入団テストというものだろうか、確かにこのまま根なし草で過ごすのも不安であるのだがこの特徴的なメンツで自分がやってけるだろうか。

「あんたも大概よ」

メイリオに横から言われた、なるほどじゃあ安心だ。

さて、ちようどいい、となるとやはりむつかしい。色っぽい仕草で

わざとらしくネックレスを外すレイザー痴女からネックレスを受け取ると、それをじつくりと「解析」する。ちなみにレイザーというジョブは我がネットゲームと同様なら、殲滅力や闇討ち力に重点を置き防御を極限まで削った近接型だ、動きやすさは特に重視されるほど、スレンダー体型は確かにおあつらえ向きだろう。

反面被弾に非常に弱く、戦場によっては役に立たないか相手の道連れを要求されるとPVPに参加していた人から聞いたこともある。

はてさて、この解析というスキル、非常に便利というか付与術師にはなければならぬものである。

まずアイテムがどんなものかわからなければ付与のつけようがないし、スロット数がわからなければいくつ、どういうものを適切につければいいかもわからない。耐久値や各種ステータス、さらには自分のレベルにもなるとバックストーリーまでが見えてくる。

どうやらスロット3のケイのエメラルドネックレスは、昔火事場泥棒をして盗んできたいわくつきらしい、わるいひとだ。

「なるほどなるほど……」

「あら、おねえさんに唾つけるのはダメよ？でもちやーンと付与できたら……考えても」

付与術師のジョブとしてつけられるのはスロット数の都合もあり最大で八までだ。

つまりジョブに使う最適解として選ぶならばその最大数で最大の付与をするのが正解なのだが、少ないなら少ないなりにやりくりするしかない。レベルが低いときは低いなりにするしかないのだ、もちろんスロット穴あけはできなくもないが、低い確率をドリルでひたすら空け、ときに装備を壊してを続ける地獄の日々になる。

ああ素晴らしきドリル人生。

しかしみつつ、みつつか。

せめてよつつ使えりと素晴らしい手札が揃うのだが……と悩みつつ、プルダウンメニューから付与を選択しスロットにはめていく。ちなみに「的中の」や「硬化の」は武器であったからあのような必中や行動不能付与を与えるだけで、装飾品や防具として使った場合には

また違った効果を発揮するのだ。

今回自分は、「暗視の」をはじめとしてみつつの付与を成功させた、まあ100%なんだけどね。

「3つ入れました、もつとすごいのができなかったのが残念ですがくっ」

「いいのよいいの、わざとらしくして可愛い子ね……ほんとにみつつできたの？3つの付与の入った装備品なんて、そうそうないものだからおねえさん、お代出せないわよ？ ……まあ調べればわかることよね、ニッサ」

「あ、あい…はい、ケイ、わたし、やる……」

ネックレスをケイに渡すと、ケイはしばらくネックレスに目をやったあと信じられない、といった様子で見つめる。付与の際にはエフェクトが出るからわかるはずだが信じられないのだろうか、とかくフードのニッサが「わかる」ようで、彼女に手渡すとニッサは、一言ぼそりつつぶやく。

彼女の目元に魔法陣が出現するのを見ておおつ、とマジカルチックな演出に感動していると、ニッサの解析が終わったのだろう、その声色が変わっていくのが見て取れた。

「スペクタクル解析” ……っ、ヒーツ…!?”

「二、ニッサ…?!”

さつきまでの死にそんな人見知りさはどこへやら、ニッサはネックレスを近くで見ると、ちょっと離して見てはと繰り返し驚きもものき、それこそ信じられないといった顔をするのだ。あまりに豹変したものだからメイリオが心配して呼ぶと、正気に戻ったのかネックレスをケイにおそろおそろ渡してまた、ぱさりと落ちていたフードをかぶった。

「て、「暗視の」と…「回復の」とあとひとつ、知らない効果がある……!?”

「そ、そんな貴重な効果があるだけですごいのに……!?”

「オルカ、説明できる!?”

「えっ、いやできる……けど、うん、する」

少なくとも3人、ケイとニツサ、それにメイリオが豹変したものだからもちろん自分に目は向くわけで。うむむ、こんな大勢の前で発表するなんてどれだけぶりか……最近だとそういった機会がなかったから、ネットゲームのSNSで検証結果を発表して統計が甘いと袋叩きにされたとき以来だろうか。あれはゆるさん。

ええい、ままよ。

「『暗視の』は文字通り夜目が効くようになる付与エンチャントだよ、イレイザーは確かシャドウオークからの首刈りが基本ビルドだったはずだから、継続的にSPを消費しないようにするのは大事だしね。『回復の』も文字通りで、それはまあ説明しなくても——」

「えっ、おねえさん言ってることわからない……すごいのはわかるけど」

「すいません自分もイレイザー育てたことなくて……」

「そう、なの」

戦闘職は狩りがめんどくさいのだ、生産職も似たようなものだが、完全作業と運ゲーの積み重ねはまた違うものがある。その結果お互いがお互いの育成に関して『信じらんねえ』といった顔をするのも、かつてよく見た光景だった。

さて。

「最後『ラピッドな』は……使ってみたほうが早いかと思えます、超速いです」

「そ、そうなの??わかったわ、おねえさんちよつと使ってみるから……」

ニツサ、一緒に来て！」

「ふあ、ふあい！」

ただし——と言い終える前に、ネックレスをかけたケイがものすごい勢いで扉を開けて出ていく、ニツサも一緒だったがとてもスピードに追いつけない。そうしているうちにこの場には沈黙が残り……やがて、メイリオが口を開いてくれるまで自分は、このなんともいえない空気を浴び続けた。

あとでシャワーあびなきや、『シャワーの』のエンチャントもあつたな。



「ね、ねえオルカ」

「オルカです」

「その……あたしの短剣にも『みつつ』ついてるの？」

「そうだけど……」

言うと同時に、また沈黙が走りまたなんともいえない空気が顔をバシーンと叩く。

こんなところにいられるか！俺は一人で……何もできない、自分はひとりでは何もできないことを思い出したのだった、ついでにお食事にあがったのになにもせずさつさと去ってしまうのはあまりにも無礼であると直感した。

「……自分、何かやらかしました？」

わからなかったら人に聞く、これも礼儀。

そうしているとようやく、魔王の第三幹部と言っても通じそうな全身鎧を着こなしたリーダーのアーリンが口を開き、見た目からは想像もできないくらい凜とした声で自分に告げる。それは魔王アーリンからの通告か、愛の告白か、それとも――

「……オルカ君」

「オルカです」

「我らに加わる気はないか？」

「うーん……」

――勧誘でした。

「ふつつかものですが」

「良かった、光栄に思うよ……このことはなんでもチャーニーに聞くといい」

「え……」

そつちに丸投げなのか……。

言い、立つと歩いてきて握手を求めるアーリンと並び立つ。

でかい、180はとりあえず超えてる、でかい、自分が178cmだったことを思い出した。

……こんごともよろしく……手もでかかった。

### 3話―メイリオの短剣く付与術師く

いつもみたいに依頼をこなすために街の外に出て、簡単な調査依頼だったものだから大した疲れもないってことで、貧民街をちよつと歩いてたの。女の子一人で歩くにはここはちよつと危ないけど大丈夫、あたしは「ポーンギルドのメイリオ」、ここの人たちには顔が知れてるし味方だつてわかつてもらえてるから。

行商人、掘り出し物、ほかに「ワケあり」。こういう陽の当たらない場所だからこそ手に入るものがある、それを巡るのがあたしの趣味でライフワーク、あたしも結構な強さになれた自信はあったものだけでも、そうしたら武器が自分についてこれなくなっちゃったの。

だからもしかしたら、今日も何か売り物があるんじゃないか――  
―って思ってたのが当たり……当たり？裕福な服装を土に汚した「ヘン」な人が、道端でポーションや武器を売ってるじゃない？でもこれがやつぱり大当たり！

そこらじやめつたにお目にかかれないエルフ系の装飾のされた業物の短剣が無造作に並べられていたものだから一瞬ひつくりかえりそうになつて、でも勇気を出して値段を聞いたの。そしたら銀貨が十二枚！金の間違いじゃないの？それも桁を間違えてるんじゃない？  
？ってまたひつくりかえりそうになつて――だからほんとに、つて聞いたの。

そしたら逆に値段を下げられるものだからああ、この行商人、何もまだ知らない駆け出しなんだなつて感じちやつて、ついついお節介を焼いちゃつた。

だつてエルフの装備よ？知り合いにエルフはいるけど、でも閉鎖的なコミュニティを維持してる彼らの技術のこもった武器なんてそうそうお目にかかれるものじゃないもの、武器としてだけでなく装飾品としても欲しがると人は引く手あまただわ。

でもそれからまた大当たり！<sup>エンチャント</sup>付与がされてることだけはぼんや

り伝わってきたけどこの短剣、付与をしたのがこの行商人だっというものだからついつい嬉しくなつてギルドの拠点ホームを案内しちゃったの。

どのギルドももちろんお金を稼いだり強力な装備を作る手段として付与エンチャンター術師を囲い込むことはあるけど、付与術師はその絶対数が錬金術師や鍛冶師と比べても少ないから大抵は大手の冒険者組合ギルドに持つていかれてあだし達みたいな弱小のところには来てくれないのよ。

だからこのポーンクザギルドドを強くするチャンス！って思ったんだけど———そしたらこの“オルカ”って付与術師、想像以上の規格外だったことがわかつてまたびっくりかえりそうになっちゃった。

3つ、3つよ、一度の付与でみつつの付与をいとも簡単に成功させてみたのよ。

あたしも付与の専門つてわけじゃないけどでも、付与がみつつついでるってというのがどれだけ上等な装備かわかるわ。付与のされた装備を使えるっていうだけである程度の資金力があるくらいなもの、消耗する効果をつけるならともかく、ひとつ、ましてやふたつの“永続付与”をつけるのってそれだけで付与術士はマナを消耗するしなにより、装備を壊さないで成功させるにはかなりの熟練がいるって聞いわ。

みつつの永続付与なんていうとかなり熟達した付与術師が気合を入れてようやく取り付けるもので、それこそあだし達みたいな銀、鋼等級のギルド冒険者には手の届かない最低でも金貨にして数百枚なんていうそれこそ余りあるものになるもの、年に数本しか出回らないって話よ。

よつつにもなるとそれこそ白金等級———かつて“霸王”や“魔王”に挑んで討ち取った伝説の冒険者達がつけているものに限られるって聞いわ。

その中のひとりだけが、五つの付与のされた伝説の“五行の聖剣”を持っていたって噂もあるけど、あたしは又聞きだから詳しいことは知らない。

でもだから3つの付与のされた装備品を簡単に生産できるなんて

ことは、無限にお金を生み出すかもしれない一方ほかの付与術師の立場を危うくしちゃうかもしれないってことよ……オルカを野放しにすることは、それだけで危ないことだと思うの。

「わかった!？」

「わかる、超わかる」

「わかっているのかわかってないのかももうっ!!」

仏頂面でわかるわかって答えるオルカに、あたしは唸る。

この男、自分の価値がどれだけすごいものかわかっているのかしら……!

「とりあえず3つできるのは結構すごいって、超わかった」

「結構、ってあなたね……そういえば、あたしの短剣」

二振りの短剣、いまは片方を例のエルフ装飾の業物に変えてるけど、もとのものからすればあんまりにも不釣り合い。また試し切りはしてないけど、見るだけで切れ味が段違いなのがわかる。おまけにこれにもみつつの付与がしてあるなんて——

「エルヴンナイフは40のローグ用装備だよ、穴空け用のが余ってた」  
「余ってたって……よんじゅう?」

「装備レベル」

実力だなんて言ってくれるじゃない。

基準がどこにあるかわからないけど、これを持つにふさわしい“実力”がいるってわけね。

でもエルヴンナイフ、かあ、やっぱりエルフ仕立ての武器なのかな、じゃなくて。

「それで!あたしの短剣、何が付与されてるの!」

「あ?ああ……いいよえーつと」

短剣を借りる、と言って手元から受け取るオルカ。

手元から離れるときにちよつと名残惜しかったのは短剣の価値か、それとも美しさだったか。

でもそれからの言葉に、あたしはまた混乱することになった。

「まず『スタミナ軽減の』でスタミナ消費軽減、まあローグは動き回るスキル発動数が多いから消耗が多いだろうから必須だよな。そ

れから「貫通の」もつけた、ローグやレイザーは一撃必殺がデフォルトだし防御貫通はやっぱり必須だしそれから……最後に「ステルス」だな、初撃が相手に気づかれなくなる最強の暗殺向け付与だ。<sup>エンチャント</sup>まあ「こんなもの」だが、できる限りのことはやったつもりだから許してくれ……」

妥協案なんだ、と頭を下げるオルカに、えっ、えっ、とあたしは頭をぐるぐるさせることしかできない。防御貫通？初撃確定？スキル発動数？わからない言葉やわかりたくない言葉のオンパレードで頭おかしくなりそう、頭お菓子なる。

ひとしきり混乱をおしのけたあと、ようやくあたしは正気に戻る。ちよつとまってね、今心整えてるから……よしOK、オルカ、ちよつといい？

「オルカです」

「その付与能力、よそでうかつに喋っちゃダメよ！」

「……えー……」

「ダメ！」

「しようがないなあ」

ものわがりのいい仏頂面でよかったわ。

はあ、あたし天に昇ればいいのか地に落ちればいいのか。



川を渡って木立を抜けて、走れば走るだけ視界が過ぎていく。

速い——疾い。

これが「ラピッド」の付与の効果。

信じられないほど脚が早くなって、気がついたらニッサを追い越したものだから反転してぐるっとニッサのもとまで戻る。あまりに俊敏な移動だったせいかニッサもわわつと驚いたようで、弓を携えたまま尻もちをついていた。

私はニッサの手をとって、フード付きのローブをぱぱんと叩いて土を落としてやる。人見知りのニッサはこのフードを脱ぐのを嫌がる

ものなのは知ってるからそこには触れずに、でも私達、信頼してるもの、軽く頭を撫でてあげた。

ふふ、可愛い子。

「ケイ、はやい、はやすぎ……」

「ごめんなさいねえ……ちよつと、興奮、しちやつて」

気がつけばニツサは息もせいぜいで、膝に手をつけて息を整えていた。

それに対し私はまるでそんなことはない、まるでそう——なるほど、これが“回復の”の付与か、体力が自動で回復しているのね。走るだけなら無限に走ることもできそうなるほど、あの子が相当に強力な付与術師だつてことを身をもって実感した。

今の私なら馬より疾い——馬並み、あら、お下品で失礼。

とかく今、私はこの身体を持って余っていた。

とにかく動きたいってそんな気分になっていたの。

「ニツサ、私い、とにかく動きたい気分だから……もし“ダメ”になったらお願いねっ」

「え、ちよつ、ケイ——!?!」

ちよつと進むと森があつて、討伐対象の角ホーン・ディーア鹿が生息してる。これは仕事、仕事も兼ねてるんだからと自分に言い聞かせて、はやる気持ちをおさえつつもやっぱりおさえきれない。急加速した脚のまま肌で風を切り、邪魔なものはすべて飛び越えながら森を越えていくの。

——見えてきた。

いつもの“常人の速度”なら到底追いつけずニツサの弓に頼って追いつめていくしかない角鹿の脚が、いまなら信じられないほど遅く見えてくる。

いつもは地の利も何もかもが相手にあつてうかつに動けなかった相手を乱雑に追い詰めて、いままさに隣に追いつたのは初めて見る景色。あら、見たことなかったけど結構可愛い顔してるのねとちよつとだけ観察しながら、私はレイザーの“技能”である『首刈り』を行使する。

瞬間、こつもたやすくできるのかというほど“高速で”刃が首をす

り抜けて、首を失った身体がしばらく走ったのち姿勢を失って崩れ落ちた。

——快感。

高揚感、とも言えるかも知れない。

私は間髪入れずに逃げたもう一匹への追い込みを始める。

驚異的な速度には驚異的なブレーキが必要だ、跳び、木を足場にすると蹴りつけ方向転換し、そのまま木々を蹴り続け加速する。自分でも信じられないような速度と跳躍力によって実現できていることが楽しくて仕方なく、事実空を飛んでいるという未知の高揚感が胸を跳ねさせた。

「ふふ、ザンネン」

草木を飛び越える角鹿のそのさらに先を飛び越え、目の前に着地するとすれちがいざまにまた「首刈り」。同じように相手が崩れ落ちたのを見るたび高揚が増し、最後に残った相手はもはや楽しむように狩りに興じることになった。

……振り切る速度が返り血のちよつとの汚れすら与えなかった、この戦いですらない戦い。自分がやったのかとすら疑う感覚がまた手に残っていてそして、構えているナイフが耐えきれなかったのだろう、刃こぼれしていることにも気付いた。

「そういうえば、力いっぱいだったもの、ね」

首を狩るのに力いっぱい、力まかせですらできてしまう自分の力の上昇に一瞬恐怖すら覚えるものの、それは高揚にぬりつぶされた。

あのオルカという子、すごい。

今胸いっぱいにあるのはその感情だけだろう。そうだ、あの子が私達とともに働いてくれるならもっと私達は、私は強くなれるのだろうか。たかだかネックレスひとつにエンチャントをしただけでこれだけの高みに昇れたのだ、この軽鎧やナイフにもつけた折には——ぞくぞくする。

ようやく追いついてきたニッサに笑顔でもう終わったわよ、と返ししながら、獲物を運ぶのだけ、どうしようかと困ってあははと笑い合う。まだ心臓の高鳴りは止まらなくて、停滞していた自分が高みに昇れた

というだけですらこんなになるのかとまた頭が混乱している。

……そうだ、これだけの力があれば、みんなでもっと高みに昇れる。  
それにもっといい暮らしもさせてあげられる。

そして――

――私も、やりたかったことができる。



#### 4話―メイリオの短剣くぐずの集まり―

部屋を与えられた。

もともと廃教会ということもあって部屋数はそれなりにあるらしく、ただし広くはないし質素だ。よくある六畳半つてところだろう、あんまり掃除ができてなかったらしいのだが今チャーニーちゃんがぱぱっとお掃除してくれたおかげで、見るも違えるような匠の演出を垣間見ているとこだ。

「……ホウキに エンチャント 付与」<sup>エンチャント</sup> してくれたのはありがたいケド、それなら手伝ってくれてもよかったと思うんだけどナー」

わざとらしいカタコトの言葉遣いをする赤毛ダブルおさげ、おまけに眼鏡ときて属性がほどよく盛られたチャーニーちゃん……通称店主ちゃんがぼやく。すいませんそういうのは専門の業者に任せたくうが足手まといにならないかなって思っ

掃除をしているときに話しかけたら嫌々な声で答えてくれたが、彼女が単純に計算が得意なことから経理をしていることのほかにギルドの経営管理を一括でしている、外部への供給、抛出もすべて請け負っていることから店主ちゃんと呼ばれているらしい。本人としてはもともと商人志望だったらしく、まんざらでもないらしいのでこれからも呼ぼう。

「さーてできたヨット、ここがキミの生活拠点になる場所だからちゃんと管理するんだヨ、今後はウチは掃除しないからそのつもりでネ」

「ゴミ出しの日を覚えてくれればダストシユートには捨てに行くよ」  
「なんだいゴミ出しの日って……ナマモノとか燃えるモノならまとめて裏の焼却炉の脇においといてくれれば、当番制でニツサかアーリンが焼いといってくれるからそこだけ覚えといてネ。ビンとかは洗って各商店に自分で返すよーに」

「ビンの使い回しするんだ……」

「ビンをいちいち割ったりまた作り直しできるなんて、それこそ大商

人のヤローとか貴族サマのお屋敷くらいしかないノつ。ウチはそんなに余裕ないんだから節約できるモノは節約節約！……まア、キミが来たことでそれが好転するといいナーっては思ってるけどネ」

そう言い、店主ちゃんは自分よりもさきに部屋に入ると椅子に遠慮なく座った。

だから自分も、しかたがないのでベッドに座るのだ、無言で。

「……からかいがないのなヒトだよネ」

「つつこんだら負けかなって」

「へいへいー、まア、ちよつとお話と、お願いと、お願いでもしたくつてネ」

「そういうお誘いはちよつとよくないかなって……」

「だアれがキミなんぞに」

ぶんぷくりんといった感じでジト目を向けてくる店主ちゃん、なんとなく似合っている。

しばし感情のこもらない目で見つめ返すとしかし、はあ、とため息をついてから切り出してきた。

「ギルドの仕組みとか、どんなギルドがあるかとか、ここがどーいうところか、そーいうのツテーだ聞いてないんだよネ?」

「まったく、いやまったく」

「はあー……メイリオも悪い子じゃないんだケドそーいうところがなア」

「じゃあ、店主ちゃんが聞かせてくれるってことかな。しょうみ自分もこれから当面の目標っていうものが決まってるから、行き当たりばったりになるまえにいろいろ聞けることは聞きたいかなって、人生当たって砕けろかもしれないけど、知ってることがあるに越したことはないし」

「そりやアー聞かせるヨ。だってそのまんま放り出したらキミあぶなっかしすぎるもん」

よく聞いてねメモの準備ーと言う店主ちゃん。

あいにくUIにメモ機能はない、テキストエディタをよこしてほしい、あるいはWordだとなおいい。



これに耐えきれなくって、誰かを助けたいって、あるいはせめて誰かの役に立ちたいって……そんなのだけが集まって、最初に「なんでもギルド」なんて、ふふつ、今思い出すとほんとに安直な名前だったなあって、そんなふうにできたものなのよ」

「いいことだ」

「ありがとネ。でもだから最初理想を追いすぎちゃってサ、何度も経営破綻になりかけたりしたシ……いまじゃ自分たちの首の皮つなぐのが精一杯、そんなうちに呼ばれ出したのがはぐれ者のより集まり、転じてクズ、一人じゃ何もデキない連中の集まりってんで、ポーンギルドドなんて呼ばれてサ」

「続けて」

「……でもなら、いつそそれを名乗ってやろう、駒」でも将を討ち取れるんだって証明するために名乗ろうってなってる。いまになる。だからサ、そんなトコなんだよ、ここ。アーリンが誘った時は止めなかったケド、キミがいて心地いいところかっていうとそうじゃないんだよね」

なるほど道理で。

自分は喉から手が出るほど欲しかったっていうのはそういうことであつたんだな。

でも。

「だから出ていくなら今のうち、ってことかな」

「こそ、ウチが責任はとるヨ、キミがいてくれて嬉しいことはいっぱいあるケド、キミがここにいていいことは多分そうそうないからネ。キミほどの人間なら、どこへいっても通用するはずだシ……なにより、ウチで「扱える自信がない」」

「ふむ」

なるほど弱気な言葉だが、確かに言われてみるとそうだ。自分の能力がこの世界で「それなりに」強いことはわかった。金を稼ぐことに腐心するならどうにかなるだろうし、身を護ることだってそれにモノを言わせればどうにかなるだろう。

——けれど、このオルカ、直感は鋭い方である。

決して理論的に考えるのが苦手かというかと否定はできないが。

「むしろその話を聞いて、自分は安心してここにいられると思う」

「……不安要素しか伝えてない気がするケド」

「ここにいる人間は自分の正義を信じて行動を起こせるタイプなんだろうに、それならよっぽど自分のパワーを振るうに安心できるつてもよさ。少なくとも自己の利益のために最大限自分を絞り尽くすような連中じゃないなら、安心して身を任せられると言うか……なんというか、アレだと思う、アレ」

「公正明大っばい、とかじゃないだろうネ」

「それで行こう」

褒めても何も出ないヨツ、と言う店主ちゃんにぐつとガッツポーズをする。

事実そうだ、右も左もわからないこの世界に引つ張り出されてあわわ死んじゃうウグー……ってなっていたところを手を引いてくれたメイリオといい、こういった言葉を包み隠さずこつそり打ち明けてくれた店主ちゃんといい、信用に足るというもの。信頼はこれからお互い積み上げていくとして、寝泊まりして三食昼寝するのにいい環境はないだろう、たぶんここには掃除機をかけるためにドアをバーン！と開けてくるような人や謎の集金業者はいないはずだ。

打算的に考えても、自分はここがいい。

このオルカ、策略家である。

「んまア……そういうことなら、ウチは全力サポートさせてもらうことにするケド。ほんとにいいノ？当分いい暮らしできないヨ？部屋も狭いし、食事はギデオンがいるからけっこうイケるけどサ」

「筋肉すげい……」

あの人が作ってたのか……。

素敵、抱いて、やっぱやめて。

「んじゃ、ここからはお願い」

あらたまったように座り直し、店主ちゃんがこちらを向く。ベレー帽が可愛いアクセントで、スカートはロングなのでゆったり感がある、なるほど非戦闘員と言うと即座に伝わりそんな感じ

だ。眼鏡も相まってなかなかどうしてベテランキャリアなOL感を感じた。

「キミが付与エンチャントした装備品は、すべてウチを通して売ったりしてほしいのヨ」

「勝手にそこらにばらまいたら死刑ってことか……なきそう」

「いや死刑にはしないケド……メイリオが言ったとおり、キミのその『みつつの付与』はそれだけで強烈だからネ、そこらに転がってる状態になっちゃうと列強ギルドのメンツが確実にキミを引き抜いたり……最悪消しにくる可能性はあるからネ」

「こわいなきそう……」

「冗談じゃないのヨ、付与装備自体はありふれたものだケド、数が多いものってそうそうお目にかかれないものだからサ……もし自分の売り物よりいいモノを作るのがいて、そいつのせいで自分のモノが売れなくなるなんて目の上のたんこぶになったらどうすル？」

「それ以上にスキルレベルを上げて、相場を読んでいいものを売りさばきます」

「努力家だつてことはわかったヨ。でも簡単にはいかないってコト、とりあえずまあ……このあたりの相場をぶち壊す懸念とかも兼ねて、しばらく売りさばきは待つて欲しいってコト。しばらくいい暮らしができなくて大丈夫、つてのはそういうことネ、ウチもキミが作るモノの値打ちを判断しきれないシ」

なるほど了解、このオルカ、儉約家である。

ガチャ以外はだ。ただもやし生活はもうしたくない。

「んま、あとのこまごましたところはあとから教えるカラ、そこだけ覚えといてくれれば……てネ！ みつつも付与エンチャントできる付与術師エンチャンターがいてくれるところちも心強いヨ、みんなの装備も改良できるなら生存性や効率レートをがぐーつと上がるからネ」

「八つまでエンチャントはできるぞ」

「またまたー、神話級で五つなんだからなんだカラ。キミも冗談がうまいなあこのこの」

まあ、スロットの空いてる装備がないとそこまでぶちこめないが

……そこでオーラを出してるホウキも確かにスロット1だったな、最低でも身につけられるアイテムに関してはスロットが1空いているらしい、なんでも強化できるのはとても便利だ。あとで光量の足りないランプを思いっきり光らせてやろう。

「んじや、最後にお誘いでも言おつか」

「だからそういうお誘いは……」

「もうちよいウチ好みになってからおいでおいデ。んまア、ちよつとキミの目を鍛えるために……隣街まで行って取引先との商売を見ないかなってコト。そのために——“みつつ”の装備をひとつ、作ってもらえないかなってコト、あとニツサが一緒に行くヨ」

「ああ、あのフードの」

緑髪のフードちゃんか、顔をよく見たことがなかったな。

「いろいろ言ったケド、キミにはなにより経験を積ませてみるほうがいいって思うからネ。大丈夫、話は全部ウチがするかラ見てくれるだけで大丈夫だヨ、隣町も歩いて2時間くらいだしあつというまあつというま」

「ほほう……旅行ですか」

「旅行……」

そういえばこの世界にきて初日だけど、広い場所に出てはなかったなあ。

地平線はちゃんと見えるんだろうか？オルカ気になります。

自分はふたつ返事で了承すると、しかしはつと、思い出したようにインベントリを見た。

「そういえば歩いて二時間ってことだけど、いいものがある」

「へエ、また面白い付与エンチャント？」

「いや、乗り物さ」

このオルカ、便利なものは使っていく主義である。

## 5話―メイリオの短剣と銀の☆3杖―

「オフロードバギーだ」

「ばギー」

「免許はないが、公道じゃないのでセーフだと思う」

「免許」

インベントリから引つ張り出し、ボフンと出るわ我が相棒。

勝手知ったるはライドパートナー、いわゆる搭乗型パートナーである。

「……見たことないケド、アンタの故郷じゃこういうのが普通なの？」  
「道交法が整備されるくらいだからね」

「よくわからないケド、いっぱいいるのはわかったヨ」

シートベルトは締めておけよ、と言うがったわらない、やはり車はこの世界じゃ一般的じゃないらしい。

ライドパートナーというものは、いわゆるパートナーキャラ……同時に一体まで連れて歩ける戦闘補助をしてくれるパートナーNPCのうち、移動速度の向上やダメージを肩代わりしてくれる搭乗型のパートナーだ。通常のパートナーキャラが個性豊富な容姿や性格をしており、そして戦闘において共に戦ったり生産補助をしてくれるのに対し、ライドパートナーは基本的に無機物な乗り物が多い。

このカーキ色迷彩をしたオフロードバギーも例に漏れず、しかしファンタジック世界におけるギャップが好みでよく採用していたものだ。エンジン音が心地よいというほど車趣味はないが、それでもスライムやローパーが跋扈する領域をバギーカーで走り回るのはなかなか楽しかった。ついでをいうとこのオフロードバギー、速度はまあまあなうえ地形効果を受けるが耐久性が非常に高く、高レベルエリアを強行突破する際にも役に立つ。

そういえばメインパートナー、倉庫に預けていたんだったな……。

こつちでは元気に喋ったりするんだらうか、ちよつと惜しいことをした。



「フードちゃんも頼むな、しつかり捕まっけてくれよ」

「アツ：は、はい…よろしくおねがします…」

後部座席に座るのはフードのニツサちゃんだ、あれからわかったことだがギルドメンバーに名前を呼ばれても素直に答えるのに、まだよそ者だからか自分が名前を呼ぶと縮こまって声が小さくなってしまうようだ、難儀な。

なので原則名前を避けてフードちゃんと呼んでいる。こう呼ぶと最低限は答えてくれるのでなんとか意思疎通がとれるのだが、怖いお兄さんと思われてそうで実になさしい、なきそう、ないた。

「効果測定で居眠りをして落ちた時以来だな…：車に触るのは、滾るぜ…」

「なんだつテ?」

「素人なのでご迷惑かけます」

「え?なんだつ…：ちよつ、はやい!加速はやい!コワイ!やめ、ああ

エンジン音を響かせ土煙を巻き上げ。

一両もないただっ広い道を、オフロードバギーが駆けていった。



到着した隣町は、外壁も低く特別高い建物も遠目に見えない、強いていうなら中央部に真四角の会館のようなものがちらつと上から見える、そんな個性という個性のない街だった。ただやはり街は街、番兵のやる気は満ち満ちであり、オフロードバギーのけたたましい音が聞こえると詰所つめしょからわらわら番兵が出てくるとともにあつというまに道を塞ぎに来る。

今自分たちがこうして街の中を歩いているのはだが、オフロードバギーから店主ちゃん達が降りたときの『げえっ!お前か!』といった姿を前番兵が奇妙な納得という一体感を得たことと、店主ちゃん自身が言いくるめたところが大きい。なるほど自分も突然UFOが降りてきたら家から飛び出すし。

そんなこんなで昨日いた貧民街と比べるとなかなか「うるおい」のある街並みを過ぎ去りながら、元の街がどんな規模だったかはさういえばまだ見てないなって思ったものだからふと店主ちゃんに聞いてみた。

「ジュエゴの街はスピエールに比べたらかなり小さいケド、いいところヨ。王都との間っ子にあるからいろんな商品も流れてくるシ、ウチはほかのメンバーに比べるとよっぽど出入りしてるかなア。ウチはか弱いから、誰かと一緒じゃないと来れないけどネ」

「スピエールって言うのかあの街、ところでいつもニツサと？」

「んやー、ニツサはケイと狩りに行ったりがいつもで、あんま来たがらないねエ。今日はケイが一人で街に繰り出してるのと、他のみんなも依頼と用事でちよつといないからニツサに来てもらってるワケ」

「リリアナがいた気がするが」

「リリーは……動く時しか動かないカラ……」

「ええ……」

いざというときだけ動く伝家の宝刀みたいな感じなのだろうか。

いいな自分もそういう暮らしがしたい、お仕事したくないでござる。

でもガチャるお金はほしい、しまった今日はアプデ日……うう……。

しかしそんなふうに悲痛な空気を漂わせはじめたからだろうか、くいつと袖を引く感触がして足を止めた。

「アツ……あの、だいじょうぶ、ですか……？」

「いや大丈夫だよ、元気いっぱいハツラツ、ただちよつとやり残したことを思い出して」

「わ、わたしヒールくらいなら使える、ので……気分悪くなったら……言ってください」

そう言うニツサの顔はなんというか、フードに顔をすっぽり隠していた先程とは打って変わってしっかりと目線を合わせてくれている。なるほど背丈の通り顔つきも幼く、みどりいろ翠色の丸っこい目は悲しげだ。

なにかに触れただろうか、しかしばつさりと聞くのもなんとなく申し訳ない気がしたのでそこには手を付けることを躊躇った。なるほ

どこの娘いい子だな、と思いつつ、そしたらはっと目線を合わせっぱなしだったのに気付いたのだろう、わわつとあわててフードにまた顔を隠してしまった。

「フードちゃんはいいい子だな、あとで飴ちゃんをやろう」

「……ありがとございます……」

パートナーに与えると成長速度が30日くらい2倍になるいわくつきのアメちゃんしかもってないが、まあ大丈夫だろう。ちなみにオフロードバギーに与えても使ってくれる、あのときはアイテム的な要素だったから誰も気に留めなかったがしかし、知り合いとの話の終わりに聞いた『おふとんにおやつあげてくる』の言葉はなかなか笑えるなど今になって思った。

ちなみにライドパートナーの最高峰はお布団と乳母車だ、マジで。

そうしてニツサの背丈がちょうどいいので撫でようとして避けられてを繰り返していたうちにだろうか、街の中央にある会館のような場所にたどり着いた。

看板はやはりやっぱり読める、*「ジュエゴ冒険者ギルド会館」*とな。

ほほう、これが昨日の話に出てきた。

「さーて、ここが敵地のド真ん中、荒くれろくでなしの巣窟！ひよつ子オルカの準備はいいかヨー？」

「取引をするのに商業ギルドじゃなく、冒険者ギルドを通すのか」

「商業ギルドの連中なんか売りさばくくらいなら、ぶち壊して焼いたほうがマシだよ。あいつらの悪どさつてのは、ウチがよーーく知ってるし、その点実益とか名譽のためなら命すら惜しまない……そんな『冒険者』ってヤツらのが、ウチは信用できるってだけ」

なるほどなあ、個人的な感情も見え隠れするけど店主ちゃんの言うことも一理ある。

そして何か言い返そうとしたが気の利いた言葉が見つからなかったのでそのままついていき、ニツサと共に冒険者ギルドの門をくぐるのだ。

ワアオ！と言う言葉がつつい漏れてしまうだろう、実際にはヒ

エーツって感じだったが、実際内部のインパクトというか「予想通りさ」が見事すぎてついつい声をあげずにはいられないのだ。冒険者ギルドと言えば依頼の山ほど貼り付けられたボード、コテコテの依頼受付、そして屈強で精強な冒険者たちが軒を連ねている、そんなものを想像するのがきつと多くだ。

「ヒエーツ……想像通りの場所じゃん……やっぱアレ？バーでミルク頼むと笑われるの？」

「ウチはお酒飲めないから知らないケド、メのホットミルクなら笑われないんじゃない？」

まじかよ今度酒場に行ってみよう、ちよつと離れたところにいる誰かにシヤーツってグラスをスライドさせて奢るんだ。

そんなしようなもないことを考えているとはつゆ知らず、店主ちゃんはずんずんと歩いていく。弓を背負ったニツサがフードを深かぶりして怯え気味にそのあとをついていくと、あとに一人残されるのは自分だ。やばい、感動となんか色々な感情が入り混じりちよつとだけ歩くのをためらう。

そんなやつぱりしようなもない姿を見せていたからだろうか、近くのテーブルから自分より頭ふたつくらい大きなサイズの大男が近寄ってきて、『おい』とひとこと声をかけてきた——なるほど、これが新人潰し、冒険者の登竜門か。あいにくと自分は付与術師<sup>エンチャンター</sup>、生産技能はカンストしてるが戦闘力はゼロ、ゆるしてくださいしんでしまいます、だが俺には伝家の宝刀が——

「なあ、兄ちゃん」

「ヒエーツ……すいません持ち合わせが」

「行っちゃうぞ、しっかり守ってやれよ、男だろ」

「アツ……ハイ……」

きゅんときた。

自分、冒険者ギルド好きになるわ。



店主ちゃんが受付を通して会館の上階に進み、ついていかされた部屋は見事に客間、といった様式の部屋だった。

なるほど下はアレでも上は綺麗なんだなと思いつつ、どういう理由でいいものなのか理解できない調度品を眺めながら店主ちゃんが長椅子の中央に陣取り自分はその隣に座る。ニッサは護衛という立場もあつてかたちちゃんぼだ、かわいそうだからあとで“疲労軽減の”あたりの付与をした指輪とかあげよう。

あ、あの飾つてあるお皿スロットがみつつもある、いいお皿なんだろうな。

「ナチュラルに隣に座つてくるとは思わなかったヨ」

「体力ないもので……」

文明の利器がないこの世界において体力はものを言うのだろうか、あいにくとぬくぬく育つた自分にそれほど優れた体力はない。

そうしてかつて古き時代を生きた人々はたくましかったのだなあ、と思いを馳せていると、バタリ、と客間の扉が開かれ大柄な全身鎧の男が入ってくる。こう、角つきのバイソンヘルムと言えはいいのだろうか、口元以外を見事に鎧に覆っており、交渉の格好とは思えないほどの威圧感貧弱な民間人の自分はただただヒエーツ……とつぶやくのみであつた。

「マスター、相変わらずギルドじゃ脱がないんだネ」

「いつものことだともチャーニー嬢、いついかなる時にどんなことがあるかもわからぬゆえ、この街の戦士の長たる者が常に万全の臨戦態勢であることは皆に安心を与えるのだ。私がここにいる、ゆえに安心して生活を享受してもいいと」

「でもでもほんとは趣味なんでシヨ？」

「まあ……せつかく買った鎧とか見てほしいし……」

手慣れた感じの会話なあたり、交流が深いのだろう。

マスター、と呼ばれた大男はどっしりと長椅子に座る。けつこうな重量がありそうだが耐えるあたりこの椅子もいいものなのだろう、スロット数が気になるがさすがにオブジェクトなのでなさそうな気がする。

マスターの後ろに秘書なのだろう、眼鏡の茶髪ショートさんが控えると、店主ちゃんがテーブルの上にやや長めの小箱を置き、口を開いた。

「最近忙しいのに時間取ってくれてありがとネ、マスター」

「なあに、チャーニー嬢の持つて来る掘り出し物にはつねづね趣味……ああいや、実用的な面で期待させてもらっているからね。最近、西の山の麓の魔物の動きが活発化しているものだからなにぶん装備の拡充が必要で……この大きさ、上等な装備品を持つてきてくれたってことだろうか？」

「魔物なんているのか？」

口を挟んでしまったが、ふと聞き慣れない単語が出てきたので差し込んでしまう。

ネットゲームにもMobやボスなんてものはいたが、似たようなものだろうか。

「ああ、西の森に小鬼が何匹も湧いてね、近隣の村の警備費がかかって仕方ないんだよ、一網打尽にできるならそれこそ嬉しいことはないんだが——つと、紹介が遅れたね。チャーニー嬢の付き人としては初めて見る顔だ、いつもはギデオンが来るはずだから……ジュエゴの街の冒険者ギルドマスターだ、名前はいつも覚えてもらえないからギルドマスターでいい」

「オルカ、エンチャスター付与術師のオルカと言います、日頃店主ちゃんがお世話を……」

「だあれがお世話になってますだヨツ！つてなわけでマスター、ウチにもよーやく付与術師が来てくれたってワケ、おかげですつごーいいいモノが手に入ったってワケよー……金庫空っぽにしてはないよネ？」

「ほう付与術師か！とうとうそちらにも来たというわけか……いやあ幸先がいいなあ！大丈夫だとも、私のポケットマネーは少し心もとないが金庫には冒険者皆の活躍でそれなりに金がある。それにランクの高い冒険者に上等な装備を貸し出せば、いい結果も見えてくるもの……開けていいか？」

ギルドマスターはうずうず、といった様子で、既に箱に手をかけている。

この中に入っているのは自分が付与をした装備品だ、けっこうな大ききだったが自分のインベントリに入れていたので持ち運びは苦勞しなかった。

とはいえこのインベントリ、スキルとしてはこの世界で上等なものに分類されるようで、安易に人前で使うとやっぱり目をつけられるらしい。ここにいる秘書は信頼できるということに使わせてもらったが、亜空間じみた場所から1mくらいの長い箱が出てくるさまを見て口に手を当てていた。

ううむ、ネットゲームにおけるあたりまえにできていたこととの剥離に慣れるまでしばらくかかりそうだ、なきそう。

「いいヨ、見てみて」

「そうでないとなーどれどれ……ほう、ほう。銀装飾に先端の宝石、それにこの使い慣れた感じ……ふむ、手立ての魔術師が使っていた業物の杖と見受けるが……っていうかこれ、リリアナ嬢のものでは……？」

「また博打ですったからって渡されたのヨ」

「またあのお嬢さんは……」

あの喫煙者黒髪魔女のどうしようもなさを理解しつつ、見ているとギルドマスターが手に取った。

「ふむ……スペクタクル 解析”を使っても？」

「どうぞどうぞ」

「ふむ、では…… 解析”」

店主ちゃんが意地の悪い笑みをしながら言い、ギルドマスターが解析スキルを使う。ああ、兜をかぶっているとちゃんと兜の外に魔法陣が出るんだな、さすがに判定かぶつたりしないか、と感心していると、おお、おお…おおー！といった感じにギルドマスターの声が大きくなる。

店主ちゃんがまたまたにったりと悪い顔になり、そして、三本指を作って彼に見せた。

「〃みつつ〃 あったでシヨ？」

「ああ……それに見たことのない付与だ……これは個人的にも心が躍る……エイダ、ここには誰も入れるなよ！」

「了解いたしました、お茶はどうします？」

「即買いだ、すぐに終わる！」

自分は欲しかったんだが……と、エイダと呼ばれた茶髪ショート眼鏡秘書さんが入り口の鍵を締める。一方のギルドマスターさんはいうと興奮さめやらぬ様子で、これはいくらか、この効果は？とひっそりなしに店主ちゃんに質問攻めをしていた。

「お値段はあと……として、詳しいコトはこの〃付与した〃オルカが詳しく説明するヨツ」

「丸投げしおったな……店主ちゃんきたない、まあするけど」

このオルカ、説明は好きである。

さて、今回取り付けた〃付与〃は――

「〃増幅の〃と〃再装填〃、それから〃シャワーの〃さ」

「〃増幅の〃なら聞いたことがあるが……確か、威力や範囲を増幅するものだったな、貴重だ。だがうしろの2つは聞いたことがない、説明を頼めるかオルカ殿」

「もちろん、今回引き受けたのは魔法の杖、それもシルバー系つてことでMP伝導率が高いから発生速度は気にしなくてもいい、つてことでこの3つにしたんだ。〃再装填〃はリキャストタイムを短縮するから発生速度の早いシルバー系装備と相性が良くて速射型メイジのお手軽強構成だね、それに〃シャワーの〃をつけることで範囲攻撃を可能にしたんだ」

「シャワー？」

「弾が分裂して拡散するようになる付与だよ、それに〃増幅の〃をつけることで一発あたりも強力にするつて寸法さ。いわゆる固定砲台型ビルドのメイジに向いてるやつで、範囲Mob狩りにおいては最強って言われてる装備さ、基本はこれに――」

「待った待った待った！」

店主ちゃんにまったをかけられてしまった。



まあそんなものだ、強力な範囲攻撃をひたすらに連射して一面を火の海にするタイプのビルド用装備で、この付与コンボのお手軽なところはスロットがみつつかれば十分に機能するということになる、レベルがある程度まで行けばこれを使って急激にMob狩りレベルングができるというのがメイジやウィザード系の育成が楽な所以だろう。そのためランクが上がれば空いたスロットでのカスタマイズ性も高く、さらに大型敵には複数ヒットも望めるこれは付与術師にとっては対メイジプレイヤーへのマーケットの稼ぎ用付与として大人気だったほどだ。

ちなみに「シャワーの」、蛇口につけるとシャワーになる、しかもお湯も出せる。

エフェクトでしかお湯だということとはわからなかったネットゲームと違ってこつちでは実際にお湯が出るんだろう。

「とまあ、説明でおおよそはわかったと思うかう、ここでお値段交渉にいったいいいかな?」

「いいとも! ……とはいえ強力なものだ、さすがに用意できる自信は……難しいな」

「ウチがそっちの金庫把握してないわけないでシヨ? ……金貨にして」

店主ちゃんが指をくるくる回す。

「こういうお値段提示の瞬間ってすごい心躍る、たぶん1!10!100!とかって数字を少しずつ並べていくんだ。」

「1!10!100!」

それみろ。

「しめて金貨で300枚!」

「ふうむ……払えないほどではないが……むむむ」

「——の半分!!」

「……!?!」

ほう、50%オフか……。

自分の作ったものであるとはいえ、ここにおける自分の知識というもののはやはり足りない、この値段交渉は店主ちゃんに任せるほかない

のだ。しかし半額、薄利になることは違いないだろう、もとの武器は元手はかかっているとはいえない、一度売ればある程度そこに基準が設けられる。

理由があつてのことなのだろうと、そのまま見送った。

「そ、それは赤字というものでは？ チャーニー嬢、我々を思つてくれているなら……」

「そーでもないヨっ、ただひとつ、お願いしてほしいだけ」

「……ふむ」

「これから『定期的』にこーいったモノをここに売ると思うんだけどサ、それがどこから出た、とかとーぶん秘密にしてほしいのヨ。今はまだその時じゃないっていうか……つまり、独占けーやくつてのをさせてほしいノ、信じられる相手だけに売れたほうが、ウチらも都合いいしネ」

「我らだけが独占というのは聞こえがいいが……しかし、それでいいのかねチャーニー嬢は。君たちが行えるならそれは名誉になり、勢力を拡大するのにも役に立つ。それにそれらを定期的に生産する手段は——まさか、オルカ君が？ しかし、『みつつの付与』は熟達した付与術師が年にくくばくかしか成功させないものだと言うが……」

「毎日できます」

「冗談だよな？」

「アンタは自分が規格外つてことを認識しテ！」

ペこっ、と店主ちゃんに頭をはたかれる。

さすが初期プリセット髪だ、簡単には崩れないぜ。

「つてまア、むしろこいつが外にいま知られるとめんどーいのヨ。それだからウチらがそれなりに力を戻して、こいつを抱えきれるようになるまで信頼できるマスターンとこでだけ売りたいナっていう話。もちろんマスターは戦力の増強にしたつて、お金に替えたつて損はない、ただマスターを挟むことで、そこで防波堤になつて欲しいノ」

「そのための半額と、独占契約つてことだね。なあに、私はこの街の冒険者を取りまとめる立場にあるゆえ脅しやそこらには屈するほどではないさ……安心してくれ、約束は守る。だから引き受けよう、エイ

「ダ、君も約束できるか？」

「適切な手当が出るのでしたら遂行致します」

「ということだがチャーニー嬢」

「おっけー、オルカ、わかった？」

「わからない」

「どっちやねん」

「承知いたしました」

「よーし」

じゃあ、と店主ちゃんがカバンから一枚の紙を取り出す。

ああ、なるほど契約書か、こっちでも紙でやるんだな。

証明する方法はあるのだろうか？やっぱり指紋とか、あるいは魔力を通すのだろうか？こういうときドキドキしてしまうのは、仮にもファンタジック世界を愛していたネットゲームプレイヤーゆえだろうか、さてどうするかと見ていると――

「ッ」

「ヒエーッ」

店主ちゃんとギルドマスターが指先に軽く針を刺し、血を一滴垂らした。

いたそう、なきそう、ないてる。

「えっなにしているの……自傷癖あるの？病院いこ？」

「契約も知らないでよく行商人名乗れたネ……血判だヨ、マナの性質は人それぞれだから、精霊魔法の使える審判官みたいなヒトに言うど誰がいつ書面をかわしたかわかるノ……いったいからあんま好きじゃないケド、んまー商売人やるならこれくらい慣れないとネ」

「ヒエーッ……自分一市民間人でいます……」

書面に見事に血が垂れているために死体が持っていたと言われると納得しかねない契約書を、二枚用意してお互いに持つ。これで契約は成立なのだろう、しかしなるほど便利だなあ、ネットゲームをやっていた頃はログのSSを取ったりテキスト保存された会話ログを漁ってGMに通報しあとは野となれ山となれだったけど、一応ちゃんと法が通ってる感じが。

でも傷口ちよつと危ないんじゃないかって思ったらニツサがふたりにヒール魔法をかけた。これは自分も知っているHP20%回復と同じだろう、指先の傷口がみるみるふさがってつるすべな肌になる、回復魔法便利だな……自分もサブクラスでそっちを選んでおけばよかった。

なんて言ってるうちにちよつとした雑談の話になり、しかしここに慣れたふたりの会話なんてちんぷんかんぷんなのでただ固まる像のように生きるようになる。なんでも西の魔物の話がメインに、やれ金等級の冒険者だの、やれどこぞの偉い人が来るんだのでもちきりだ。

私は石、銅、鉄——無機物なのだ、こころはない。

……しばしそうしていると顔の前で手を振られる。およ、終わったのかな。

「行くヨー、オルカ。寝てたノ？」

「んあつ、あと5分」

「キミが立たないと出られないノっ」

せかすものだから立ち上がって、扉の前まで移動する。

そうすると送り迎えかギルドマスターさんが寄ってくれるのだが、これがまたでかい、ほんとにでかい。なるほど荒くれの長たるものこうでなくてはならないということか。兜は脱がないまま、また声をかけてきた。

「オルカ君、私からもひとつお節介をさせてくれ」

「オルカです」

「確かにみつつの付与のできる者は世界にそれなりの数がいよう、だがそのほぼすべてが国や大きなギルド、マジックサークルの抱えとなっているということを知っていて欲しい。それだけの価値がある、ということだ……そして、それはすべて能力は等価、ゆえに最後は生産力によって価値を決められている、ということになる」

「毎日作ってたらずいっすね……」

「ハハハ！もしできるなら君は規格外の規格外ということだ、それを忘れないで欲しい。力の使い方を、是非に誤らないように……それと、頂いた杖は適切な人物に売ろう、いい買い手を知っている」

「毎日働かなくていいってことかな……」

理想の生活では……？

惜しむらくはアプデが来ないことだ。

「ではさらば、また会えるのを楽しみにしているよ」

「ありがとうございます、ただひとつ」

「何かな？なんでも」

「兜脱がないんです？」

「鎧ならいいんだがこちらは勘弁してもらえると……」

なるほど、どんな人にも見られたくないものはあるよな。

実はこの図体ですっごい童顔だったりするのかもしれない。

帰り際、入り口に差し掛かったら『おい』と道をふさがれた。

さっきの冒険者だ、なんだこんどこそ挑みにきたのか、こつちには店主ちゃんとニツサがいるんだぞ、自分を例え仕留めても第二第三のニツサがお前たちを仕留めるだろう……この生命は踏み越えるためにヒエーツ肩をつかまないでヒエーツ。

「あんたポーンギルドのヤツだろ」

「ヒエーツ、ハイツ……」

「いつも助かってるぜ、俺らのできない依頼を引き受けてくれたり、掘り出し物売りに来てくれたりよ」

「ハ、ハイ……アザツス……」

「この筋力増加の腕輪もな、そこの子が売りに来てくれたんだ。おかげでランクも上がったしなにより……おつとすまねえ！お帰りだったな、また来いよ!!」

やっぱ冒険者ギルド好きになったわ。

また来よう。

そうしよう。

## 6 話―メイリオの短剣くDot dot itく

取引が終わり、帰る頃となってもまだ日は高く。

本来なら往復四時間かけて歩く道だし、帰りはリツチに馬車にでも乗ろうかと思っていたらしいがオフロードバギーの速度のせいで完全に予定が早まったらしい。バギーゆえの走破性のおかげか道中もそこそこ快適で、なにより直線ばかりだったのが運転素人な自分でも簡単に運転できた。

なおバギー自体は門の隣に停めておいたせいか、戻ってきたころには番兵が数人あたりを囲んで調べていたようだ。やめてくださいおまわりさん免停は困ります、免許もつてなかったわ……無免許運転じゃない……。

「近づいてくるのが速すぎたし、音が大きくて驚いたという者が多かったそうだ。次に近くに来る時は少しその、控えめにしてくれるとありがたい」

「すみませんっした……」

「とはいえ面白いものを見せてもらったよ、最近はこういうものが走るようになったんだな」

ゲームイベントでもらえるものなんては言えずに、手に入れるのに苦労したとだけ答える。

どことなくいたたまれない気になって、さあいくぞと助手席に店主ちゃんを、後部座席にフードをかぶったニツサを載せてまた走り出す。エンジン音が響いたときには周囲の番兵や通りがかりの人が一歩退いたが、走り始めてみるとおおーっ、と感嘆の声が上がった、これはちよつとだけ気持ちがいい。

オープンカーなものだから日が当たるのはまあ仕方ないとして、風を切るとその暑さも帳消しだ、ほどよい気持ちよさが身体を通り抜け、店主ちゃんも二度目で慣れたのか鼻歌交じりに外を眺めている。

一方ニツサは怖いのか縮こまっているが……。

「そういえば、西の森がどうこうって言ってたけど」

「んあー、最近だネー……魔物自体は道をちよつとはずれればそこらじゆうにいるんだけどサ、西に行くど山があるのヨ。その間を抜けてくと隣の領地にたどり着くんだけどサ、そのあたりにトロールだの、オークだの、まア亜人系がやたらめったら湧いてて通れなくなっちゃってるんだよネ」

「トロールはオートリペアが面倒だが、一撃で倒せればE<sup>経</sup>X<sup>験</sup>P<sup>値</sup>がおいしいからよく狩場の取り合いになっていたな……そんなに湧いてるの？っていうか魔物って降って湧くものなのか……？」

「トロール狩りなんてそれこそ金等級超えないと無理だとおもうケド……そりや、魔物は湧くものヨ、人や他の生き物がいないトコに突然ふつと湧き出てきてその場所を占拠するのヨ。悪い神サマの使いっ走りだとか、異世界の生物とか、マナが固まってできるモノだとかいろいろ言われてるけどわーかんない」

「ああMobのポップと同じか……」

「知ってるん？」

「いやわからん」

「そこまで聞くとほんとにネットゲームの世界みたいな場所だな、とも思う。」

「もしかしたら自分が知らないだけで、違うネットゲームだったりするんだらうか。」

「うぐぐ……ある程度世界観に知識のあるパートナーをインベントリに入れておくんだった。そんなふうには悔しがりつつ、ガタンゴトンブロロロ、と街道を進み続けるとはて、遠くの道を分岐するところに何か見えてくるではないか。」

「なんだって……ニッサ見える？」

「みえる……馬車、とまってる」

「ほほう馬車」

「何かトラブルだらうか、少し速度をあげて近寄ってみるとなるほどどうして、天幕の張られた荷車を引っばる馬車が道のど真ん中に停止している——なるほど、よくよく見なくても右車輪が折れているようで、身動きがとれなくなっているようであった。」

自分たちはそのすぐそばまでオフロードバギーを走らせると、停車させて声をかける。

またやはり、わけのわからないものを見たといった目で見られた、ニツサは縮こまった。

「どうかしたのか馬車の人？」

「ああ、荷馬車の車輪が……いやどうでもいい!!冒険者さんか!」

「民間人だ」

「わかった、はやく逃げろ!!追手から逃げてたところなんだ!!すぐに来る!!」

「わ、わたし……」

ニツサが消え入りそうな声で何かつぶやいたがしかし、どうやら切羽詰った状況ということらしく荷馬車を引いていた行商人らしきおじさんは馬の手綱を切り離し、馬に乗ると何をぼさつとしているんだ、と叫ぶ。

さてはて一体、話す猶予もないらしい。だが逃げる準備くらいしておいたほうがいいのだろう、停めていたエンジンに再び火を入れそして逃げようとする—— ……おや、足音、それも人間のものではないし大きい。それは分岐していた道を外れた方角からずんずんと押し寄せてくる……一体何事か、行商人さんはくそつ、と悪態をつくとすぐさま馬を走らせ消えていき、店主ちゃんも何か勘付いたのかニツサに弓を取るよう言う。

ニツサを見てみれば、フードの下でもわかるほど目つきが鋭い。

さきほどもでの縮こまっておどおどしていたところはもうなく、これまさに狩人の様相だった。

さて、何が来るか—— いや、既に見えていた、あれはまさに。

「チャーニー、トロール!!」

「一攫千金つていいいたいトコだけどっ!オルカ、逃げて逃げテ!」

「イエッサー了解です」

歩幅というものはそのまんま速度に直結するのだろう、すさまじい勢いだ。自転車を全力で走らせたくらいにはあるだろう、荷馬車でなんとか逃げていた先の行商人さんは頑張っていたのだな。



さてこのトロールというMob、デザインは異なるものの自分のやっていたネットゲームにも当然のように出てきていた。攻撃速度が非常に遅いし防御力も並だが、一撃の威力とオートリペアにより囲まれてかつ一撃で仕留めきれないと甚大な被害を負うとして、中級レベルにおける一種の火力登竜門となっていたMobである。

経験値効率は厄介さからおいしく、タンクにヘイトを集めまくり火力職で殲滅するトロール狩りPTは頻繁に見られたものだ。

エンジンを踏み込むころにはニッサのエルヴンタイプの弓により一撃が唯一の一体に与えられ、そして胴体をえぐるものやはりトロール、オートリペアが発動し刺さった矢はあつというまに抜けて傷が塞がる……相性はあまりよくないらしい。

「フードちゃんつかまって！」

「う、うん！」

急発進するにも危ないとニッサをかがませ発進する、さしものスピードとはいえどオフロードバギーの加速には到底追いつけないように、ぐんぐん距離を離していったとおもえばどうやら、諦めたのか足を止めて……おや？

反転し、背を向けたではないか。

「フードちゃん、トロールが反転する理由ある？」

「……たぶん、あの、わたしが思うには」

「大丈夫だから言ってくれていいよ」

「……違う獲物を見つけたとか、待ち構えるとか」

おおう、てりぶる。

「じゃあつまり、自分たちがあれを見捨てた場合……誰かがまた襲われるってことになるよね」

「そう、なる……から、仕留めたい、けど……わたし、ごめんなさい、弓力不足で」

「ニッサの責任じゃないヨ、こんなトコにトロールが出るほうが間違いない！……この乗り物のスピードならスピーエールまですぐに戻って救援を連れてくればいいし……」

「いや」

店主ちゃんの指示に従うのも懸命だろう、だがさしもの自分も安易に人死に見過ごすのは道義に反する、それがよりによって——”自分の手の届くところ”だったらだ。このオルカ、付与術師である、手持ち無沙汰な状況をひっくり返すことこそが我が本領発揮なのだ。オフロードバギーを止めると、なんでもと言う店主ちゃんをスルーして反転させる。

それから後部座席へと目を向けると身を乗り出してニツサに要求するのだ。

「フロードちゃん、自分のかわりに戦ってくれる勇氣はある？」

「……オルカさんがすごいのは、知っています。でも、できるん……ですか？アツすいません出過ぎたことを……」

「ああ、自分の代わりにあいつを射ってさえくれれば——勝てる」  
「字面だけ見ると最悪だネ」

そうだとも、このオルカ、直接戦闘能力はゼロに等しい、だが誰かの1を100にすることに關しては誰にも負けない。ニツサが首を縦に振ってくれば自分はすぐにでも取り掛かろう、さあニツサちゃん、まんまるみどりおめめを下に落とさないでこつちを見るんだ、はりはりー。

小柄な少女にかわりに最前線に立ってくれ、はなかなか最悪だろう。だがしばし考えたあと、ニツサは目をこちらに向け、はい、と答えた。

「わたし、やります……！オルカさん、おねがいします……！」

「よしてきた！矢束よこして!!」

「は、はいー」

思い立ったら即行動である！ニツサが小柄な身体に背負っていた、身体のサイズに対するとやや大きい矢筒を受け取る。ちなみに自分が178cmで、店主ちゃんは頭ひとつ小さい、ニツサはそのさらに頭ひとつ小さいのだ、手を出したら犯罪で牢屋の中で一生マルバツゲームをするハメになるのだ。

だが今回その法は適用されない、彼女の小さな手から受け取った矢

筒にしつかりと目線を合わせるとよいしよと、いつもの付与画面エンチャントを開いて解析をかける。金装飾でエルヴンタイプのいかにも豪華なものだったが予想に反してスロットはふたつで、まあでもこれだけあれば十分と、つづけざまにふたつの付与を「矢筒」に行う。

さて——今回はこれでいいだろう、十分だ。

フードを相変わらずかぶったまま、うわー、と興味ありげに見ているニッサに目を合わせると目をそらされた、はははこやつめ。

「できた、フードちゃんこれ使って」

「ど、どうやってつかうの……?」

「特別な挙動はしない矢にしてある、それに矢筒を直接付与したから何を入れても適用されるんだ。君はこれをできるだけ数あれトロールに当ててくれればそれで決着がつく……当てられる距離までは自分がやるから、言つて」

「うん……!」

そう、矢筒への直接付与と矢への直接付与、ついでに弓への付与なんてものもあるのである。火力職というか属性攻撃が必要な場面ではアーチャーやホークアイがぶつ壊れといわれる所以であり、やろうと思えばバカみたいなのコストがかかるかわりにおぞましい付与が可能なのが弓職なのである。

今回はマイルドだが、ははっ、見上げてくるニッサを見てると育ててあげたくもなってしまう。そのうち12時間矢の雨とか範囲貫通矢なんかも覚えさせようか。とにかくまあ考えるのはあとにするとして、矢筒を渡しニッサが弓を携えるのを目にしたら、自分はハンドルに手をかけてアクセルを踏み込んだ——

「——見えたヨ!後続の人が追いかけてル!」

「こつちを見ろこつちを見ろこつちをみる——!」

なるほどならば!オフロードバギー究極技そのひとつ、クラクシオンを鳴らし注意を引く。

ちなみにうるさいだけで特に特殊効果はなく、趣味要素とか言われていただけのものだ、こんなところで役に立つとは……とかく、トロールの足を止めさせること程度はできたので、あとは距離がある程

度つめて維持していった。

「フードちゃん、こんなもん!?!」

「だいじよ、ぶ!!っ!」

弦を引き、弓を構え、射る。ニッサの弓から放たれた矢は綺麗な放物線を描いて30mほど離れたトロールに命中するのだ。さすがに弓を専門にしているだけあって刺さりどころも急所になるだろう顔付近や次いで脚に刺さっており、見事に激昂したトロールがこちらに向き直り脚を踏み出すのだ。

そのどでかい全長から繰り出される歩幅5m!なんともでかい!

……だが、そんなもの無意味とばかりに我が付与の“効果”はもう発動しているのだ、このオルカ、策略家である。主な戦法は正面突破に純粹強化。

さて、あとはちよつとずつバックします、バックします。

「オルカ、きいてない……!」

「大丈夫、もうきいてる」

「ウチは何があっても責任はキミにとらせるから……およ」

そうとも、付与したのは“硬化の”がひとつめなのだ……!

あつというまに行動不能に陥ったトロールはその場に固まり、動けなくなる。

そういえば昨日行動不能にした人はいまごろもう動けてるだろうかとささやかな心配をしつつ、更に続く効果がトロールの目をひん剥くのを目にして、勝利を確信した。そうとも、オートリペアを持つトロール、それを低火力で打ち破るための攻撃と言ったらこれしかあるまい——

——DOTダメージ、そして回復低下である。

「ふたつめの付与は“蛇毒の”……!DOTダメージを与える付与だ」

「どつと?」

「フードちゃんにわかりやすく言うと、継続的にHPを奪い続ける効果を相手に与えたんだ、それがDOT“ダメージ”。この“蛇毒の”は

短時間の間に急激に奪うことに特化した付与で、持続時間は12秒間、ただし「累積する」……つまり」

トロールもいい加減効いてきたのだろう。

強烈なDOTダメージを与え回復効果を低減させる毒はオートリペアに対し強烈に効き、あつというまにHPを奪っていく。このコンボがなおさらひどいのは行動不能状態のためにソロだとアイテムが使えなくなることだ、Mobであるトロールにその心配はないだろうが、どちらにせよ。

ニツサに続く矢を撃たせると、それが刺さるごとにトロールの顔色が悪くなっていく。オートリペアが仇になりじわじわと体力を奪われるのは地獄だろう、おまけに的がただでさえでかい上に動けないものだから完全なであり、六本も刺さるころにはもはや目を剥いてやがて、切れた行動不能効果がその肉体の死を意味していた。

「……やった？」

「やったヨやったヨ!? すつごいじゃんニツサ! トロールを一人で仕留めたつちやー金等級も夢じゃあ」

「……オルカのおかげ……ありがと、でもわたし……がんばった」

トロールが崩れ落ち、ゆっくりと倒れるのを前に店主ちゃんがニツサを抱きしめわしゃわしゃと撫でる、この二人はやっぱ仲いいんだな。

この世界に来てはじめての実戦、だというのにどことなく現実離れしている感じがしてようやくだが、ふいー、と自分が息をはいたのを感じやっぱり緊張はしていたんだと察する——はあ、帰ったらやっぱり「シャワーの」がついた蛇口にとびこみたい。

目の前に突っ伏してはあ、とため息をつきながら、ふあー、とあくびもする。

ううっ、体力がたりない……STRとかVITに振るんだった。

なおクラクションが鳴った、みんなびっくりした。

## 7話―メイリオの短剣とトロールとろとろ

いつも下を向いているのは、人が苦手だから。

いつも目をそらすのは、見られるのが怖いから。

いつもフードをかぶっているのは、見られたくないものがあるから。

だから人の多い場所は苦手なの、いつもはケイと組んで狩りには出るけど、こういうふうには街に出ることはめったにしない。今日はケイが用事で出てるしみんなも依頼に任せてこまいだし、リリーはあれだしで人手がないから仕方なくチャーニーのあとをつけていくことになった。

一緒に行くのは昨日ここにきたばかりのオルカさん。

一言で言えば何を考えているかわからないひとで、でも確かに実力のある付与術師<sup>エンチャンター</sup>。〃みつつの付与〃を簡単に成功させたうえに、精霊術が少し使えるわたしにも知らない付与を知っているひと。だからますます怪しくなつて、でもなんとなく悪いひとじゃないっていうのがわかるからいつもみたいに縮こまって様子をうかがってた。

でも彼の〃すごいところ〃、それだけじゃないの。

なにもないところから突然乗り物を出した、乗り物って思うのは彼が出してすぐ乗ったからで、今まで見たこともないような形と音。なんでも〃オフロードバギー〃っていう彼のふるさとの乗り物らしくて、彼の説明はまったくわからなかったけどでも、火と雷の複合魔法で動くものなんだなっていうのはわかった。

えっ、あつ、わたしも乗るの、えっ。

やつ、はやいはやい！ひゃあ！

こわかったけど、はやかった。オルカのいるところではこういうのが当たり前<sup>に</sup>走ってるらしい。こんなに速いとぶつかつたら危ないなつておもつたけどでも、ちゃんと法律があるそう<sup>だ</sup>。文明がすごい<sup>に</sup>発展したところなんだなあ、って思いつつ、でもまだやっぱり彼の

人物像がぜんぜん見えてこなかった。

でもそうしていると、ふとオルカが体調の悪そうな顔をする。

だからつい身体が勝手に動いてヒールはいるかな、って声をかけちゃった。

——わたしの悪い癖で、イヤな想い出。

気分の悪そうな人がいるとつい声をかけちゃう、でもオルカはなんでもないみたいだからよかった。

冒険者ギルドは相変わらず苦手、こわい人ばかりだし。だからわたしがチャーニーを守るためにここににいるのにチャーニーについていくだけになっちゃって、オルカのことを置き去りにしちゃった。でもオルカはなんでもなく冒険者の人をいなしについてきたみたいで、やっぱりわたしと違って普通の人はこうなんだなあ、って痛いほど思う。

……商談はすぐ終わった。ギルドマスターさんはあんまりこわくない。

見た目はこわいけどでも、他のひととは違う気がする。

またオルカが冒険者の人に絡まれてたけど多分大丈夫だろうって放って、足早に外に出る。フードをいつもかぶってるから目立つのはわかってるけどでも、だからなおさら外せない。わたしの顔をあんまり人に見られるわけにもいかない。こんなだからみんなに比べるとわたしはできることが少なくて迷惑かけちゃってるのが、ちよつと、つらい。

だから今日はつかれたって、人と関わるだけでつかれるなあって帰りたい気持ちで勝って。だからぴよんってオフロードバギーにのって、それがうかつだったってまたひゃあーってすごい速度で走るのに振り回されながらも、ここでわたしは今日一番の大仕事をする事になった。

——トロール。

西の森に最近湧き出した魔物、本来はもつと奥地やマナの濃い場所に出て、そしてなにより他の魔物すら食し糧とし間引きと肥大化の双

方を行う厄介な魔物。わたしの三倍の背丈を持ち、熊どころかオークですら比にならない筋肉の鎧を身にまとう、いわゆる“力”を象徴するかのような魔物。

こんな街道に出るなんて……信じられないと思いつつも、でも弓を射る。

綺麗に吸い込まれた矢は傷を与えるけどでも、やっぱり効かない。そうだ、トロールには傷を勝手に塞ぐ能力がある、だから浅い傷はまるで意味がないんだ。わたしの弓矢は狩猟のためのものでそして、私自身が持つ能力は回復に寄ったもの。

逃げなきゃやられる……！考えるころにはオルカがわたしに呼びかけてくれて、わたしががむと勢いよくオフロードバギーを動かしていちもくさんに逃げる……速さは倍以上もあって、トロールはぐんぐん引き離されていった。

……どつと緊張感がとけるとともに、自分が無力だったことが脳裏に走る。わたし自信、もともと戦闘能力はギデオンやメイリオ達に比べて低いから、こんなみんなを守らなきゃいけないときなのに弱くて、つい落ち込んだじやう。

このまま逃げるのかな、わたしはいつだって、逃げるのかな。

そうしていると不意に、まだトロールを見てたらしいオルカが声をかけてきた。

「フードちゃん、トロールが反転する理由ある？」

……？ 魔物が目の前の目標を振り切って動くなんて……それもトロールみたいな知性の低いのがするなんて。待ち構えて“狩り”をするか、あるいは……違う獲物を見つけたとき、ああつ、なんてこと！絶対に勝てない相手に出会ったこんなタイミングでこんなに不運が重なるんだ。わたしはやっぱり“誰も守れない”。

ごめんなさい、仕留められるなら仕留めたい、でも力不足。

わたし弱いよね、ごめんね……って、言いかけたところでチャージャーがフォローしてくれて。

——でも、それをオルカが止めた。

自分のかわりに戦ってくれて言われて、混乱する頭でできますっ



て答えて、謝りもして。そしたら矢筒をよこしてって言うものだから渡すの。

わたしの矢筒はかつてエルフの木工師が作ったもので、軽くてしなやかで、**装飾もきれいで**———**なにより、想い出の品だ、この弓も。**だからもし**“付与”**<sup>エンチャント</sup>を行うなら絶対に失敗はさせたくないって思ってたから、ここにオルカがいたのはきつと成功だったのかもしれない。とっさで状況を選んでられなかったのもあるけどすべてをオルカに任せて、矢筒がぼうつと緑色に光つたのを見て、確信する。

矢筒に入れた矢そのものを**変化させる** **“付与”**———**これも知らない。**

オルカはこれを **“当てればいい”** って言ってくれた。

当てるだけなら、わたしは誰にも負けない自信はある。だからそう言ってくれたなら全力で期待に答えるのが義務なんだってふたつ返事で戦いを引き受けて、弓を構えてオフロードバギーの加速に追従するんだ、もうこの挙動には慣れたから走りながらも弓を構えることができた。

この乗り物すごい、馬と違ってずっと平行に動き続けるし、四人まで乗れるし……弓の使い手にとってだけじゃない、これがぶつかるだけだとつもない武器になるしそれに、三人の遠距離攻撃手が乗ったらそれこそ動く弓やぐらだ。こんなものが沢山生産されているなんて、オルカの国は軍事力もすごいんだろうな。

……いけない、気を集中しなくちゃ。

弓を射るのは簡単、でもコツを掴むまでが難しい。

とりわけむずかしいのはふたつ、弓が持つクセと、風だ。わたしの弓は弦の引きに対し勢いが強すぎるからそれに合わせて使わなきゃならないし、風を読むことができないと風に吹かれて曲がる矢は狙いに当たらない。

……わたしはずっとやってきたから、こんな大きなのを外すわけないと、弦を引いて矢を射る。放物線を描いて食い込む爪のように差し込まれる矢はトロールに一撃を加えてでも、傷が浅かった。やっぱりわたしじゃダメなのかなって思いながらも、もう一度、きつと何か

が変わると思って矢を射る——そしてそれは現実のものとなった。

「オルカ、きいてない……!」

「大丈夫、もうきいてる」

わたしが狼狽するのをよそに、オルカは力強く言い切った。

事実そうだ、わたしに射られたトロールはその身体を硬直させて動けなくなっていたから。

オルカが言うには「硬化の」のエンチャントらしくて、それにさらにどつと？ダメージが付与されているらしい。つまり毒を塗ったような効果でトロールの回復を低下させたうえでダメージを与えているんだってことで、ならまだまだと、わたしは矢を続けざまに射る。矢を六本も射ったころだろうか。

トロールの様子が急激に変わる、目を剥いてまるで窒息するネズミみたいになって、口から泡を噴き始める。それでもまだ死なないんだということが、この魔物が「力」を象徴する所以なんだろうなと思っただけだった。

でもすぐ、トロールの硬直が解けて沈み込んだことが自分が勝ったことを思わせる。

チャーニーは喜んで自分を抱き寄せて、でも自分はほぼ呆然で、簡単にトロールを仕留められたことがその時はぜんぜん信じられなかった。「自分でもできた」ってことが信じられなかった……オルカって人はまだよくわかってないけど、でも。

——わたしたちにとって心強い、ってことだけ、わかった。



ポーンギルドに戻ってきた頃合いでもまだ日は高く、さてはて今日は次はなんの予定が入っているのか、おゆうはんはどんなものかなどと考えつつ扉を開いてただいまを伝える、も、ポーンギルドには誰もいないではないか。あるのは鎮座する黒色全身鎧の飾りだけだ。

「おかえり三人とも、ずいぶん早かったね？」

ヒエーツ、アーリン団長だった。ぴくりとも動かない全身鎧で廃教会の中央に立っている姿はなかなかホラーチックである、イベント戦闘で戦う系のボスだ。鎧を倒しても中身を浄化しないことには倒しきれないのだ。

「こいつの乗り物が、すごーく速くってネ。アーリンも一度乗せてもらうといいヨ」

「う、うん……」

「ほう……それは楽しみだ、君の“インベントリ”にはさまざまなものが入っているみたいだがそんなものまであるとは……自慢じゃないがかつては乗馬も嗜んでいた身でね、今度私が出るときにでも乗せていっておくれよ、大抵の乗り物は乗りこなせる自信がある」

「アツ…はい」

意地悪そうに言う店主ちゃんと、素直に答えるニツサ、実に対照的だがアーリン団長は素直に受け止めてくれているのだろうか。だがオフロードバギーの乗り心地は自分としてもなかなか良かった、次の機会があつたらまた使おう。

実際の車の運転もこんなものなのかな、と思いつつ、免許取得を諦めていたことを思い出す。こっちで何か取れそうな資格でもあつたらちよつと手を出してみようか、一級トロールハンターとか。

「さてはて、報告くつテ前に、見せたほうが早そうだね」

「いい成果は得られたってことだねチャーニー、君なら安心だ」

「んにゃく見たら驚くヨー、ね、ニツサく♪」

「うやうくやめてー……」

後ろからニツサを抱き、うりうりと撫でる店主ちゃん。百合の花園はここにあつたのでありますかわ？華が咲き乱れるでございますわ、そう形容したい景色を前にしつつ自分は自分でインベントリを開き、いつものように端末操作の要領で今回の“成果”をアーリンの前に出した。

ドスン、と音を立ててまず置かれるのはトロールの脂だ。あまりいい臭いはしないものだが四角くほとんど豆腐のように綺麗に切り出

されており、職人技を感じる—— というよりどうやら、ドロップアイテムに関してはある程度自動で回収されるらしい。トロールからアイテムを回収したとたんトロールのどでかく固い胴体がインベントリに吸い込まれ、次の瞬間にはアイコンに落ち着いていたのだ。

“トロールの肉”、“トロールの脂”となるふたつのドロップアイテムで、これもかつてのネットゲームにあったものだ。肉はゴミ箱行きだったが脂は特に、上等な消耗品を作るのに役に立っていたから使えるだろう、この世界の素材に関しても知っておかねば。

「詳しいことはあとで聞くとして……さて」

アーリンはほほう、と唸ると脂を丹念に見た。

全身鎧がぶよぶよの脂を観察する姿というのはなかなかにおもしろい。

「上等なトロールの脂だ、いい値段で売れると思わないか店主ちゃん」  
「そうねエ……こんだけあったら金貨で二十枚いけるんじゃない？肉も売れるシ」

「えっ肉売れるんだ……こわい」

「アンタの故郷じゃどうだったか知らないケド、こつちじゃトロールの肉は珍味よ珍味、好事家やその手の業者に売りつけりやそのうちジャーキーとか角煮になつてまたそのへんで見られるんじゃない？」

角煮にするのか……言われてみると臭みはあるがいい色をしていてうまそうにも見えなくもない、いややっぱ見えない、あのトロールと思うとやっぱ見えない。ネットゲームの頃はアイコンとフレバーテキストで見えていたものが目の前にあるとなんとも言えない気分になるものだ……なきそう、ないた。

さて、これはどうするんだろう、ここに置いておいていいのかな。「すまないが、よかつたらもう少し持つていてもらえると助かる。急な入手だったもので手配がなくてね……ただインベントリなら持ち運びは楽だろうし、明日にでもメイリオか店主ちゃんと一緒に加工業者のギルドにでも売りにいけばスペースも開けて一石二鳥だろうさ」  
「ほほう」

「まあーた出張かヨー、ウチ以外書類仕事できるヒトおらんでショー」

「私がやっておくから、たまには外でも回っておいで」

「はいはいはーい、んじや費用は経費もちネー」

暗に遊んでこいってことなんだろう。なるほどここでの娯楽、気になる。

最大の娯楽である隔週のネットゲアアップデートがなくなった以上、匹敵する何かを探さねばなるまい。このオルカ、ギャンブル中毒である、ガチャは回したいのだ。金銭を賭けるほんとの賭博ではない、ガチャを回したいのだ。

それっぽいものがないだろうか……というか、ガチャがないだろうか。

A賞でかわいいパートナーやめっちゃつよなお洋服が手に入るのだ。

「ううっ……」

「ん、どした？ダイジョブ？キツかった？」

「いやホームシック」

「ああ……そういうのあるよね。大丈夫大丈夫、軌道に乗ったら一度帰ったりしヨ」

「そう、です……！帰るところがある、って、それだけでいいとおもいます……！！」

ううありがとうみんな、なきそう、ないた。

店主ちゃんがぼんつと肩を叩いてくれるのがうれしい。

つというと、メイリオはどこにいったのか。端で煙草吸ってるリリアナしか見えないが。

「ああ、メイリオは確か……」

「——ちよつとアーリン!?すぐ来て!?!」

はてさて、聞き覚えのある声だ、メイリオっぽい声で、メイリオだ。

廃教会には四方に通路があり、それぞれ厨房や二階、出口といった部分につながっている。そしてもうひとつもまあ、当然必要なところにつながっているのだ、人間的な生活に必要なものとうと当然決まりだろう、浴場である。メイリオの声はその方角から聞こえ、全員が一様に目を向けた。

「蛇口がおかしいんだけど!?!こう、お湯が出るっていうかしやわわー

！って水が裂けるっていうか!?こう、すごい。付与されてる。って感じがするんだけど!!なんかした!?なんか、こう……こう……あつ……」

「ああ、その付与は、シャワーの。だな。蛇口に使うと温水シャワーが出るようになるやつで先にやっておいたやつさ。便利だとは思うんだが確かに……無断でやったことは詫びよう、もし水風呂がいいなら解除するし、なんならデュアルシャワーにしても……」

「いや、オルカなら納得だけど……うん、わかったわ、また浴びてくるから」

バスタオル姿のメイリオがひよこつと顔をのぞかせこちらを見て声をかけてきたので、心当たりがある自分が即座に答えるとメイリオがひよひよつと、萎縮した様子を見せる。

店主ちゃんが掃除をしている間に行ったトイレついでにやっておいたもので、あとで使おうと思っていたものだ。試運転を済ませていなかったことだけが気がかりだったがどうやら、メイリオが使った大丈夫だったということは使えるものだったらしい……実験台にしてしまったような部分は悪いことをしたな。

「悪い、試運転をさせるような形になって」

「それはいいんだけど、その」

「おう」

ふむ、言いたいことがあるようだ。

さてはて、不備があったか……なら早急に直したいものだが。

続くメイリオは、ぼそりとだけ口にした。

「……謝るところじゃない……?」

隠していた身体をさらにひよいつと奥へと寄せ、戻っていくメイリオ。

赤のセミショーツが揺れ、あとに水滴が一瞬飛んだ。

えっ……完璧身体隠れてたし、事故だし自分悪くはくない?

どうなのどうなのそこんとこ、とふと右を見て、左を見て。

ニツサは縮こまり、アーリンは笑っていて。

——店主ちゃんには笑いながら頭をはたかれた。

## 8話―メイリオの短剣くウィールスミスく

街というもので狭いものを見たことはあんまりなかったものだから、この街の例外なき広さに直面したときもそうではなかっただろう。ただ唯一問題があるとしたらこの廃教会のある貧民街は北の端に位置しており、どこにいくにも遠いのである。

よりにもよって今行こうとしている「製造者ギルド」のスピエール支所は南に位置しており、なるほどだからといってこの道幅ではオフロードバギーで駆け抜けるわけにもいくまい。慣れない脚でひたすら長距離の歩行を強いられていた。

「もうダメだ……自分はここに散る運命、あとの世界を頼んだ……」

「だらしないわねえ、まあ職業柄身体は動かさないとしょうけど。ほら水飲む?」

「いうてウチよりないって、そりゃあかんでシヨ……」

メイリオから受け取った水を飲み、そして返す。

なるほど確かに、ゲーム画面上ではWASDやマウスクリックで動いていたものだから気にしていなかったが、ゲームキャラと同じスピードで動き続ければ本来の自分の体力ならすぐにバテるのも無理はない。あいにく自分はM PはぶつちぎりだがS Pは地を這っているのだった。

ううっ情けない、だがLvとステがカンストしている以上多分だが、自分はいくら鍛えてもEXPは虚空に消えていくしスタミナはつかないんじゃないか?という疑念が宿り、ならば仕方ないと胸を張った。

このオルカ、決断は疾い。

「ところで、製造者ギルドってなに? ブラックスミスのジョブなら知ってるけど」

「それだけ知ってれば上等よ、錬金術師やタタラ、装備製作者みたいなのが集まってできたギルドの大本ね。性質上冒険者ギルドとは違って分化したところがないのが特徴よ。っていうかそもそも、製造業同

士で余計な争いをしないようにしましょうって生まれたギルドだしね」

「はえー……ネットゲームにもあったなあそういうの」

「だいたいこのネットゲームにはいわゆる戦闘職と生産職があり、それぞれ役割が違ってくる。」

そして互いが組む理由もだ、戦闘職は互いにPTを組み合せてMob狩りやボス狩りに出るのが主な理由でたまたま生産職が交じるのは身内の趣味だったりとか、あるいは戦闘職だけでは埋められない部分を埋めるためということが多い。

だが生産職だけで固めるギルドのようなものはたいてい自分で使うのではなく、マーケットでの金策目当てということが多い。しかしながら生産職が装備や素材を流さないと戦闘職は困ることが多く、彼らがいないとゲームが成り立たないということは往々にしてあるのだ。

一方で悪どいところでは買い占めや相場操作を行うこともあるため、そのすべてが歓迎されるわけではない。事実自分はフリーだったが、たまに被害に遭うことはあった。相場読みも楽しいと言えばウソではないが。

——という想い出を思い返すと、第一印象はなかなか大丈夫じゃないがまあ、なんとかなると信じた、信じよう、信じる。

「やっぱりマーケットボードの前はずっと待機してたり?」

「依頼表の前に人だかりができるのは冒険者ギルドの話よ?」

「マケボ戦士はいないのか……」

ちよつとだけさみしくおもいつつも、休憩をはさみつつ街を縦断した。

街を縦に横切る道中ではまっとうな教会だとか、やれ別のギルドらしき建物だとかが見えなるほど、やはりある程度建物を身綺麗にしているあたりまともなところはそれが普通でポーンギルドの建物がそうであるだけらしい。

同行している店主ちゃんというにはポーンギルドの廃教会は古く



に街の経済が困窮したときに、支援金が打ち切られた都合で打ち捨てられたものであるらしく、そこで誰にも使われていないのに目をつけて引き取ったのがはじまりだそうだ。

「最初の掃除が、いっちばーん大変だったケドね」

「懐かしいわねえ……まともな掃除のやり方知ってたの、店主ちゃんとリリーしかいなかったから」

「リリアナ嬢、煙草吸ってるだけじゃなかったんだな……」

「リリーはああ見えて器用よ？腕のいい錬金術師だし、ギルドの収入の半分くらいはリリーがいなかったら成り立たなかったんだから」  
「ふあえー」

ウィッチかと思ったが錬金術師なのか、錬金術師はゲーム内では文字通り錬金術で薬剤や素材を作るのが主な役割で、付与エンチャンター術師としてもなかなか懇意にさせてもらっていたクラスだ。HPMPSPの回復からスキルブースト、生産成功確率上昇までさまざまな薬剤を作れるのが魅力的なところで、いわゆるナマモノ系の素材から成分や加工素材を抽出できるのもこのクラスである。

彼らがマーケットに生産用薬剤を並べてくれていなかったらいまごろ自分は干上がって、マウスをおいしいねえキーボードおいしいねえと撫でていただろう、マケボ戦士達には感謝しなければいけない、あとでリリアナ嬢にも感謝しておこう。

そういえばそれらも製造者ギルドにいるとのことであるほど、こちらにおけるそれらの製造過程を学んでおくいい機会だなと思った。

「……つきてー！何度見ても華のないとこだことー！」

メイリオの言葉で自分がそこにたどり着いたことに気づき、ほほうここが、と製造者スミスギルドの外観を見る。なるほど機能美、機能美、といった華のない外観だ。だがこういうギルドの拠点ホームが殺風景なのは割とネットゲームでも見られる光景なので、やっぱり職人気質の人間は似た感じの感性を持つのかな、と。

考えていると、店主ちゃんがノックもせずに入っていく、メイリオもだ。

彼女らは門構えにいる警守を顔パスすると、自分のことも連れだど

言い通らせる。護衛という風体じゃないからまるで女の子についていく軟弱者ボーイのようだと見られている自覚があるので、警守さんの目線はスルー、既読スルーである。このオルカ、スルースキルが高い。

「さて内装は」

「なんもおもしろいものはないヨ」

なるほど店主ちゃんが言うと言説力がある。

角ばった普通の、なんというかいかにも受付なスペースがあり、入り口にすら資材が置いてある。かつそのままずんずん進んでいく店主ちゃんについていけばそこには、潔いほどどこでかい作業場のようなスペースがあるのだ。パーテーションでいくつものに仕切られた作業場はちらほらみれば炉の密集したスペースで剣を打っている鍛冶職人だの、鉄鎧の留め具をせこせこ留めている職人だのがひしめきあっている。

錬金術系統はさすがにこの作業場と一緒にくたにするともまずいのか分けられているのだろうか、見当たらない、さみしい。調理に関しては調理場だろうし、ここにはなるほど、うるさくして問題ない仕事“が集められているのだろうかと納得した。

「ひよっ子オ!!インゴッド十個もってこい!!銀だ!!」

「はいっ!!」

「やっばニツカ銅!!」

「はいっ!!」

「ヒエーツ……」

これが体育会系というものか、いや職人気質というものか。

ヒエーツヒエーツと唱えながらそんな作業場を進んでいくと奥に扉をはさんだ倉庫がありそして、そこは外から開け放たれた搬入口がある場所となっていた。なるほど直接ここに持つてきたほうがお互い都合がいいというもの、ちょうど空き時のように店主ちゃんとメイリオが倉庫担当らしい方に話を通すとちよちよいと、店主ちゃんが指でここに置き、といった感じで指示をした。

ふむ、ちようどいい板がある。

「見せない方がいいって言ってた気がしたけど、いいのかな」

「今後取引する相手になら、遅かれ早かれヨ、ランザは信用できるからさあ誰か来る前にはやくはやく」

「ほいほい」

いつものようにインベントリを操作し、トロール脂をぽいつと放り出す。

倉庫担当者であるらしい、くたびれた作業服を着て帳簿を手に持ったままの茶色髭ランザおじさんはほう、と軽く驚き自分にインベントリを持っていくんだな、大したものだと褒めたたえる。手慣れているあたりがさすがに年季を経ているなと思いついて、メイリオにいい人材を引き入れたなとも言った、こうまで褒められると嬉しい。

「しかしトロール脂か、まだ金等級の冒険者が集まってないから本格的な討伐はまだだつて聞いてたが、西の森のほうはもうおっぱじまつてるのか？トロール脂が大量に出回るようになるなら買取価格は引き下げるしかないぞ」

「はぐれ」を仕留めただけヨ、ニツサとオルカがさ。んだから早いとこ捌かないと値下がりしちゃうんじやナイ？トロール脂は多分このへんじやこれだけだシ、うまく捌けばそれなりには儲けられると思っうけどなア」

「なるほどなあ、じゃあさつそく見せてもらうが……なんだ……上質だな。刈り取りも本当にうまい、王都のほうでもこれほど上質で純度の高いトロール脂は見ないと思う。これなら十分に買い取り価格をつけられるが坊主がやったのか？えーつとメイリオの嬢ちゃんこの……」

「オルカです」

「オルカか、気に入った。君さえいいならまたこつちに売りに来てくれよ。こいつは逃せるものじゃないからな、色をつけて買い取らせてもらう……しかしわざわざ四角にして持ってきてくれたのか？こつちとしちゃ計量の手間が省けるからありがたいことこの上ないからな、そこも更に色づけしておこう」

「ヒエーツ……」

インベントリに入れたら自動で四角くなったなんて言えないのでちよつとヒエーツでごまかしておく。

労せず得取るってなんかちよつとだけ悪い気がするのは、自分が日本で生きていたせいなのだろうか。でも既に付与でたんまり稼げるって聞いているからなんともいかんとも、こんがらがりでちよつとだけ頭お菓子なる。

ランザ氏はトロール脂をよくよく観察すると、スベクタクル“解析”のスキルをもつて多分成分解析なのだろう、純度とかこう、いい感じとか、そういうのをする。そういえばニッサも持っていたし、いうほど珍しいものじゃないんだろうか、というかスキルもいろいろあるんだろうなあ……あとでメイリオに聞いてみよう。

「品質が本当にいい、本当に見たこともないくらいで……いやすまない、職業柄こういった“銘品”を見ると興奮してね。値段はすぐに弾き出そう、長持ちしないものだからこんなにもいいものはすぐ加工せねば」

「そんなに褒められると自分がつけあがりますよ」

「いいとも、いい腕を持つ人間はほとんどんつけあがってそれで、己の限界を知るとこまでとつとと行くべきさ。自分が“こんなもん”なんて思ってるうちはその先には行けないし、自分の腕を買い叩かれるのがオチってもんだよ……ポーンギルドにいなけりやウチで雇ってたんだけどなあ。まあ、そつちはいい人材を手に入れたよ本当」

「でっしよー……こんなナリだもの、この短剣を売ってなかったらただの貧民街貧相の物売り男と思つてたわよ！」

メイリオに背中をばばんと叩かれ、褒められているのかどうなのか。

だが腰元の短剣、〴〵みつつの付与がつけられたエルヴンナイフをメイリオがランザに見せるとそんなことも言ってる場合ではなくなる。ランザの目の色が変わったのだ。その目はちよつと自分のような経験の浅い人間には読み切れないが多分、職人の目というやつなのだろう。

Lv40帯の装備なんて店売りでひかえめお値段で売っていて、生

産Lv上げのために山というほどスロットを使い潰されていたものだがこちらでは相当な業物らしい、使い潰し用にインベントリにそれなりの数が残っていることがなんだか申し訳なくなる。

なおインベントリの同時確保上限数は999で同じ付与の場合また同様にストックされる……まあそういうことである。

「これはどこで手に入れた？」

「オルカが売ってたものだからあたしには……オルカ、実際どこで手に入れたの？」

「ウチもすごい気になってタ」

「ふむ」

三者三様、とはこのさまか。総じて期待値の高い視線を向けられるさまに、どう答えたものかと。

だがしようみ、隠すのも今更という気はする。だが手元にあと六百本以上あると言ったらどんな顔をするだろうか、はてさて、ここでは多分エルフの装備というだけで業物らしい、結構なお値段になるのだろうか。これを売って余生を過ごそうおじいちゃん……このオルカ、怠惰である。

されどこのオルカ、正直者である。

正直者でいれば善き人生を送れると、そう信じている。

「まだまだある」

「本当か!? 君さえよければ売ってもらえると嬉しいんだが! エルフの作る武器を最近壊しちまってな、参考資料になるものが無くて困ってたんだよ」

「別に一本くらい構わないけど、ふむ」

「あー……オルカ、オルカ、ちよつといい?」

はてメイリオ、なんでしよう。

「エルフの武器がなんで高いか、持ってるなら知ってるよね?」

「わからんちん」

「ああつ、もう……エルフはね、排他的じゃないけど閉鎖的な集落で過ごすのよ、だから当然技術や“モノ”の流出をすごく気がかりにするの。信頼する人にしか武器なんて譲らないのよ……それを知った

上で、あたしにこれを買ってくれたのよね?」

「いやエルフの友達はいないからなあ……」

「あなたじゃ奪う盗むなんて器用なことできないだろうけど、あなたほどの人だから信頼してこれを買ったんでしょね……でもこれの作り手が不憫ね……」

はてさて、このオルカ、やはり無知である。

そんなものだったのか……剣と短剣、弓まで持っていたものだから、どれにするかと聞こうと思っていただけののだが。なるほどこれを安易にバラ撒くなど釘を刺されているのだろう。しかし言った手前引きもできない。さあてどうする、ううむどうする。

「まあ売るのはあなたの勝手だから何も言わないわ、あなたほどの人にとつてはその程度の価値なのかもしれないし」

「ふむむ……じゃあ剣だけ譲ろう、長剣をひとつ、お近づきの印に」

「譲る?今譲ってくれるって言ったのか?」

「これは別にエルフの友人からもらったものでもないし誰が悲しむでもないから、ならここで生まれるランザ氏との信頼を願って寄贈することにするよ。『付与』は自分たちでやってくれとは言っておくから、まあやっぱりその、仮にも男だし、言った手前だし、だし」

「ありがとうオルカ君! ……君の名前をマスターに覚えさせておくよ」

「ヒエーツ……」

このオルカ、見知らぬ人は苦手である。

普段はずかずか人の領域に入っているように見えて、その実内心結構びくついているのだ。まあ考えるより先に身体が動いてしまつては仕方ない、つまるところノーカンということである。人見知りというほどではないし恩義は感じるから、コミュ障ではない、きつと。

ランザのハグを全身で受け、おじさんパワーを一身に受ける。このランザ氏コミュニケーション強者である、間違いない。

「んまア、それくらいなら……オルカ、あとでウチからも言うことあるから」

「いやです」

「あ？」

「ヒエーツ……」

このオルカ、お説教も嫌いである……。

結局そのあと、販売のとりまとめは店主ちゃんがこなした。

しかし40帯の装備ですらこの扱いなのだ、50、60だとどうなるだろう。

仮にストーリーイベントの報酬の魔王剣とか出したら、どうなるのか。

このオルカ、ちよつとだけ心がドキドキしている、悪いオルカである。

## 9話―メイリオの短剣と女王の王冠―

帰り道というとちよつとだけワクワクするものである。

理由はたぶん小さいころに帰り道はいつも冒険の連続だったこととか、歳をとるようになってからは買い食いや寄り道が常套になっていたからだろう。事実いま自分はふらふらと道をそれたり立ち止まりながら、親に手を離された子供のようにあちらの露店やこちらの出店へ行ったり来たりしていた。

無論ママはメイリオと店主ちゃんである、でもメイリオママ……という属性は多分ないし、店主ちゃんママも多分ない。あつたとしても毎朝フライパンをカンカンカン！すごい朝！あき!!と起こしてくるタイプであると思う。

「いいフライパンだ、素材は何を使ってるのかな」

「お客さんいいところに目を！これは貴族様の台所から流れてきたちよつとした趣味品で、中古ですがミスリルが混ぜ込まれてるんだよお！火を使わないでもマナを流し込めば熱がこもるってもんでね、いやあ……このへんじやこんなもんはなかなかお目にかかれ」

「いい音が出そうだ」  
「!?」

「買った」

無駄遣いを……、という店主ちゃんの呆れた声をうしろに、お財布から金貨を取り出し支払う。

この世界に来てからはじめての買い物だがこのオルカ、予習は万全である。金銀銅賤といった分類で分かれていて、賤貨を十、銅貨を百円玉基準とするなら銀は800〜1200、金は7000〜14000程度をうろうろしているそうだ。なぜ後者があいまいなのかというと銀相場や金相場で価値がちよこちよこ変わってくるらしく、商業ギルドの公開掲示板で相場はわかるそう。

その上に白金やマナ結晶をそのまま貨幣にしたものもあるが、商



人の大規模取引や国家としての取引の際に使われるいわゆる「手形」の側面が強く、あまり見ることはないらしい。

そうしていると、金貨を見た露天商さんが苦い顔をした。

「おや金貨か、すまんがお客様、ちよつと今金貨の値が安くてねエ……もうちよつと銀を積んでくれないか」

「ううむせちがらし……でもやむなし」

「オルカ」

なるほどやむない、人間生活あるもんね、と銀貨を追加で出そうとする。と、店主ちゃんに横合いから止められた、というか前にずいっと出てきた。はてさて何かしてしまったか、と見ていると、任せな、と店主ちゃんが手で自分を制する。

なにこれかつこいい、キyunとしちやった。

「おじさくん……このフライパン、だいぶ使い込まれてるよねエー」

「いやあく流れモノだし」多少は「仕方ないよねえ」

「加工が剥がれるくらいに使い込んでるのは、ちよつと違うんじゃないかなア」

「いやあ、でも綺麗だろう？」十分使える「よねえ」

「そうねエ、」ミスリル粉末がこそげ落ちてる「のはなんでだろうねエ」

「うっ……」

にらみあい、とはこういうものなのだろうか。蛇と蛇、先に動いたほうが負けるのだ、俺は毒を持っているぞ……というばかりの無言空間がしばし場を包み、通りの喧騒だけが流れては駆け抜けていく。

……先にカエルになったのは、露天商のほうだった。

「参った参った！確かに使い古されたものじゃああるけどさ！でもまだ使えることだけは保証するから、な、な！」

「ガラクタ売りつけよつてわけじゃないんだネ」

「詐欺ってわけじゃない程度に騙し合いはほどほどがいいのさ、言い訳できる程度のな。編み込まれたミスリルに価値はあるしなにより、綺麗にここまで磨いたんだ……綺麗な飾りにはなるだろ？なにも完全に使えないものまで売るほど悪辣じゃないよ」

「ふむむ、じゃあ買おう、スロットはないけどこういうの欲しいから」  
「毎度毎度、銀貨7枚までまけておくよ、詫び料だ」

おお、これは勝利宣言。

お財布から銀貨を取り出し渡して握手、ちなみにこのお金は出る前に、メイリオが先立つものは必要だろうということ。店主ちゃんに頼んで自分に渡してくれたスロ3杖の売り値のいくらかだ。店主ちゃんとしても自分にはお金の使い方を学んだほうがいいとのこと。補って余りあるくらいの額を渡してくれた。

使いに使って冒険しろということだろうか、ならばこのオルカ、散財の準備はできている。

さあ皆のもの、先へ進むぞ。この世界の出店という出店を買い漁るのだ。

とりあえず日が高くなって暑くなってきたから、飲み物買おうね。  
なおそのあと、ちらつと立ち寄った掲示板の銀相場では銀が高騰していた。

銀貨七枚は金貨一枚より今高いらしい、なんでも魔獣に効果的な銀装備の補充が各地であるらしく銀不足のようであるほどおのれ騙し合いというやつか。店主ちゃんに肩をぽんつと叩かれながら、消費者の世界は厳しいとそう感じる昼下がりがりだった。



スピエールの街を縦横に刻む大通りはその中央に——ロータリーと言う言い方が近いだろう、広く開けた円形の交差路があり、余ったスペースには商店や出店、まどろみの時間を過ごす人、そんなものでひしめきあっている。

見ればほほう、いろんな種族もいるものなのだ、と感心もするのだ。

耳付きにゃんこやしっぱわんわん、角付きに果ては羽根つきハーピーじみたのもまである。

そういうのはさすがに飲食店の店員として見ないのはまあ、需要の

関係がみてとれるなと思いつつ、ここまでじっくり街を見てもいなかったのだなとふと感激がこころにのぼる。そうだ今いるのは異世界なのだと思いつつ、現実とのずれがちよつと縮まった気がした。

そしてそういう場所では当然出会いや別れ、もしかしたら新たな<sup>スベクタクル</sup>発見があるわけだが、その出会いも発見もそのすべてがよいものに限らないものがある。また帰り道に息を切らしてしようがない休憩でもしよう、と座っていたベンチにおいて、自分はそれを肌をもって感じるようになった。

「あらまあまあ、あそこにいるのは『いちごジャム』のメイリオちゃんじゃありませんこと?」

さてはて、いかにもな挑発じみた声があからさまにこちらに向けて届けられている。

自分にはなんのことやらさっぱりわからんちんであったがふと横に座っていたメイリオを見ると、これでもかというほど嫌な顔をしていた。それこそ不機嫌を通り越して嫌嫌機嫌といった感じで、ヒーツとつい声が漏れてしまう。

ただ視線はそれとは別に、一直線に別の場所をにらみつけるのだ。別の場所とはどのつまり——声の間こえたところだった。

「……メイザベス、今月の取り立てならもう払ったはずよ、消えてくれないかしら」

「あらあらメイリオ、『グイーン』とお呼びするのが筋じゃなくって? あなたが私達からお金を借りてる事実は変わらないのだから、少し貸してくれた相手を敬うべきだと思いますわよ?」

「誰が! 新人騙して不当契約結ばせるの、あんたの常套手段だって知ってるんだから!!」

「口を慎みなさいメイリオ、どちらにしたってあなたの立場をわきまえることね……とまあ、今日はデートの最中? それならお邪魔しちやっただかしらと言いたいけれど、ふふっ」

はて、こちらを見てくるのは『グイーン』と呼ばれた女だ、長い赤

毛はメイリオと同じ色で、取り巻きを二人も連れてくる。

装備がそれなりに、というかぱつと見でLv35帯くらいのそこそこマシなやつであるところを見るに、いまのところこのあたりで見た冒険者の中ではかなり上等なのだろう。とりあえず取り巻きだけでもメイリオはだいぶ実力差があるように見えた。

防具のLv帯に関してはデータベースに関する知識と経験で予測しているだけだが、赤い軽鎧は覚え榮えあるクリムゾン・シリーズに近いだろう、機動力を高めた反面防御が薄いトゲトゲな外見のタイプである。が、それより気になるのはメイリオの借金漬けというワードだ、これは雲行きが不穏に流れてきた。

「あなたが男を連れてるなんて初めて見たわね、あなた、お名前は？」  
「オルカです」

「オルカ君ね、わたしは“クイーン”……あまり自慢するほどじゃないのだけれど、この街の最強ギルド“クイーンズクラウンの女王よ、以後よろしくね。ところでメイリオとはどういう関係なの？彼女とは知り合いだからちよつとお姉さん聞きたいなあ」

「メイザベス、あんたね……」

「はあ、行くアテもないところを拾われたというか、ポーンギルドに拾われたというか。あ、付与術師です」

「あらあらまあまあまあ！いい話じゃない、つまり恩があるっていうことね？それに付与術師なんていいじゃない、食いつぶれもないしポーンギルドが欲しがってもそれは仕方ないっていうことよねえ……そうねえ」

メイザベス、という名前なのか、クイーンはあだ名や称号だろうか、メイリオがさつきから言っていることから二人はある程度知り合いなのだろう。クイーン氏は自分の前に来ると前かがみになり、紅色の軽装鎧に包まれたそれなり大きな胸を強調するようにしてくる。

だが残念であるな、このオルカ、趣味が違う。

そうしてふふんとしていると、クイーンが話を続けた。

「あなた、よかつたらうちに来ない？」

「メイザベス!!」

「ポーンギルドなんかよりいい待遇を与えられるわよ？付与に使う器具も最高品質が揃ってるしマナポーションも三流品の苦いのじゃないよ、飲んでも楽なものばかり。それにうちはね、女の子だけのギルドなの。ちよつと気になった子がいたらつまみ食いくらい許すわよ？..」

「あんたねえ!!」

「あら？ただの引き抜き交渉よ、どこのギルドでもよくあることだしよ？」

「あやしへの嫌がらせだけでなくせにツ!!」

突然の引き抜き交渉、そもそもこちらに来てまだわずかの自分としては良し悪しもわからぬ、このオルカ、無知である。だが嫌悪感をあらわにしてメイリオが反抗するのだ、ただし彼女もつかみかかったりはせず、ただ言葉を挟み込むだけ、手の震えが強すぎるあたりつかみかからないというよりもつかみかれないのだろう。

それだけこの二人の実力差が開いているということだ。個人あたりのレベルはプレイヤーが相手なら見られたが、NPCやMob相手には見られないのはネットゲームと同じ仕様らしい。はて、それでも何か見られるスキルを持っていたな.....あれは確か。

「ポーンギルドにいたってあなた、一生貧相に暮らすだけよ？付与術師なんて将来を約束されたみたいなものだし.....あのウイツチの錬金術師みたいな世捨て人でもなければ、いる理由なんてないもの。特別待遇ってやつよ？」

「ふむ」

「ふふ.....ここで、メイリオの見てる前で決断してくれるなら、ちよつどいいし私がギルドの皆に紹介してあげるわ。男子禁制のクイーンズクラウンで唯一の男子なんて、夢のような生活じゃない？ポーンギルドなんて所詮貧民街の廃教会を拠点ホームに持つてるようなところだもの.....それに、リーダーはあの.....」

「メイザベス!!」

「よしなヨ」

とうとう食って掛かろうかと、脚を踏み込もうかとしたメイリオ。

だが今まで居心地悪そうに、足先でしきりに地面を叩いていた傍から見てもイライラしているといった姿だった店主ちゃんが動きその肩を持って止めた。

彼女の静止にメイリオが乱れる髪も気にせず振り向くと、それこそ涙目だった。

「チャーニーー！」

「メイリオじゃ勝てないってわかってるでシヨ。ここで先に手出しや警守にもしよっぴかれて損するのはウチらだけだヨ。いまは耐えなメイリオ、こんな人でもないヤツらはお天道様にしよっぴかれてろくでもない死に方するもんだヨ」

「あら商業ギルドの爪弾き者さんじゃない、気づかなかったわ。私あなたみたいない弱い人が見えない目をしてるの」

「若作りの年増がなんだって？こつちからすりや化粧の「アラ」が人混みでも目立ちすぎて困るかんだけどなア〜？そろそろ引退時期じゃないのおばーちゃん、取り巻き二人に寝首を搔かれないようにネ」

「……………あなたの髪色も、気に入らないのよね」

ヒエーツ……………、女の戦いとはこのことか。しかしマーチャントの店主ちゃんが立ち向かうのは度胸があるだろう、しかし臆せず胸を張りトゲを突き刺す姿はなかなか頼もしい。とりあえず店主ちゃんを怒らせるのはやめよう。

怒りを顔に浮かべ、しかし深く息を吐いてクイーンが姿勢を戻す。

背丈はモデル並であり、自分ととんとんだ、さぞメイリオと店主ちゃんには威圧的だろう。事実店主ちゃんはともかく、メイリオは視線を受けただけで一步後ろに退いた。

「さてどうするのオルカ君？こんな「爪弾き者」ばっかりのところで骨を埋めるつもり？」

「オルカ」

「ああ、もう決めた」

「ふふ……………いい子ね」

クイーンが笑む、勝者といった顔だろう。

だがこのオルカ、正直者である。

「——遠慮します」

「あら？もしかしておバカさん？」

「まさか、第一に自分は女性関係がそんな得意じゃないし、女の園の男一人とか地獄だし、第二に自分〃も〃騙してるとは限らないし、第三に……あんた、〃カルマ値が極悪〃だ、つまりどういうことかかっていうと——個人的にあんたが気に入らない」

「カル……？」

そう、カルマ値である。

先程思い出したが、スベクタクル〃解析〃の応用で見られた。

自分のやっていたゲーム内では主に、クエストの分岐などで増減する善悪基準を決める数値だ。この数値によつて受けられるクエストや行けるフィールドにも違いがあるため、本当にやりこみ要素は多い。ただゲーム内では救済の無限クエストで操作できたというのがあるのだが、しかしここは現実の異世界、所業がまんま反映されると言つていいだろう。

ちなみにこのオルカ、中立である、正直者である。

「……はあ、まあいいわ、ちよつとメイリオを懲らしめてあげようと思つたけど……それなら仕方ないわね」

「ざまあないわメイザベス、高貴なお方はお部屋に籠もつたらどう？」

「あらご丁寧に、でもどれだけ言つてもあなたが不利な立場に変わりはないのよ……あら」

「あつ、それはダメっ」

冷めた表情をしたクイーンの顔が再び温度を増す。

視線と伸びる手の先はメイリオが右に携えていた短剣だ、自分が付与をしたものでみつつの付与のつけられたエルヴンナイフ。クイーンは鋭い手付きであつというまに鞘から外し、メイリオの止める手も意に介さず自分の手元まで手繰り寄せる。

膂力が違うのだろう、レベル帯も相当違そうだ、メイリオの悔しそうな顔が痛い。

「……………エルフのナイフね？いいものを持つてるじゃない、借りたも

のを返す余裕はないのにこんなものは手に入るなんて儲かっているじゃない」

「それはあたしのよ！オルカから買ったのッ！」

「ふふん……これは今回の迷惑料と、借金のカタにもらっていくわ。ちやんとこつちで査定して減額しておくから安心なさいな、それにそのオルカ君がいるならいくらでも作れるでしょ？」

「そんな言い訳が通用するわけ……！」

「メイリオ」

ふむ、これはよくない、かといって自分でもこのクイーンというのには勝てない。

このオルカ、攻撃ステは1である。

かといってこれを見過ごすとしよつと寝覚めが悪いのだ。

このオルカ、大反抗作戦は常に策士として行う。

「短剣もう一本貸してくれるか、余ったほう」

「は？こんなときに……はい、何に使うの」

「見てなつて……スローか、十分」

ノースロットだったらし少し不安だったが、メイリオが渡してくれた短剣はスローは確保していた。

ならば十分である、受けるクイーン！このオルカの必殺を！とばかりに自分が気合の入った付与をしそして、できあがるのは美しい白色のオーラをまとった短剣なのだ。もともとは安っぽい外見であったが神々しいオーラが見えるとなかなか映える……いい仕事をした。

「あら……面白い付与ね、見たことがないわ」

「オルカ、何を……？」

「ああ、もちろん……」

そうとも……くらえ！必殺——

「お譲りします」

「えっ……」

「あら、いいの？」

「もちろん、お近づきの印とあとよかつたら、メイリオの借金のカタにでもしてもらえると」



「ふふ、いい子ねオルカ君。気に入ったわ、さっきのは許してあげるからポーンギルドが潰れた時にでもいらつしやい、待ってるから」

何をしているのか、という顔のメイリオと店主ちゃんをよそに、自分はメイリオの光る短剣を手渡す。

すると付与の異変には気付くだろう、この付与、もちろん効果はある。それは“無重力の”であり、重量を0にするものだ。とはいえ実際には小数点以下で重量が設定されているらしく、ちゃんと地面に落ちるからそのへんに吹っ飛んでったりしない、安心である。

クイーンは軽く短剣を振りその気配に気付くと、短剣に軽くキスをしその場を去っていく。取り巻き二人もメイリオと店主ちゃんには軽蔑の顔をしたが自分は気に入ったのか、軽く会釈をして去った。

——あとには沈黙が残り、しかしすぐ破られる。

店主ちゃんが嫌な目を送り、そしてメイリオがとうとう自分につきみかかってくるのだ。

レベルは比較にならないだろうが臂力の差は相当で、がくと首が揺れた。

「……なんであんな女に尻尾振ったの」

「まさか、尻尾なんか振っちゃいない」

「でもッ!!」

「自分の付与—— “地雷” だから」

そう、地雷なのである。

メイリオが首をかしげるので、やはり説明のしようがあるだろう。

そう、“地雷”とはネットゲームにおいて、災難が降りかかる爆弾といったものだった。

「じら……地雷?なにそれ?」

「あの付与、役に立たないんだよ。とかいかいづつか強力な”付与

エンチャント

”にはデメリット付きのものがあってさ、【無重力の】はそれなんだ。装備の重量がゼロになるメリットは大きいんだけどね」

「そこだけ聞くと、すっごいメリットに聞こえるけど」

「装備重量がゼロになるかわり自分の重量が増すんだ、つまり攻撃速

度が低下する。おまけに重量0だから重量を武器にする近接武器に使うと威力も低下するし、踏んだり蹴ったり——タンクがたまに防具につけて変わった使い方をしてるしか見ない」

「そ、そうなの、ね……」

溜飲が下がったのだろう、説明を終えるとメイリオが手を離す。

そして自分が襟を整えると、メイリオが続けて質問をした。

だがそれも想定済みである、このオルカ、鋭いのである。

「でもそれだけなら持たなきゃいいんじゃないの？結局あたしの短剣渡しただけじゃ……借金のこと、気にしてくれたことは嬉しいけど」

「そこはおいおい聞かせてもらおうとして、まあ、呪っておいたから」

「は？」

「はア？」

「呪っておいた」

呪いである、呪い装備である。

名前で十分なくらいにはデメリットなのだ。

「——取り外せなくなる」

「ええ……」

「ウチらでもそこまでやらないヨ……」

「え？え？」

ドン引きという言葉を表情にするとそうなのだろう。

メイリオはちよつと嬉しそうだったが、店主ちゃんはドン引きだ。

ううむ、やりすぎたか、そんなことないよな。

上位ヒーラーなら取り外せるし、自分もスロット潰せば解除できるしそれに——あれ、まで、それできる奴こつちにいるのだろうか？オルカは訝しんだ……でも考えても仕方ないしもう過ぎてしまったことなので、なにもなかったこととした。今日も昼下がりは暖かい。

## 10話―メイリオの短剣くポケットの中く

「それで、あたしのはどうするのよ」

「おや」

「短剣みんな持ってかれちゃったんだけど……そのうちスカツとする噂が流れるだろうし、オルカが悪いっては言わないけど武器が無くなっちゃうとねー。倉庫に置いてある古いナイフ研ぎ直そうかなあ」

「ふむ、それなら」

確かに勢いづいてしまったとはいえ、メイリオには悪いことをした。

なるほどそれならかわりをあげるべきだろう……うむ短剣か、ナイフ系列は他の武器に比べて安価にスキルレベルを上げられるから人気なんだよな、生産職は暗殺者よろしくだいたいナイフをいっぱい懐に忍ばせているという——もちろんこの自分も例外ではない、なおサブクラスはアサシン系じゃない。

休憩所の天幕の下で、懐から二本のナイフを手にメイリオに見せる。

さてあなたが落としたのは。

「このLv40帯エルヴンナイフでしょうか、それともこのLv70帯クリスタルナイフでしょうか」

「アワワワワ」

「綺麗……見惚れるくらい……じゃなくて！オルカ、オルカしまって!?!」

「あわわ……」

言われるがままにナイフをインベントリにしまう、うむむバレないようこっそり出したのだがまずかっただろうか……エルヴンナイフが業物と言われるとはいえ、先程宝石店に通りかかった感じクリスタルの値段程度はそれほど高いものではないと認識していたのだが。クリスタルナイフも店主ちゃんとメイリオが動転するほどのもので

あつたらしい。

「ど、どこでそんなものをををウオツ」

「店主ちゃん落ち着いて……落ち着いて、オルカ、どこでそんなものを手に入れたの？」

「70帯のナイフはスキルレベリングにちょうどよくてなあ、コスト比を考えると40と70に行き着くんだけ、Lv110装備はひとつしか手に入らないし90帯100帯はコスパが悪すぎるから持ってないからそこはごめんね……」

「は、はあ……もうあなたには驚かないほうがいい気がしてきたわ」

呆れた、とメイリオがため息。

苦勞のこもったため息だ、またやっちゃいました？

ううむ、うむ、うむと唸った。

「その〴〵なんとか帯〴〵ってのがよくわからないけど、ヒツヒツフー……うん、落ち着いタ……ウチもある程度ポーンギルドで過ごしてたカラ〴〵業物〴〵ってのはよくみてきたけどさア……ここまで、ここまでモノ見せられると全部吹き飛んじやうよネ」

言いつつ、店主ちゃんは周りを見る。

特に誰も見てくる気配はなく、ちらつと顔見知りの手を振ったらしい以外は何もなかった。

「誰も見てなかったのが、よかつたネ」

「うぐぐ……帰ったら詳しくおはなしきかせてもらえると」

「そうねエ、オルカにはそこんどこも教えないとネ。メイリオ、とりあえず今日はかえろ、夕暮れ近いしつかれたつかれた」

「おっけー、まあお夕飯前にでもこの話はしましょ、リリーやニツサもそろそろ帰ってるだろうし。オルカが規格外とはいえ、こうもされるとあたしも参っちゃうわ、いろいろ教えないとね」

「ヒエーツ……」

スパルタ教育だろうか、圧倒的劣勢を強いられる教育だろうか。

しかし確かにまだまだ常識が足りないというものはあるのは違くない。

ううむ。



ポーンギルドに帰って来るころには夕暮れが近くなっていて、なるほどこうやって一日を終えるのだという空気が道を伝ってくる。

出店はしまわれ、歩く人はまばらになり街の衛兵がちらほらと数を見られるようになるのだ、やはり勝手知らぬはファンタジー世界、夜の帳が下りるころには街の治安も一段と悪くなるのだろう。女子供だけで出歩くにはよくない時間がそろそろくる、このオルカ、二人を守らねばならぬ、STR1だけだ。

ただいまを言って門構えをくぐればすぐに始まるは誘導尋問、さああれを出せこれを出せ、イチから常識おしえたるのオンパレードなのだ。あらためて自分の持ち物を検査してみないと落ち着かないのことで、堂々集まるわ店主ちゃんにメイリオ、ニッサにあとりリアナ。ケイはまたどこかに出ているらしくアーリン団長も書類仕事が終わらないと嘆いていた。

はてさてどこから出していくかはたまた。

出品No. 1の座を勝ち取るのは一体何者か。

「とりあえずしたいことは、あなたが何を持つてるか、何を即座に出せるかの把握よ。街に出る前にやっておくべきだったのかなって思ってるのはまあおいかせてもらうとして、あなたがどんな爆弾を抱えてるかやっぱり見ておく必要があると思うわ」

「ってなワケで、協力して欲しいナーなんて店主ちゃんのお願いだヨ」

「それは構わないんだけど、ふむむ……ああ、そのためのフードちゃんか」

「わ、わたしが、スベクタクル解析”するから……大丈夫」

出てきたものもののだとして、どうやって価値やら効果を説明したものかと考えているとなるほど、ニッサがいるから大丈夫となる。彼女はどうかやらギルド唯一の解析スキル持ちのようので、近くでリアナ

の煙草の煙を吸ってけほけほと咳き込んでいる以外はとても頼りがいが感じられた。

「というか本当にここまでずっと煙草吸ってるなりリアナ嬢。」

「ふはあー……強心剤はストックしておいたから、はあー……ニツサが驚いて倒れても大丈夫よ……」

「ヒエーツ……」

そんなになるまで脅かしてしまったらこちらのほうが申し訳ない。が、クリスタルナイフ程度であわわと店主ちゃんが言うあたりなくはない。

まあやってみないとわからんもん、さて十分なスペースを空けよう。

「とりあえずじゃあ、テーブルを端に寄せよう」

「なんデ？」

「たぶんいっぱいになる」

そう、ライドパートナーのような大きなモノも結構あるのだ。

このインベントリ、原寸サイズだとしたら死活問題である。

「さて、じゃあ……そうだな、まず一般的なものからいこう」

「逸般的じゃないことを祈るわ」

「EXヒールポーションだ、使うことがないからフルストックしてるんだ。こつちはEXマナポーション、職業柄割と使うことがあったから700個しかない」

「……ニツサ、いやリアナ、鑑定できる？」

インベントリから取り出すわ緑色の透き通った飲料、まずい、苦い、でものごし最高なニクい飲料EXヒールポーションである、HP最大値の50%を即座に回復してくれるすぐれものだ。基本的にはスロットに入れておいてやばい死ぬ、となった時にキーを連打し、ゴリ押しでダンジョンから帰還するときなどに使う。

マナポーションはそのMP版であり、これは付与術師の都合柄ある程度使っていた。というのも付与自体がMPを急速に消費するため、そりゃあたまの付与なら問題ないがスキルレベリングのためにひたすら付与を繰り返すときには同様連打するものであるからである。

メイリオや店主ちゃんがじっくり見るも、薬品ということでは造詣がなかったであろう、首を振る店主ちゃんを見て、傍で興味なさげにしていたリリアナに声をかけるのだ。相も変わらずどこを見ているかわからない魔女はスパスパと煙草を吸っていたが、頼まれるとはいはい、といった感じに座っていたテーブルから腰を起こしてEXヒールポーシオンを受け取った。

「……ふあー…はあ、はあ…はあ…はあ…？」

息切れした麻薬中毒者みたいな息の整え方をするのがリリアナだ。本家の錬金術師が見た場合どうなるのかというのはいかんとも付与術師でありかつ、この世界に常識に疎い自分には見当がつかないがしかし、リリアナは眉間にしわを寄せてポーシオンをひたすらに眺めている。ときにはひっくりかえしたり、またこんどは軽く振つてみたりだ。上位ポーシオンとはいえ兼価版で最上級ポーシオンなどほごろごろしているため、そこまで価値のあるものとは思えないが。

そうしていると、リリアナが突如ビンのフタを空けおや、おやや、飲んでではないか！ああつそんなまづいものを一気に！ぺっ！ぺっ！なさい！あわわ…自分でヤケになってちびちびやったときが結構キツかったのにあわわ。

しかしはて、それほど嫌な顔をしていない。

煙草のがまづいのだろうか、喫煙者にはならなくてよかった。

「……イルカ、だっけ」

「オルカです」

「ああ、オルカ…うん、いいねコレ。苦味もマイルド、のどごし最高で飲みやすい、おまけに治癒力も相当だねコレ…ははっ、王宮あたりの流れ物？そうじゃなきや説明つかないくらいだよ…あー、煙草でせつかく酔ってたのが切れちゃったわ…うん、それくらいすごい、ふああ…」

「ふあえー…よくわからない」

きだるげに、でもちよつとだけ正気に戻ったみたいなの喋り方をするリリアナ。

途切れ途切れに言葉を出しているような喋り方もあって、いまいち

理解はしがたかったがしかし、そうしているとまた煙草に火をつけてつばやいた。再び明後日の方向を見て煙をふかすのが印象的で、たぶんまた呼ばれれば振り向くのだろう。

そうしつともしかし、最後にぼそりとだけつぶやく。

「…………コレいつも持ち歩けば、この連中は寿命まで生きられるかもねエ…………って、くらい」

「リリーが言うなら信頼できるネエ、それならニツサに鑑定させるまでもないネ」

「はい次！」

急かされるがちよつと、ちよつとまってくれ…………はて、次に出せるものってなんだろう。

スロット用穴あけドリルはなんか違うし、ガチャチケットは使いみちないし、はて…………じゃあとりあえず先に話題になったこれを出しておこう。

クリスタルナイフ、そんなに価値のあるものにも見えないが。

「たかだかレベリング用装備だし、クリスタルナイフに本当にそんなに価値があるのか？」

「……………うーん」

言えばすぐに頭を抱えるのは店主ちゃんだけではない、メイリオもだし、なんならニツサはあわあわしていてリリアナはまたどこ吹く風だ。

確か設定上におけるクリスタルは加工が容易で装飾品に使われているといった設定で、しかしマナの伝導率が高くさまざまな魔法を付与できるといった性質を持つ——といったものがある、が、実際には設定だけで他の武器と付与種類も強化の伸び率も同じだったはずだ。

それに各生産ポイントで簡単に採掘できるため、大量生産も容易でマーケットには安値で並んでいた記憶がある。というのがこちらの常識だった——様子を見るに違うらしい。

ちなみに等級はLv10帯から10区切りで素材が変わり、鉄、鋼鉄、銀、エルヴン、ドワーフ鉄、碧鉄、そしてクリスタルと移ろいゆ



く。さらに上位になると黒鉄エゴニーや禁断シリーズ、古代の遺物やユニークといった感じに分化していくが少なくとも黒鉄まではただの上位互換の並びであった。

「いいオルカ、そのナイフ一本であたし達は何日生活できるかわかる？」

「えーつと……3時間」

「なんでよ!？」

マケボを漁ると金銭などあつというまに消し飛ぶのだ、マケボ戦士の道は険しい。

と、いうのは冗談として、さてはて、あの銀杖ですら結構行くということなのでそれなりに行くのだろう、このオルカ、金の価値もまだ把握しておらぬ。

「半年よ、〃ギルド〃が半年過ごせるだけのお金が手に入る……わよね、チャーニー?！」

「ウチの鑑定は当たるヨ」

「そう、食費に売り物の材料費、ここの維持費に出張費用、装備調達費からあたし達の給料に至るまでゼーンぶまかなえるのよ、おまけにあなたが持つてるものだからまさかと思うけど、〃付与〃されてたら……」

「スロットは無事だが何も入れてないぞ」

「それならよかった……ってそうじゃなくて!」

「……まア、オルカに言っても割と仕方ないことはあるシ、とりあえず出せるモノ出してもらってこれは簡単に出しちゃダメーって言えばいいと思うヨ。ニツサは都度スバクタケル〃解析〃お願いネ、ウチはメモるから」

「わ、わかった……!」

店主ちゃんがすらつと羽ペンのメモを用意し、ニツサはクリスタルナイフを手取る。

それにしてもニツサ、フードちゃんと自分が呼ぶのはフードをかぶっているからだが、ここでも脱がないんだな。お部屋にいるときくらいは脱いでいるのだろうか、ここには仲間しかいないはずだが宗教的な理由でもあるのだろうか。

そうちらちら見ていたら目が合い、フードを深被りされた、なきそう。

「……にしてもクリスタルの武器、ねエ」

「そんなに珍しい？」

「オルカの故郷じゃありふれたモノだったのかもだケド、このラインゲルト王国の、それも生産地からずーっと離れたスピエールの街じゃアそうそう見かけられるモノじゃないネ、一生この街で暮らすなら毎日製造者ギルドスミスに通って一回二回見かけられるかくらい？ それくらいには貴重だヨ、クリスタルならともかく、クリスタルの武器”なんテのは”

「はえー……鍛冶師の知り合いは山ほど持ってたけどな……」

「ツテがあるならそのうち紹介してネ？ まア、知ってるかわかんないケド、クリスタルってのは加工が難しくテ……このへんはニツサが詳しいか」

「ふえっ……」

フードを深被りした矢先でのキラークラスだ、ニツサはふええとなるし、自分もヒエーツとなる。

とはいえ言われて説明しないのも悪いと感じたのだろう、ニツサはおどおどと説明しだした。

「えつとね、クリスタルはね……装飾品としては人気だし加工が簡単なんだけどね、武器にするには加工も取り扱いも難しいの」  
「加工が」

「うん……もともとマナが水晶に宿ったものだからすつごくキレイだけど、だから簡単に壊れちゃうくらいには硬くは、ない。でも正しく加工すれば、正しく魔術を書き込めれば……マナを流したときに何にも負けない武器になるの、マナを流したときだけ機能するからすつごく……すつごく、取り扱いがむづかしいけども、まさに……”魔剣”になる」

「それはなんとというか物騒な……でもなるほど、なるほど」

「それと、ね、クリスタルの鉱脈の取り扱いはエルフ、しかできないから、あんまりこつちに、でて……こない」

なるほどこちらではだいたいぶ事情が異なるらしい。

加工も難しい、生産元も不安定、おまけに強力とあつては確かに価値も高騰しよう、なるほど。

「それに、オルカのそれ……すつごく、よくできてる。エルフも簡単には作れないくらい、本当に “不自然なくらい” 精密」

「製造元が製造元だしな……ううむ、ありがとう、なんとなくわかった……これはうかつに出すとあぶない、と」

「まあ、それを持つてるオルカをたどればそのナイフ、その製造元、その流通ルート、芋づる式に手に入るだろうーって思うだろう連中がこの街にもわんさかいるーってことだね。だからそいつは封印封印、さあ封印よー」

言われるがままにインベントリにクリスタルナイフをしまいこみ、はて、次は何をと思う。

クリスタルでこれなら黒鉄エボニーなんかはどうなってしまうのだろう、あいにくと持っていないがでも、相当の値打ちになることは間違いないだろう。はてさて、注意深くひとつひとつ出していかねば……おつと、これは。

「ガチャチケはどうだろう」

「どこの商品券？」

「うう……」

当たれば一攫千金のガチャチケが商品券……うう。

とはいえここでガチャをどうやって引けばいいのかわからないし順当か。

そうなると、ふむむと頭を悩ませる、悪いお知らせか良いお知らせかどちらを先に聞きたいかのアレだ、はてさて自分から見ても紙くずなものから順次出していくかはたまた “とんでもないもの” から出していくか……はて、どうしよう。

「心臓がもたないから、一番いいのがあるならそれを見たほうがいいかもね」

「なるほど納得」

メイリオの言葉を信じよう、確かになるほどクリスタル程度でこれ

なら最初にどでかい衝撃を与えておけばあとから驚かれることはそうしないだろう。カモフラージュ作戦だ、これは前のより大したことはないですよ、先のを今買っておけばお得かも、なくなっちゃうまえにさあさあ、みたいな。

なるほどこのオルカ、納得である、では出してみようではないか。といっても非常に自らの目から見ても高価で効果てきめんだと思うものは複数種類あり、しかしぱつとみて「凶悪」なものはひとつしかないだろう。

インベントリの隅にしまいこまれていた黒色剣のアイコンをぴぴっと押し、スライドさせてお外に放り出す。さて、皆の衆これが我が全力全開、とくと見よ、ストーリーイベント最終報酬、されど使わない皆も持つてるということでインベントリにしまい込まれていた不憫最強である。

「必殺——」

ゴトリ、と置かれるは黒色の剣一振り、豪華な飾りはなけれど洗練された刻みのある一振り。

かつて魔王が振ったひとつで今亡き主を待つ一振り、ポケットの中の戦場である。

——魔王剣。

## 11話―メイリオの短剣と魔王剣―

ストーリーイベント、というものはネットゲームプレイヤーなら誰もが体験するものだろう。

というより、操作方法を覚えたりクエストの流れを学ぶチュートリアルがストーリーに組み込まれているネットゲームがほとんどだ。その過程でネットゲームにおける「物語」に足を踏み入れたプレイヤーはそのままストーリーを追ってもいいし、横道に外れて世界を楽しむ、ハウジングに勤しむ、ガチャ課金による商人プレイに入る……エトセトラ、やまほど楽しみ方はある。

とはいえ昨今のゲームは最高のレベリング法がメインクエストのクリアであったりするのも事実であったり、はては特定レベルまで機能が解禁されないなどは日常茶飯事なもので、そうでなくともメインクエストの進行には何かしらの「特典」がついていたりすることはよくあるものだ。

——この「魔王剣」も例外なく、その特典であった。

「ストーリーイベのクリア特典でありふれたものだけど、性能は折り紙付きだ。自分はいにくと使うにはステが足りなかつたからお蔵入りしてただけどまあ……ソードマン系列のジョブ持ちはこの中にもいるし、誰か使えるだろ、なんと業魔爆炎剣なんていうすごいのがつかえる」

ある時、レアドロップによるドロップ武器がM o b狩りやボス狩り、P v Pを席巻したころの流れとして、「これを持たない者は人間にあらず」のような論調——つまり「人権装備」といったものが自分のプレイしていたネットゲームにおいてあふれるようになった。

割とどこでもよくあることだがこれの面倒なところはそこに至るまでの過程、低確率のボスドロをひたすら狙う、マーケットに流れる高額な装備を買う、といった点において入手難度が跳ね上がったこと、重課金者とそうでない者に大きな格差を生んだとともにこれを持つていないとまともにP Tを組んでもらえない、などの事態が発

生することにもなった。

おまけに、これを手に入れた者がその装備を生産するボスを狩り続けるなんてのもあったわけだから未入手者は本当に手に入らなくなるわけで、批判が続出しその対策として生み出された「基準点」の産物がこの魔王シリーズの装備である。

ストーリークエストのクリアによって手に入るこの装備の取得を基準にしてエンドコンテンツが設定されたといういわくつきなのだ。

「最高の性能、最強の見た目、さいつよの入手難度……あのネットゲームにおいて必要だったのは、どこに基準を置くかだったんだ。それを置かないまま人権装備なんてものを実装しちゃったからステに乖離が発生しちゃうのも当然だったわけで、じゃあ、ここに最高レアの基準を置こうって生み出されたのがこの魔王剣だったんだよ。

だからこれ以降の装備に関しては魔王剣が基準になされたからインフレも起こさなくなっただけ、人権装備も鳴りをひそめて成功したのさ。まあ新規実装スキルでインフレしたんだけど……あれ、みんな」興味のあることだどといいつい長く語ってしまうのは悪い癖かもしれない。

だがはてさて、語っているのに誰も止めないのでつい語りきってしまったところで、自分が口を止めたことによって場が静止しているのに気付くのだ、誰もが静まり返りそして、もはや自分などに目が向いてないことに気付く。

皆、魔王剣に目が釘付けである。

禍々しくも洗練され、ゴテゴテとしない程度に装飾が施された運営のデザインセンスを感じさせる逸品。ステータスも最高ランクの竜門であり申し分なく、自分に適性がないという点を除けば欠点という欠点の見つけられない武器だろう。

見つめるのも仕方ない。

そんなふうな内心で笑っていると、はて、ニッサがフードをまた深被りしたではないか。

そんなにこわいの。

「……オルカ、これをどこで？ いや、これは……「何」？」

「メインクエ報酬の魔王剣」

「あなたに聞くとそうなるのはわかってたけれど……はあ、いや、はあ……うん、持ってみても大丈夫？その……呪い装備じゃないわよね？」

「見た目は闇っぽいけど無属性だから大丈夫だし、なんなら呪われてもないしデメリットもないから大丈夫」

「おっけー」

最初に口を出したメイリオの頼みを承諾し、ほら、と手渡す。

ちよつと武器にしては雑で危なかっただろうか？皆が一步後ろに引いたので悪いことをしたなと思いつつ、今度は丁寧に両手に乗せて手渡す。黒煙のエフェクトが立っているが別に熱くも冷たくもないように、なるほどこのあたりは雑だなとちよつとだけ内心笑った。

メイリオはその右手に魔王剣を持つと、はあ、と一息つく。

その顔は単純に言えば見惚れているようで、武器というよりは芸術品やあこがれの人物に出会った、憧憬の目といった表現が近いだろう。あの店主ちゃんですら周りをぐるぐる回って四方八方、あちらこちらから穴の空くほど見ているものだから、なるほどこれは確かに価値のあるものである、ということ自身も認識する。

——メイリオは少しだけ自分たちから離れると、試し斬りのように一振り、空を切った。

「すごい、この剣すごい、あたしがついていけない……振ってるのに振り回されてる、そんな感覚。今まで見たどの剣よりもすごくて、強い——あたしが持ってちやいけなないんじゃないかってくらいに、すごい」

感嘆するメイリオは新しいおもちゃを手にした子供のよう手を震わせている。

そういえば装備にも当然、装備可能Lvといったものがあるはずなのだがクリスタルナイフといい魔王剣といい、どうやらここにはそれがあてはまらないらしい。ただメイリオが言うように剣にふりまわされるということは、Lv110装備の魔王剣に対してメイリオのレ

ベルは乖離していると言っているいいだろう、レベルが低ければ装備できても、武器についていけないのである。

その理論で行けば自分はLv上限、あらゆる武器を使いこなせるのだが——このオルカ、STR1である。強烈な攻撃力減衰がかかるせいで草刈りにしか使えないのだ、この強烈な草刈り性能でお値段なんと無料、メインクエストクリアで手に入る優良芝刈り機である

「それにしても、またア……もう、驚かなくなってきたって思ったけど、とんでもないモノばかり持つてるよネ……はあ、いや……ほんとにこれはホントにもう、なんて言ったらいいか、その、ああつ、ごめん語彙が出せないからニツサ、解析お願いネ！」

「や、やらなきやダメ……？」

フードを深被りしていたニツサがおおずと顔を出し、店主ちゃんに聞く。されどやってみなけりや先にも進めない、これがなにかも知っておかなきゃいかんどもんと店主ちゃんが言うものだから、ニツサは名残惜しそうに剣を何度も振っていたメイリオから魔王剣を受け取った。

ここからでも、ニツサの目がまんまるくなって冷や汗が垂れるのがわかる。

悪いことさせてるな、やっぱりあとでペット用キャンディをあげよう。

「…… “スベクタクル解析” ！」

いつものように魔法陣が展開し、魔王剣を調べる。

そういえば気になるのは、こちらでの解析はどこまで調べるのだろう。Lv、名称、攻撃力や防御力、おまけにフレーバーテキストまで調べるのが解析スキルであったものだが、現実的なこの世界だと勝手が違う可能性もありありのありである。

「……ほんもの、の、魔王の、剣……？」

「ホンモノって、そんなことはさすがにないでショ……って思いたいけど……」

「いや、いや……！ “前の魔王” とは違うかもだけ、ど……！ 本当に、魔王が、使ってた……！ 剣だって、わかる……！ それに武器としての質



も、すごく、すごくて……メイリオがいうとおり、これ、ただの剣じゃない」

「だとしたらア、こんなモンがここにあるツテのは、とんだ問題な気がするケドなあ……」

店主ちゃんが苦い顔をして、頭を抱える。

はてさて、そこまで問題があるのだろうか、強力すぎるといった点であろうか。

なにぶん魔王はもとのネットゲームにおけるラスボス的存在であつたのだが、ストーリー上の存在だからカスタムプレイヤーにはゆるめの相手だ。はたしてこちらにもいるのだろうかと頭を悩ませつつ、そうしているとカツカツと、上から音が聞こえるのを感じ振り返る。

カツカツ、というよりはガシャガシャであつたか、白銀の全身鎧が階段を伝って降りてくるさまは、ああ、アーリン団長のお出ましであつた。

「実に威圧的な気配を感じて降りてきてみればなるほど、オルカ君がまた何かしてくれたみたいかな？」

「アーリン団長オッスオッス！」

「オッス……ああ、うん、とりあえずは」

「またも歩を進めて寄ってくるアーリンは、魔王剣のすぐそばまで寄る。」

そうすると、ほう、とヘルムの下からでもわかる感嘆の声をあげるのだ。

メイリオよりもずっと、思い入れのある声だった。

「魔王剣か、私の知っているものと違うが……いや、それよりも遥かに強力だ、実を言うと王都の地下に嚴重に保管された先々代魔王の剣があるんだが、それもこれと打ち合わせればポツキリ折れてしまうだろうね……私にはわかる」

「魔王？」

「そのあたりは生きていけば大抵は知ることだと思ふんだが……本当には知らないんだねオルカ君は。いいよ説明役を買って出よう」

ほう、この世界のメインクエストの履修というわけだ。

アーリンはそのまま手頃な椅子を探そうとするものの、テーブルや椅子を軒並み片付けられていたからか適当な樽を転がしてそこに座る。されどさすがに全身鎧、重くて樽が悲鳴を上げだしたので、仕方ないと立ったまま話を続けた。

「私が現役……ああ、まあぶいぶい言わせてた頃の話んだけどね、もう何十年前かなあ……それはそれはひどい戦争があったんだ、それはひどかった」

「ぶいぶい？…いくつなんです？」

「女に歳を、と言う歳でもないからね、私はもう70越えてるんじゃないかな」

「はえーすつーい……」

この全身鎧の下にはものすごいおばあさんがいるのだろうか、素顔が気になる。

でもそれにしたって声は若々しい、何か秘訣があったり。

「当時の名残でまだ魔族……が通称かな、彼らはエビリアンとも呼んでいるみたいだが、そんな彼らの首魁が『魔王』だったんだ、当時は平和な時代が続いていたものなんだけどそれまで不干渉を貫いていた亜人や魔族、人類の間に彼らが侵略戦争を仕掛けてね。その魔王が持っていたのが通称『魔王剣』だったんだよ」

「なるほど」

「一度私もあれが振るわれるのを見たことがある。万物を両断するのはあのことを言うんだろう、マナを無尽蔵に吸い込み周囲の命を刈り取り、そして強大な一撃を放つさまは剣というよりもっと、理不尽な存在が近かった。魔王という存在自体後世になってわかったことだが、もともとマナに適正の大きい魔族のなかのいわゆる規格外イレギュラーが擁立される存在だったみたいだね、政治に長けているとかそういうわけじゃなかったらしいんだが……なるほどしかし、個の存在がここまで強大になれるものかと思ったよ」

「亜人に人類に、魔族に、いろいろやつぱりいるんだなあ、でもなるほど、魔王の設定はあんまり変わらないんだな」

プレイヤーが選べるのは三種のみだったがしかし、ヒューマン人類種、ドミニオン魔族、ビースト亜獣人《ミケ》と亜人に連なる存在は確かにいた。自分のこの姿も人類種のアバターであり、なんの変哲もない初期髪である。

ラスボスである魔王も確かに、魔族のイレギュラーであるという設定があり、侵略の末最後にはプレイヤーの手で討たれるシナリオだった。

「ふふつ、設定、だなんて面白い言い方をするね。でも本当にそうだった、物語で設定された存在だったってくらいに理不尽だった……それでもまあ私がここに生きているのは、私達にもそんな「設定された人間」がいたからさ、よく吟遊詩人が歌っている「英雄」達なんていう存在がさ……つと、魔王の話だったね」

「英雄も気になるけどでも、先を頼むよ」

「侵略戦争では魔族が「魔王」を、亜人達が「獣王」を、そして人類もまた「霸王」と呼ばれる英雄達を擁立して戦ったんだ、精神的支柱だったかもしれないけどそれが原因で「王立時代」なんて呼ばれ方をされてね、結局みんな死んで戦争が終わってしまったわけだがまあ……そんなわけで、後の世代の今になって彼らの遺した遺物もあるわけだよ」

「なるほど」

「それが魔王剣」

バックグラウンドはある程度似通っているのが通づる物を感じることが、なるほどこの世界にも魔王剣があるらしい。はてさてスロットはいくつか、売値はどうなるか、パッシブは？ アクティブは？ 付与制限や呪いはあるのだろうか？

そういったものばかり考えてしまうのは悪い癖だろう、このオルカ、付与術師である。

「侵略戦争をしていたあの魔王が使っていた魔王剣のはるか上の魔王剣……というと、これがいかにすばらしい性能をされていて、そしていかに危険かは分かってくれると思う。これには値千金の価値があるがしかし、これが表に流れることにより君や我々に降りかかる危険は計り知れないっていうことを先に言っておくよ。もちろん、私には君

にお願いすることしかできない」

「もちろんよくわかった……けど、ギルド長なんだし命令できるだろう？お願いつていうのは」

「君、私より強いだろうか？」

「えっ」

「こやつ、できる。」

はてさて、アーリン団長のレベルがいくつかは知らないが、自分のレベルはカンストだからそれを強さの指標にすれば確かに上ということになるのだろうか。事実 インテリジェンス INT や パーセプション PER 《パーセプション》は上限突破済みなので誰にも負けないだろう。

されどこのオルカ、ストレングス STR も バイタリティー VIT も 1 である。

おそらくそのニツサとはたき合っても勝てない、情けない男である。

フフ……しかし団長、さすが人を見る目はあるものよ。

「フフ……このオルカ、運だけなら誰より強いものよ……」

「ははっ！本当に君は面白いね。まあそういうことだから、それはしまっておくといい、歴史にはニツサが強いからほかのことも聞きたいならあとで彼女を頼るといいさ、でも部屋に上がりこんじゃだめだよ？」

「このオルカ、タンスを漁る趣味はないので大丈夫」

「それならよかった」

ヘルムの下ですら笑っているのがわかるアーリン団長の顔を想像しつつ、魔王剣をしまいこむ。店主ちゃんとメイリオが、あっ、とちよつと名残惜しそうな顔をしていたのをていねいにスルーしつつニツサのほつとした顔を見て、これが正しかったんだと自分を納得させた。

さてはて、全部出したらやややしそそうなことになってきた。

ここらでこまかしてもうちよつとでとどめておこうか、悩ましい。

## 12話―メイリオの短剣くちゅけけく

「それで残りはこれ、と」

「これとはなんだなんだ、最速ライドにスロ増設確定ドリル、ガチャ券にその他エトセトラだぞ」

「まったくもって意味がわからないんだけど……あなたが一番大事そうに取り扱ってたのは、これかしら。ニッサ、これ何かわかる？」

「<sup>スベクタクル</sup>解析<sup>ス</sup>してみた、けど……『有償がちゃ用』ってしか書いてない、から、わからない……チャーニーはわかる？」

ああつ、やめてください泣いてる自分がいるんですよ。みんなの手をたらい回しにされているガチャチケットをああつやめてとながめつつ、やがてチケットは店主ちゃんの手に移り団長と一緒にまじまじと見られる。

「商業ギルドの連中がたまーに客寄せに使う割引券と似てるけど……書いてある時がわからないネエ……これ自体に値打ちがあるとは思えないけどアーリン、何か知ってる？」

「昔の職場にいた頃、こういつた国外由来らしいものやいわくつきのものを集めていた人間ならいたが、私もこれがどういつたものなのかは知らないね。オルカ、君にとってこれはそんなに大事なもののかな？」

それは当然ですとも！

「これを使うために一ヶ月だ……一ヶ月待ったんだ……前回ガチャをあえて見逃して今回の限定を手に入れるために待ったんだ……待っていたのに使えないんだ今は……ガチャはどこ？……ここ？……ううっ涙が」

「よくわからないけど、そんなに大事なら乱暴には使えないね、ごめんね」

「いいのよ」

そう言いもういいよ、と言う団長。もう荷物をしまってもいい頃なのだろう、まあスロット開拓ドリルや魔法の番傘、ガチャ券なんても

のはぱつとみでやっぱりあの魔王剣を上回ることはできないだろう。要警戒対象が絞られた今、ほかが見逃されたということだろうか。

ああ、今は遠きガチャが恋しい。

今回のピックアップは可愛いパートナーと便利な家具だったのだ。

「んまア、うかつにポンポン出す前に言ってくればいいかな……オ  
ルカがそれだけ守れるなら、持つてることを別にとやかく言うつもり  
はないヨ。あんま魔王剣！みたいなものを突然広場のど真ん中で振  
り回したりしなければまア、まア」

「その節は本当に申し訳なくウフフツ」

「反省してないでシヨ」

ごめんねごめんね常識知らずでごめんね。

「まあいいさ、一朝一夕ですべて教え込めるでも、慣れるわけでもな  
い。少しずつ我々の常識に合わせていけばいいさ。そのためにはで  
きるだけメイリオやチャーニーみたいな先輩の言うことを聞くこと  
を推奨するよ。まあ、今もしていると思うけどね」

「先輩お願いしやす」

「あつ、はい……」

「じゃあ解散だ、片付けて食事にするでしょう。一晩明けたらまた  
やってほしい仕事があるからお願いするよ」

アーリン団長のパンつ、と叩く一拍で皆が動き、机と椅子が片付け  
られていく。

最初のときもそうだったがみんな力あるなあ、すごいなあ、自分S  
TR1だわ。

だからがんばればがんばれって見ていたら、頭をぱしんと店主ちゃん  
にはたかれた。

その夜はむせびないた。



朝というものは非常に心地よいが、血圧があんまり高くないので  
ちよつとだけ起きるのは苦手だ。できることなら朝起きたあと水を

一杯そこから更に二度寝をし、それから満足行くまで寝たあと起き抜けのぼんやりした状態で小一時間ほど外を眺めて外界と思考をリンクさせたのちに世界へと羽ばたいていきたい。

と願う心はどうやら世界に受け入れられないようだ。UIの時計があるからわかる朝の六時という実に出勤登校出撃お散歩、どの時間にも該当しない時間に起こされることとなった。起こしに来たのはメイリオで、鎧を脱いでインナーの防護服だけを身にまとった状態である。

初めて会ってからは軽装鎧姿しか見ていないものの、こうしてみるとやはり女性的というか女性そのものだ、明るい赤めの髪——朱色という表現が近いだろうか？それはロングとセミロングの中間くらいで整えられ、起伏には富まないものなでるラインは女性を描いている。

ふむ。

「あなたは偏屈だから女の子に興味ないって思ったけど、そうでもないのね」

「観察眼には自信がある」

「やっぱり偏屈……見せ物じゃないの、早く着替えたらご飯食べるわよ、そしたら仕事に出なきゃ」

「仕事」

「下で説明するわ」

はてさて、言われるがままにインベントリから装備を装着し、いつもの地味目の最上位装備となつてひらりと扉を出る。寝間着なんていう洒落たおしゃれアバターアイテムは用意していなかったのどこにあったものを使ったのだが妙にぶかぶかだ、ギデオン副長のものではないだろうか、インベントリではなくここに置いていこう。

なお寝間着はスケスケだったりフリフリだったりすると値段が跳ね上がった記憶が新しい。みんな考えることは同じだし、これをガチャに入れてくる運営の気質というものもどこでも同じなのだ。一部ではモーシヨンとあわせて寝る権利など言われているのかなんとか。

座る権利と寝る権利は高いのだ、人権とはかくも厳しい。

木目が古い、なるほどやっぱり古い廃教会の階段をギシギシと降りていくと、皆が一同に会している。なるほど冷蔵庫もないのだ、食事は皆で一同にということだろう、自分のぶんもしつかりギデオ副長が用意しているのを目にし、たんまり食べるんだぞとの激励を受け席についた。

「オルカ君が我らと朝食を摂るのは初めてだからね、少しだけ豪華にしておいたよ」

「腕によりをかけ、そしてちよつとばかりポケットマネーを使わせていただきましたがなハハハ！」

「朝からうるさいよオー……副長オー。んまア、ウチは夜もこれでいいけどネ」

「ほほう、ほほう」

ほほうほうほう、ほうほうあさほー。

食卓に並ぶはあつさりめのスープや柔らかかめのパン、謎肉ベーコン焼きなどを筆頭に朝に食べるならおなかにもやさしいタイプのものが並んでいる。飲み物もホットミルクが用意されているあたりなんというか、フアンタジー世界の突撃朝ごはんといった趣が感じられる組み合わせであった。

謎肉、ここでも出てきたか。

「メイリオ、気になっていただけこの肉はいったいなんの肉なんだろう」

「チュケケパブラよ、よく見るでしょ？」

「チュケケ……フードちゃん」

「た、たまに飛んできます……」

「チュケケ……」

チュケケ。

そうして食事が始まってからしばらく、皆が食事を続けているのにおそろおそろ手を出せないでいると、横から店主ちゃんがフォークでかつさらっていった。いや別に苦手ってわけじゃないというかそも食べたことないんだが、まあ確かに手をこまねいていたところを見た



ら気を遣われても仕方ない。

謎肉はまた今度にしておこう。

このオルカ、それよりもテーブルマナーを覚えるのに必死である。「さて、じゃあ今日の割り振りだがリリアナは薬剤の作成、私とギデオンは街役場へ、店主ちゃんは事務待機でニツサは非番、それからケイとメイリオはオルカの戦闘技能に関して測ってやってくれ」

「ウチはどーせ箱入りですヨオー」

「君がいないとここが回らないんだ、昨日の私の書類見たらどう？」

「修正箇所のない書類を見つけるのが大変だったヨ」

「ごめんね」

言いつつ頭を下げるアーリン団長に、じとじととした目を向ける店主ちゃん。

歳でいうとアーリン団長のが遥かに上そうだが、この二人には奇妙な力関係があるのだろうか。

「どうかアーリン団長、案外ぽんこつ属性持ちでは？」

そうしているとケイがいつのまにやら背後に回っていることに気付く。

「ふふっ、メイリオは別に休んでてえ、私とオルカ君の、マンツーマンでもいいのよお？」

「オルカです」

「ケイはいつでもそれなんだから……オルカも男だってわかったからやめてあげて」

「男です」

「いけずう」

ケイが自分の腕を抱きながら寄るものだが、その薄着で寄るのはいかななものか。

なおこのオルカ、不能ではないが属性でもない。

このオルカ、好みはちよつと小さめのナースさん属性である。

「ほんとにいけずう」

本当に申し訳ない。

「しかしアーリン団長、自分は付与術師、技能職で戦闘のいろはは必要

ないように見えるが訓練しなければならぬだろう。無論戦闘経験がないわけじゃないしなんならEXP24倍課金ポーションがぶのみイベント8時間耐久狩りやエンシエントダンジョン虹箱出るまで帰れませんか耐久レースもしたことはあるがいかんせん、いまとなつては後方支援の城下町警備員が仕事だ」

「ごめん頭に何も入ってこない」

「修羅場はそれなりにくぐっているものの、ここで装備を作るのが自分の仕事ではないだろうか、ということですよ団長、なによりなんというか訓練つてすごい怖い、字面が怖いしなんかすごいなんかこわいなきそう」

「ああそういう……」

ポン、と手をたたき、納得したように言うアーリン団長。

だって怖いもの、訓練ですよ訓練。朝5時にラッパで起きて整列させられて10kmマラソンとかさっそくさせられるんだ、いや今6時だけ。

「君の戦闘技能に関しては預かり知らないが、確実になんらかの技能で私を上回っているという感覚を私は感じているんだ。それは付与技能とは違う——『強者だけが持つ何か』であることを私は知っている。こう見えて結構、前線には長くいた人間だからね、それを知りたいからじゃあダメかな、それを知っておけば君に役割を持たせるときに幅が広がる」

「レベルでは？」

「<sup>段階</sup>レベル？まあ、確かにその分野においては君は何段も上なんだろう」「アーリンがそう言うなんて、よっぽどね……でも本当にそうなの？あたしから見たら、付与は一流だけどひよろ長いようにしか見えないけれど……あ、ごめん、悪く言うつもりは……悪くなっちゃうわよね」

「いいんだ」

アバターがひよろ長いというかJRPGの脇役っぽいとはよく言われてたし。

しかしなんだろう、こうも褒められるとみんなの目もだいぶ神妙さ

を帯びてきてなんともこわい、なきそう状態になる。なおこのなきそう状態というのは当のネットゲーム本スレにおける用語だ、あそこにいた彼らはかわいく着飾ったアバターを娘と呼び可愛らしく振る舞ってくれるパートナーをペロペロするのが日課だったが、アツプデート等における情報交換が活発だったので情報は最速だった。

その姿たるや、日頃公園でじやれているご老人達が街の危機にはヒーローになるかのようで……。

「わかった、でもやさしくしてね」

「初夜のオンナノコみたいなこというなヨ」

「未経験なので」

「あつ、そっか……」

おつとこれはセクハラポイントプラスですねデユフフ。

と、こじやれた考えをしているときにふと思う。

分野のレベルとアーリン団長は言っていたが、そういえば団長は何に特化しているのだろうか。あのネットゲームと非常に似通った世界だし、クラスレベルというものは誰しもあるだろう。それが団長ほどの方に無いと思えないのだが。

「そういうえば団長の得意分野とは？」

「私かい？」

「はい」

「うーん……昔は剣が純粹に得意だったんだが、だいぶランクがあるからなあ……」

兜の顎をガシヤツ、と持ち、少しばかり考える仕草をする。

外見からはパワフルで筋肉質な男か百歩譲ってアマゾネスが入っているように見える鎧だが、はてまあ仕草をみてみると結構女性らしさはある。お歳がいくつかは考えなければかなり、それっぽいというものだろう。

「今となつては、皆の指揮が得意じゃあダメかな」

「なるほど」

となるとコマンダーあたりのクラスだろうか。ほぼほぼPT限定で効果を発揮するのでソロで取ると地獄を見たのが以前だったが、召

喚系サブクラスとあわせると真価を発揮するということで育成が長き道のりであったな。

こちらでも召喚術、あるのだろうか。

「どちらにしろ私はもう最前線からは取り残された人間さ、いつ寝首をかかれるか！」

「団長殿は冗談がうまいでありますなあ!!」

「縁起でもないこと言わないでよアーリン、誰か一人欠けても回らないんだから」

メイリオが諫めるのを聞いて、アーリン団長とギデオ副長がこれは失礼と頭を下げる。

……この力関係、なかなかわからない。

「フフ……この自分がいなくなっても回ら」

「それはこれからね」

「なきそう」

正論だが即答はなきそう。

そうしているといつのまにやら、アーリン団長が食事を終えたようだった。

……兜つきでどこから食べたのだろうか。

「とにかくオルカ君達は今日は裏の庭を使ってくれ、普段からそこが練習場になってる。それが終わったら今日は非番にして構わないからさ」

「あら、一日寝ててもいいのかヨ？」

「君は言わなくても居眠りしてるだろ」

ぐぬぬ、と言い返せなくなる店主ちゃんをよそに、自分も食事を終える。

思い返せばとても短い時間だったがしかし、食事は至福であった。向こうにおける味の濃さには及ばないがまあ、こういうのもこれはこれで。

「じゃあオルカ君、メイリオ、ケイ、今日はよろしくね。みんなも頼んだ」

了解です団長、アイサー。

なるほど確かに自分の力量を測るのも大事だろう、ここにきてから自分の非力さはどう思い知っているが、それにしたって把握ができていない。……さてやろう、それから食事を終えてやることもない、スマートフォンもいじれないのでしばらくメイリオを見ていたら目をひたすらそらされた、なきそう。

### 13話―メイリオの短剣くマジカルミラクルく

この廃教会の裏手にはたしかつては自家栽培の畑でもあったのか、隅にある物置から農具がちらつと見えるちよつと広めの井戸付き広場が用意されており、そこにカカシや木偶が立てられていた。

一見にして練習場だとか、的当て場だとかがわかる場所だろう。自分には言われるがまま、先に行くメイリオと横に並ぶケイについていきそこへと降り立つ、なるほどここから自分の最強伝説が始まるというわけだな、すいません嘘つきましたSTR1です、装備補正入れても4です。

「自分には学歴と腕つぶしで赤ちゃんにマウントをとるしかできない……」

「だいじょうぶう？赤ちゃん？あら、お盛んね……」

「いちやついてないでこつちこつち！」

急な落胆をケイに慰められているとまたふと、メイリオが呼ぶではないか。

はてさて彼女が示した場所を見ればそこは武器置き場、といつても刃を潰した剣や先の丸い矢などばかりでなるほど練習用、とぱつと素人目にもわかるものばかりだ、ただ刃を潰してもメイスと斧は痛いと思う。

彼女は相手をするからどれでも好きな武器を使つていいよと言うものだがうむ、武器と言われても自分は生産職、何を手にとつたらいいか。というよりはまず、ひとつ見ておかねばならないものがあった。

「この中に自分を『喚ぶ』武器はないようだな……」

「？」

「自前で用意するんだけどそのまえに、ひとついいだろうかメイリオ」  
「どうしたの改まって？怖気づいた？」

はい、こわいなきそう。

それはおいといて。

「自分はスキル戦闘のクリックゲーしたことないからこう、実際の対人戦を見てみたい」

「クリ……………何？」

「単純作業しかしたことがないから、よければ二人の練習風景を見てみたいかなと」

「あー」

気のない返事をして、メイリオが応える。視線のちらつと向かう先はケイでそして、アイコンタクトを受け取ったケイがばちこんこん、とウインクで答えながら刃の潰れた短剣を手にとったことでメイリオも仕方ないなど、同様の短剣を手にとったことで了承となった。

「あたしが働きにきたんじゃないんだけど、そういうことなら仕方ないかあ」

「露骨うーに避けられると、私もちよつと泣いちやうわよ？」

「だってケイとやりあっても、ねえ？」

「ふふっ」

ケイは笑って余裕を見せているがしかし、一方短剣をくるくる回しているメイリオはあまりやる気に満ちてはいない。むしろ敬遠気味といった感じでなんともといった様子であり、はてさてどうなるのか、これはこの世界の戦闘を見る上で参考になるのかという一抹のなんたらがよぎる。

そういえば鑑賞するならポップコーンでも用意すべきだろうか、バターアイテムに手持ちポップコーンなんてものがあつたが、モーションの都合食べても食べても無くならなかつたのでこちらにおいては無限ポップコーンになったのだろうか、はてさてああいったものを持ち歩かず、倉庫に置きっぱなしにしたことは実につらい、つらたんだである。

「よそ見してたらなんかトンでくるわよ！始めるから見てなさい！」

「お姉さんをおーえん、しててねオルカ君」

「音頭はとろう」

「では——」

こう、闘いの始まる瞬間というものはなぜ音が止んだような気になるのだろうか。

個人的な解釈では気を張って集中するから他の音が聞き取りづらくなるからだと思うのだが、演出として音が止むところを考えた人は素晴らしいと思う。今から何かが始まるのだという空気を音を消すことで表現しているのだ。

一瞬の視線の交錯は戦闘開始の合図、それは自然界では当然の摂理。

ふたりの視線が交わって一瞬目が鋭くなったのを、このオルカは見逃さない。

では、はじめ。

「やつー！」

「あら、早いよね」

メイリオの急速接近からの刺突、それを難なくケイが刃の先をそらしていなす。

メイリオが急襲に出てケイが受け身の姿勢をとったのもなるほど、二人のクラス差にあるだろう。互いに双剣、互いに同じ軽装備、そうなるに残るはレベル差やクラス差に出てくるのだ、メイリオはローグでケイはイレイザーで簡単に言うとは一次職と二次職の差となる。

この世界の人人々にレベルによる転職が機能するかはわからないが、ローグは軽装備近接系の一次職に相当しいわゆる“初心者”がなるものに相当する。対しいレイザーはLvを50まで上げて転職を行った場合に分岐するローグ系列の職のひとつ、いわゆる上位職なのだ。

単純に見るなら、相応にレベル差があるんだろう。

「このっ！逃げ回って！」

「可愛いんだから、もうちょつと優雅に戦いなさいな」

メイリオはその点を理解しているのだろう、守ったら負ける、攻めるとばかりにひたすらに前のめりに自らの“強み”を押し付けているのに対し、イレイザーであるケイは本来弱みである防御を重点的に行っている。それはすなわち弱い点ですら対等以上に戦えるという



ことであり、ここに明確な職差があった。

そうして埒があかないのが見えてくると、メイリオが片方の短剣を逆手に持ち帰る。

おおっ、あれは。

「！」

一瞬にして背後に回ったメイリオの姿を追えたのは、傍にいた自分のほうだったろうか、いや、ケイも目で追っていた。

メイリオが逆手の短剣を背中に突き立てようとする——いわゆるスキルのひとつ“バックスタブ”である。防御力を無視した一撃を叩き込むローグ系列の強力な技で、終盤まで使っていける、とりわけ対ボスやユニークで大きく役立つものだ。

これを受ければ模造剣と言えども無事では済まないだろう。だが。

「間合いがすこし遠くてよ」

「ああつ、もう、ツ！だから——」

おおっ。

今のケイはメイリオと違い自分はもはや追いきれなかった。尋常でない素早さの身体運びをもって、どうやったのかすら理解がおぼつかない速度でメイリオの背後に回ったケイが同様、メイリオにバックスタブを仕掛ける。速度それはすなわちパワーとなるとは言ったものの、絶妙な手加減具合も彼女が一枚上手なことを物語るように、ペこ、とメイリオの華奢じみた腰元に刃の先を当てるのだ。

この滑らかなカウンターに敗北を悟ったのだろう、メイリオは身体を止め、そしてため息を深くつきながら一言、残した。

「——何度やっても勝てないのよ……」

「でもやってくれるんだもの、いい子っ」

えらいえらい、とばかりに背中からメイリオを抱き、そつと頬を添えるケイ。

傍から見ると軽装備の乙女ふたりが寄り添い合ってる絵面で非常に危うい、ああ〜つと声が出てしまいかねないものであるがメイリオは正常、ノーマルなのだろう、ケイからやんわりと離れると少しばか

り気恥ずかしそうに待てのジエスチャーをケイに取った。

「あら、いけず？」

「ケイ、あなただと本気が区別つかないから……」

「そお？あなたがいいなら私はいいのよ？」

「また言う……」

百合の園はここにあつたのだろうか、趣味ではないが微笑ましい。そうしているとメイリオが逃げるようにこちらに駆けてくる。実際逃げているのだろう、不満げなケイをよそに短剣を手渡してきて、次はあなたの番、と言うのだ。ああそういえば、本来は自分の戦闘訓練、技能把握が目的であつたなとふと思ひ出した。

「次はあなたの番よオルカ、好きな武器を取りなさい？」

「短剣は付与スキル上げにはちょうどいいんだが、使つたことがない」「そこに並んでるものになれば、あたし達で用意できるものってないけど」

「ふむむ……」

言われてはてさて、頭を悩ませる。

天幕の下に並べられていたのはすべて訓練用の、刃の潰れた剣、弓、槍、斧、杖、あらゆるものだ、だがはてさて付与術師を開幕から目指していった自分はウィザード系列であるからして杖適正は若干あるもののスキルを上げていないのでLv1、ちいさなファイアボールならなんとか使えるレベル程度だ。

たいまつを振り回したほうがマシかもしれない、いや実際マシだろう。たいまつは殴打武器ながら炎属性がついており、対アンデッドにおいては最終手段になりうる。ちなみにアバターアイテムにいかにもな聖なるたいまつがあつたがあれは飾りだった、たいまつに聖なるたいまつを見た目合成する強者もいた記憶がある。

「あなたって付与術師よね？魔法は使えないの？」

「小さなファイアボールなら使えるが実戦レベルじゃなくなつてなあ……スクロール召喚からエンチャぶっかけて無双してもらつて自分はひたすら逃げ回るのがメインの戦術だし、よっぽど貴重な素材がな

いと取りに行かなかつたし、そもそもお庭で生産勢だったからたいていは知り合いになんとかしてもらっていたからな……」

「ごめんよくわからない」

「戦えなくもないが、期待するほどじゃあないっていうことかな」

どつとはらい。

戦えなくもないのだ、付与術師に限らず生産系職業にも適正装備がかばんというものがあるが、いかんせん戦闘系ジョブには劣る。この訓練では自分の戦闘技能を見たいということだから手を抜くのは無理だろう、できる限りのさいつよ装備をしていかねばならない――

が、戦闘用はホコリをかぶって倉庫にしまつてあるのが悔しい。

となると今の手持ちで使えるものは何だろうか？ ……そこでふと思つた、この世界は現実だ、ならば本来は装備不能アイテムだったものが装備できるのではないか？ わたしはいぶかしんだ。

「よし決めた、これならなんとなく戦える気がする」

「ふふつ、オルカ君の戦い方、楽しみだわ……なんせあのアーリンが言うほどだもの」

「善処するけど、本当に戦闘は得意じゃないんだ」

このオルカ、生産職である。

だがゆえに、いまできる全力を尽くさせてもらおう！

自分の準備ができたんだろうと察したメイリオが、ケイと手をタッチして入れ替わる。このちいさな修練場に吹く空気が白熱するのだ、このオルカの進む道を祝福しているかのように、この自分の覇道が今開くぞというように後押しするのである。

「それで？オルカはなんの武器を使うの？」

「フフ……理解したんだ、最強の武器には最強の理由があると」

「魔王剣はなしね」

あれはもちろん、そも適正Lvがあつてもスキル適正がないのでまともに使えない。

そのうえで自分に適性のあるものといつたら――あれしかあるまい、最も使い慣れ、最も価値が高く、最も寝食を共にし最も壊れな

い……そんなものだ、自らの血汗が最も染み付きなにより // 壊れない  
“ここに最強の理由だろう。”

さあ、出てこいこの自分の――

「――――すり鉢」

「えっ」

「すり鉢だ、こっちはマジカルステッキ」

「えっ」

驚くのも無理はない、このすり鉢、とある天下人が代々餅をこね続けたという逸話に従って『天下の流れ人』という名前だがなにより、最上級の付与用装備なのである――これを装備するだけでなんと付与可能スロット数がふたつが上昇し、成功率は三割増し、付与速度も急速に増加しなにより壊れない。彼女もできて就職も決まり大金持ちになりました、ありがとう天下の流れ人。

事実作業速度的にひたすら付与品を作ってマーケットに流せば大金持ちにはなれるが、あれは心が壊れるのでやめたほうがいい。

もう一点のマジカルステッキはイベント品だ、もともと武器に関しては生産職の都合<sup>知カ</sup>INTが上昇する以外のメリットが薄いためあまり収集していなかった自分にとっては、これがベストアンサーとなる。イベント品なので救済措置で「不壊の」がデフォルトでついているのが儲けものだ。

その気になれば自分でつけられるのだがはじめからついているに越したことはなく、かつ基礎ステータスも非常に優秀なのでそこその強化だけして使っていたものだ、なお // 魔法序章マジカルひとは“とかいう作品とのコラボ品だそうで全体的にフリルフリフリである、作画やモデリングのコストはさぞ恐ろしかろう。

「……一応聞くけど、諦めてるわけじゃないわよね？そんな痛くはないけど」

「無論問題ない、このオルカのさいつよ装備……はちよつと手元にないが、現時点での最適解がこれなんだ。なんならこれを壊せたらメイリオにさいつよ装備作ってあげちゃう、8つくらい付与ついたらや

っ

「それは素敵ね……できればだけれど！じゃあオルカ、なんでもいから攻撃してちょうだい！受けるだけ受けてみるから」

「御意」

フフ……いいのか？この自分に先手を譲って……泣きを見るのはそっちだぜお嬢ちゃん。

ケイ嬢がくすくす笑っているのをよそに自分は構えを取ると、攻撃行動に移るのだ。

はて、しかし攻撃スキルはどうやったたら発動するのだろうか？唱える？クリックゲーに依存していた自分ではちよつとこころもとない——ならばそうか、この現実に関自分を重ねることが最適解なのだろう、つまりモーシオンだ、当時のスキルと同じモーシオンを取ればいいのだ。

頼むぜマジカルステッキ！くるつと回って腰に手を当てムーンプリズム爆破！

メイリオ今笑ったな、超笑ったよな。

「ご、めんつ、ふふっ」

「余興だから気にしないでくれ……おや」

マジカルステッキの先端が光り、ハートがふよふよとメイリオへと向かっていく。

あらかわいい、というメイリオはそれがあまりにも遅く向かっていくためにはてさてどうしたものかという対応で、やがてそれをとりあえずは弾いてみようという結論に至ったようだ。短剣を滑らせるように飛んでいくピンクのハートにぶつけ、あ、待って確かそれって。記憶がいまになってわらわらと蘇ってくる。

あつ。

「メイリオ!？」

「やべ」

ムーンプリズム大爆発だ!!

メイリオが刃を入れた場所から突如轟音とともにピンク色の――

——いくなれば特撮ヒーローの背中を起こっているようなタイプの爆発が起こり、一瞬にしてメイリオが爆炎に包まれる。これはやってしまったらどうか、さらばメイリオグッバイ、メイリオ。

そんな不謹慎を頭に滑らせてなんとか冷静を保っているがこれはまずいのではないだろうか、ネットゲームなら戦闘不能になって街のどっかの復活の騎士さんのところでリスポンするだけだが、この現実で爆散したらどうなるのだろうか。

やがて爆炎が晴れ——やっぱ晴れないで、自分スプラッタはそんな得意じゃないんです。

だがはてさて、黒煙のなかに咳き込む声と人影が見えないか？目を凝らしてもはてさて？

——あつ。

「げほっ、ごっほ、ごっほっ！」

「メ、メイリオ!?無事なの!？」

「ヒエーツ……」

生きてた、メイリオが生きていた。

死地からの生還だ、無事だったことに安堵しつつしかして、彼女は無傷ではないか。

そんな疑問を浮かべた矢先メイリオと目が合い、あつ、これはやばい、やらかしてしまったことにちよつとだけお怒りのご様子なのだろう、つかつかと歩み寄ってくるではないか。手にはハートを切った短剣を手に自分のハートを叩き斬るのだろうか、やあお嬢さん。

「ハアイ、メイリオ」

「はあい、オルカ。なんでもって言ったのは悪かったと思うけどただ、あのね」

つかつかと歩み寄ってくるメイリオ、歩みを止めることはない。

やめてくれ、きょうび暴力はよくない。

「もしあなるってわかってたなら言ってほしかったというか、ちよつとびっくりしちやって今すっごい頭ガンガンになってるっていうか、ほんと……死ぬかと思ったっていうか……ごめん、次あたし

の番だよね」

「メイリオ嬢、冷静さとは程遠いところにいるご様子であります、ラマーズ法というものがありませんで」

「オルカ、ケガしたくなかったら受けなさい！」

「はひい！」

すり鉢ガードだ！天下を流れ続けたこの逸品による防御力はすべてを超越し、いかなる攻撃でもここに染み込んだ人々の想いを消せやしないのだ。

わかりやすいくらいに最上段でふりかぶるメイリオの攻撃をすり鉢は受ける、やはり傷一つついていないだろうその防御力は万全、この世界において壊れないオブジェクトというものはそれだけで驚異的な能力を獲得できると証明された瞬間なのだ、なのだ、なのだ――。

「ぶべら」

「あつ」

――それを受けるのに、自分の膂力が加味されなければ。

受けたすり鉢がまんま押し出されて自分の頭を打ち据えるとは思うまい、事実メイリオもそこまで自分が貧弱であるとは思っていない。かかったように申し訳無きそんな顔をしつつ、視界がぐわんぐわんするのを凄まじいこの痛みとともに耐える自分を見下ろしている。

このオルカ、STRIDERである。

……はて、メイリオはなぜダメージを……ああ。

「ごめん大丈夫？そこまで貧弱だと思わなくて……あつ、ごめん、腕つぶし……えーっと」

「大丈夫傷ついてない……」

――あれ、物理属性だわ。

## 14話―メイリオの短剣く夕暮れの写真は苦いく

たんこぶを作ったのは多分高校生とか、それくらい以来だろう。あのときはもうちよつと人生が輝いていたかもしれないし、なんとなく平凡だったかもしれない。とりあえず言えるのは頭にときたまたんこぶを作るくらいには動的な人間だったということだ。

写真部だった。

「ごめん、ごめんなさいね？ ついその……ちよつと、ああいう大きな音にはトラウマがあつて、ね？」

「大丈夫だとも、誰しもトラウマはある……このオルカも小学校の音楽の発表会で笑われたのがトラウマになつて……」

「はいはい、異常はなーし。大げさに連れてきたけどなんてことないわー……んじゃ、私戻るから」

「ありがとりリアナ、あとで飲み物買いに行く時なにかいる？」

「チュケケパブラのエール漬けひとつ」

「チュケケ……」

メイリオに頭のコぶを冷やさながら、リリアナが言ったチュケケ……に關してまた興味を惹かれる。一体なんなのだチュケケ……チュケケ。

「よし、腫れは引いたかしら。……ほんとにごめんなさいね？ オルカ」  
「気にしなくていい、こちらも派手にやりすぎた」

「あれはまあ……先に言ってくれたら良かったかな……」

攻撃のテストとはいえどんなものかは言っておけばよかった、確かにそうだ。このたんこぶはその罰として受け取っておこう……しかしながら、あのド派手な攻撃はまあ、二度はやるまい、やるまい。

メイリオにもう大丈夫だと言ひ、部屋に戻ろうとする。

まだ少し引きずっているようだが本当に大丈夫だと言うと、安心したようだ。

このオルカ、人を落ち着かせるのはそれほど得意ではない。

「もう少し器用に喋ればいいのだが……」



「オルカは不器用だからネ、わかるヨー」

「ウギーッ」

単刀直入に言われるとダイレクトヒットが当たるといふもの、事実結構苦勞してきたし、人と話をするのは苦手なほうだ。テキストチャットなら素晴らしい弁舌を持つのだが実際の対話となるとどうもいかないらしい。

どもるってわけではないが、言葉がうまく出てこない。

口数が少ないというか不器用というか、まあそのとおりだ。うぎー。

夕暮れ時ということで太陽は沈みかけており、そのころには皆も仕事を終え暇になるとともに、夕食の準備でこのギルドからも二人ほどいなくなる。いつものギデオ副長と今日はリリアナが補助を担当しているらしい、調理室で煙草吸ってないだろうか。

そうなると思えばし暇ということまで廃教会内をうろうろとしていたのだがはて、ところどころ掃除の行き届いているはずの廃教会内にひとつ、ちよつと汚れた感じの階段があるではないか。はてさてこちらはどこにつながっているのだろうか。

好奇心は猫をも殺すが殺され覚悟なしには歩けまい、つかつかと階段を上がるのだ。

階段は螺旋状になっているようで、しかしそれほど高さのないようですぐに自分を上の階層へと導いてくれる。しかしああ、なるほどこれは階層というほどではない、途中にある扉のひとつが屋根裏部屋へ通じてることから察したがどうやら教会の展望台へ通じる階段だったらしい。

夕暮れが迫っているからもうそれほど遠くまでは見えないがしかし、この街の全貌を見るには十分なほどの景色が一望できるものであった。

あたっ。

「……勝手に入るワルイコはおしおしだヨー」

「ヒエーツ！悪気はないんだつい足が」

「悪気のある脚はこうしてやるか……」

「ヒエーツ！……店主ちゃんちゃんか」

「ちゃんちゃんは余計だよ、まあ別に登っても悪くないけどサ」

展望台へ上り景色に感情を撫でられているとうしろからかけられた生意気声に驚きつつ、ああよかった店主ちゃんだあーよかった、とホウキで脚をぺしっと軽く叩かれる。

いつもの赤紫のベレー帽じゃなく白い頭巾をかぶっているからお掃除ついだったのだろうと思いつつ、しかしそうだ、せっかくいるなら聞いてみようとその場所のことを彼女に聞いてみることにした。「んまア灯りつけたりもしてたんだケド、登ってく姿が見えたからサ。おどかしてごめんネー、つてわけでようこそ展望台へ、この場所唯一の自慢で心霊スポットだよ。……大丈夫なん？オルカ付与術師みたいだケドなんもないノ？」

「今異常にかかった、ここを見てくれ鳥肌が……」

「怖がりなだけじゃないのヨ……いやまアね」

店主ちゃんがあちらこちら、自分を見てくる。

フフツ、そんなに魅力的だろうか。

「なーんか魔法使えるのがここ登ると酔うらしいのよネ。オルカは付与術師のはずだケド」

「レベルカンストだから低レベルな呪いの影響は受けないぞ」

「言うウ〜」

こいつめー、と腰を小突かれ、そのまま店主ちゃんは沈みかけの夕日がよく見える欄干へと移動するのだ。この世には組み合わせると美しいものがある、美女と太陽だ。あいにくと自分に美女の選別はちよつと慣れていないのでわからないが、夕日に店主ちゃんの赤い髪が照らされているのはなかなか映える。

だからはてさて、こういうときは何を言うべきかと思案していると、先に口を開いたのは店主ちゃんだった。

「それでー、慣れた？」

「ここでの生活なら、まだ」

「だよねエ、オルカのいた場所がどんなだったかは知らないケド、ウチらのトコとはだーいぶ違うんだろなーってのだけわかるもん」

そうじゃなきゃこんな何も知らないのはないよね、と。

「どこからどうとか、ここにいる連中もそうだから詮索しないけどサ」  
「……ここに居るのは、個性が強いのみばかりに見える」

「控えめな表現にかけては詩人だネ」

「ありがとう」

「どうしましたましテ。まアそのへんは信頼勝ち取って聞いてみるといいヨ……なんならウチのことなら話してもいいケド」  
「ほう」

このオルカ、アーカイブ記録に関しては大好きである。

ゲームにおけるストーリー、裏設定、NPCのエピソードについても結構な量を読み漁ったものだ——とはいつてもこの店主ちゃんが見た存在であることは疑いようもないが、それでも人の秘密やエピソードを聞いてみたくなるのが人間の性である。

自分に関しては……ややつまらないエピソードしかないが。

「お願いするよ、こう……親睦のために」

「手付きがいやらしい」

「ウギ……」

仕方ないじゃないやい。

「んまア、ウチの家はいわゆる貧民街、この区域でやってたちよつとした商店だったんだケドね」

「なるほど……じゃあ天職だったわけだ、ここは」

「ここに落ち着いたのは天職だったかもだケド、それまでがネ」

「？」

白頭巾が夕日を振り返し、ちよつとだけ目がくらむ。

それを察したのか頭巾を外していつもの姿を晒すと話を続けた。

少し重そうで、少し吹っ切れたといったよう。

そんななにげなさとは少し離れた話し方で。

「家を出て商業ギルドに入ったのヨ、この組合は大きいからいい修行になるとか、ここでその……現金だけドコネを作って親を楽させ

よーってサ。でも現実には違ったのヨ、商業ギルドっていうかさあ……金が好きな連中が集まるとロクなことないんだなって」

「ふむ」

「結局は利己主義資本家が作り上げた産業構造のひとつでしかなくって、でっかい権限で商業流通を派手に取り仕切ることで下を絞って上を太らす、そんなもんで……まアそれだけなら良かったんだけどネ」

「どこも資本家は一緒か、でもそれよりひどそうだ」

「まあネ」

資本主義に共産主義に、社会主義とこちらの世界にも色々出てきたけど。

やっぱり最適解ってないのかもしれない。どこでも貧富はあるのだろうと、この街を最初に見て思ったことだ。

でもきつと店主ちゃんもつとこの世界のその側面を見ていたんだろうと、だから聞いてみたいと思ひ話を聞き続ける。

「自分と同期で二人いたんだけどサ……商業ギルドっていろいろ新しく入ってきた人間に〃コース〃を用意してるんだよネ。どういった道を進むとかサ、んで自分は先輩に弟子入りしてシゴかれるほうにしたんだけどサ、友達は『店舗出店のオーナー』って道を選ばされてサ」

「ああ……」

「よくやるもんだヨ、だまくらかして契約書書かせてオーナーなんて甘い蜜で誘っていったと思つたら実際は計画的にノルマを未達成させて契約違反させるって奴。そしたら契約上の罰金とか、上納金とか、いろいろ重なるわけで……使い潰して借金背負わせて、そしたら奴隷落ち、ハイってサ」

「……まるで中世時代だ、こちらにも奴隷が？」

「〃奴隷スレイブ〃として魔物を扱ってるトコもあるけど、人間だって奴隷に落ちるのサ。そりゃ人を攫ってくなんてのはもちろん違法だよ？でも魔法なんて便利なものがあるからサ、犯罪者や借金者、捕虜なんかは隷属できるわけで……人権をいくらか剥奪して、借金を返すまでとか刑期を終えるまでとかそういうのでサ」

「よくないな」

「商業ギルドの欲しがる物ってなんだと思う?」

「給料のいらぬ従業員」

「大当たり」

すべての資本家の夢、とどこかで聞いたことがある。

受け売りだが効果的だ、誰だつて欲しい。

「いまじやナリを潜めたとか聞いたけど、三年でどこまで変わったもんだか……」

「三年、という店主ちゃんが本格的にここで働いてもうつてことかな」

「ギルドがまだ始まってそれほどでもないころだったかな、んなのばっかだったから商業ギルドを飛び出してぶらぶらして、あー家にも帰ろつかな……つて思つてたところにアーリンに拾われたつてことだねエ。まあ親父の昔なじみだったこともあつたからサ……んまア、苦い思い出ばかりだったけど、ここに来てからは結構いいなつて」

「うむ」

「だから気に入つてくれるといいヨ、ここはいいトコ長くないなーつてサ」

「……ありがとう、でもそこまで包み隠さず言つても、良かったのかな。自分のことでも話す?」

話せるほどの話題があつたかはともかくとして。

「そりや大歓迎だけど、ウチの話をしたのはあれサ、ただ商業ギルドをイヤゝつて取引禁止してても納得いかないでシヨ?なんてつたつてなんだかんだ彼らここらじや最大級なんだしサ。もつたいぶつて話さないよりも話して納得してもらつたほうがいいかなツテ。なまじ自分の大嫌いなモノだつたらなのおさらさ」

「なるほど、つまり商業ギルドには」

「いつきいがつきい関わらない方がいいのは推奨しとくヨつと、関わつたらウチの機嫌がちよつと悪くなるカモ」

「ヒエーッ……」

とはいえ、自分から積極的に悪いものに関わりに行く理由もないだ

ろう。

店主ちゃんの話はためになるなあ、とともに、そういった悪意にも、やがて慣れていかねばならないのだとほんのりと、心で思う。どこにいたってやつかみから逃れることはできまい、だいたい最初にここで出会った人間ですらあれで——　　　　　そういえば彼ら、あれから大丈夫だろうか？そのうち見に行こう。

「んじや、ウチのことは話したしオルカのことでも話してもらおうかな」

「面白い話ができないことを最初に宣言しておきます」

「つまらない話だったらウチが面白くしてみんなに伝えといてあげル」

「ヒエーッ……」

あうん、下手な話はできないなこれは。

といつつ、はてさて自分が何か話ができるといつたら何があるだろうか。

現実における話に関してはううむ、どうやって伝えればいいのか。故郷の話？実は伝説の場所から来た？遠いところから？ううむ、どれもどうやって来たとかいろいろと矛盾が発生する……このオルカ、話下手である。

そうなるとネトゲだろうか、そういえば今までもネトゲ関係は問題なく話していたなと思いつつ、さてはてではここからどういう話を振るかといった話を考える。そういえばこのあたりの地理どころか、ここがどんな国家かすらまとも知っていなかった、その話をついでに振るのもいいだろう。

「じゃあ——」

自分の話をしよう。

そう言いかけた言葉だった、それが何か大きな、つんぎくような鐘の音に潰された。

カンカンカンカんと、街の外壁上の物見櫓が音の発信源だった。

「……？」

「あつちやア〜……」

「大丈夫だ、当ててみよう、あれは——」

「緊急警報！……あー、あー……！」

店主ちゃんがとたんに焦りだし、ホウキをそのへんにほっぽりだすと展望台から身を乗り出して外を見る。外というのも外壁の外で、街の端にあるこの廃教会は街の衛兵が用意してる物見櫓かそれ以上には背が高いので外が簡単に見えるのだ。

はて、肉眼では遠いな、それにもう日が暮れる……ここはふむむ。

インベントリから出すはなんてことないアイテム、双眼鏡である。

「店主ちゃん使う？」

「ありがと！……えーっと」

「こう、こんな感じ」

望遠鏡しかない世界なのだろうか、ぱっとみ使いみちに戸惑ったのだろう、でもジェスチャーで使い方を投げかけるとすぐに使いこなし、遠方を見る—— ああ、見えてきた。肉眼の自分にすら見えてきたものがあつた。

群れだ。

「——トロール」

「自分にも見える、あれは10や20じゃない」

「街にこんな数が……ッ」

「うむむ……」

はてさて、どうしてこのタイミングでこうも間の悪い来客が山程来るのだろうか。

いかんせんうぎぎとなりつつも、この自分が戦闘には不向きというのは心に刻んでいる。

フードちゃんには特効のある装備を渡してあるが、とてもじゃないが足りないだろう。

戦いは数とはよく言ったもので、それがリジエネ持ちとなると厄介以外のものではないのである。

そうしているとタタタツ、と駆けてくる音が聞こえた。

「チャーニー！オルカ！」

「メイリオか」

「二人は避難の準備して！あんなのこの街じゃ防ぎきれない！」

メイリオが切羽詰まった声で叫び、頼むわね、とだけ最後に残し階段を下っていく。

見れば街のほうも慌ただしくなっているようで、避難をするのだろう、家財道具や風呂敷包みを持った人々が次から次へと夕暮れ時の家からひっきりなしに飛び出していた。

「…………この街の兵力じゃ止められないのか？」

「トロールは金等級の冒険者や狩人が仕留める生き物だよ、この街には…………えーつと確か6人しかいなかったハズ…………とてもじゃないけどあの数は」

「そうか…………うむむ」

戦闘職でない自分にはトロールのまとめ狩りは正直なところ無理だ。

自分にできるのは“誰かの背中を押す”、それだけ。

付与術師はいつだって、誰かが戦ってくれるからこそ成り立つのだ。

「…………この人たちは戦うだろうか」

「アーリンもギデオンも、メイリオも、みんなそうする」

「そうか…………わかった」  
なるほどな。

自分がここに来た意味というものはまだわからない。

だが降りかかる火の粉も直面する危機も、無視しろというお達しは受けた覚えもないだろう。

このオルカ、無謀さは少々好きである。

「オルカ、そっちは」

「こつちのが早い」

ふと下を見れば、皆が正門前に向かって出撃の準備をし走っていた。

自分たちとその街を護るための戦いに赴くつもりなのだろう。



自分は展望台から飛び降り、屋根を滑ってそのまま飛び降りるのだ。颯爽とした登場、そして時間の短縮、このオルカは戦闘職の皆に比べると足も遅いしなによりSPが足りず息切れしやすいので、こうするのが最適解である。

どしん、と飛び降り、うつむいた顔は夕日の暮れに従って暗闇に落ちる。

そして—— 微動だにしない。

さすがに見かねたのか、店主ちゃんが上から声をかけてきた。

「オ、オルカあ!？」

「フフ……」

フフ……我ら高レベル者の最大の敵がこんなところにあるなんてな……世界が“現実”になったことをすっかり忘れていた。そうだ、これは我らを大きく害する刃でそして覚悟を崩す必殺の一撃、そう、これは——。

「落下ダメージ痛い……」

ごめんしばらく動けそうにない。